



Læsefrugter

i Tanabes Seminarium,
2018 (Vol.20)

Nagiko.A

ANALYS OCH FÖRSTÅELSE AV NORDISK LITTERATUR

ANALYS OCH FÖRSTÅELSE AV NORDISK LITTERATUR

Læsefrugter

i Tanabes Seminarium, 2018 (Vol.20)

大 阪 大 学
外国語学部 北欧文学ゼミ

目次

はしがき	田辺欧 i
文学ゼミ論集 20 周年記念に寄せて	大辺理恵・梅谷綾 iv

第一部 北欧の詩

—デンマーク編—

Fritz Andersen の詩	今城千慧莉 1
Ludvig Holstein の詩	大島虹歩 6
Johan Krohn の詩	糟谷有花 9
Tove Meyer の詩	浅妻夏香 12
Hulda Lütken の詩	飯村優生 15
Janina Katz の詩	今石茉那 20
Henrik Nordbrandt の詩	勝矢博子 24
Henrik Nordbrandt の詩	菊井彰乃 30
H.C. Andersen の詩	栗林利佳 33
Anne Linnet の詩	藤原希 36
Piet Hein の詩	堀聖我 40

—スウェーデン編—

Vilhelm Ekelund の詩	有園菜希子 43
Karin Boye の詩	片井優花 48
Lisa Sandell の詩	伊地知俊紀 54
Carl Jonas Love Almqvist の詩	大鋸瑞穂 57
Anna Rydstedt の詩	竹内あゆみ 63
Carl Jonas Love Almqvist の詩	日野美南子 66
Ernst Josephson の詩	山口祐奈 70
Ann Jäderlund の詩	渡部和泉 73

第二部 卒業生寄稿

1990 年入学.....	77
1991 年入学.....	80
1993 年入学.....	81
1995 年入学.....	85
1997 年入学.....	86
1998 年入学.....	87
1999 年入学.....	90
2001 年入学.....	92
2002 年入学.....	93
2003 年入学.....	94
2004 年入学.....	95
2005 年入学.....	98
2006 年入学.....	100
2008 年入学.....	104
2009 年入学.....	106
2010 年入学.....	109
2011 年入学.....	114
2012 年入学.....	117
2013 年入学.....	118
2014 年入学.....	119

第三部 特別寄稿

キェルケゴールの詩	久保田勝己 121
-----------------	-----------

第四部 田辺ゼミ論集目次一覧..... 153

第五部 詩翻訳リスト..... 177

私が北欧文学に出会った原点は、思い返してみれば大学でキリスト教学と哲学入門の授業で学んだキェルケゴールにあると思う。アンデルセンは幼い時に童話を読んではいたが、デンマーク人であることを意識したことはなかった。キェルケゴールの姓が「教会墓地」という意味を持つことに妙な関心を抱き、「北欧」が生んだ憂愁なる哲学者であるということになぜか強く惹かれた。『死に至る病』で期末レポート（今にして思えばかなりの力作）を書いたが、どうまとめてよいかわからず、どのレポートよりも、もしかしたら卒論よりも苦戦した思い出がある。ただ一つ、心に深く刻み込まれているのは「神の前に単独者として立つ」、彼の孤立無援の思想だった。

現在私が授業で必ず「詩」を扱うきっかけとなったことが二つある。元来私は文学少女でも読書家でもなかったが、昔から詩は好きだった。詩が決定的に自分の心の拠り所となったのは、大学で同級生が自殺したときだった。当時その子ととくに親しくしていたわけではなかったのに、なぜ彼女が自ら「死」を選んだのか、なぜ「生」を放棄したのか、その事実も理由も受け入れることができず、大げさな言い方をすれば、「彼女は私の代わりに死んだのだ」と感じ、ただ恐ろしくて身体が震えた。逃げ場を求め、すぐさま高校時代の国語の先生の元を訪れたのを今でも忘れることができない。「今あなたに一番読んでほしい本」といって手渡されたのが、八木重吉という詩人の詩集だった。知る人ぞ知る寡作の詩人だが、その詩人の代表作「素朴な琴」（このあかるさのなかへ／ひとつの素朴な琴をおけば／秋の美しさに耐えかね／琴はしずかに鳴りいだすだろう）がすうっと私の心に沁み入った。心の中にぽっかりと空いた喪失感、容易に言葉にすることのできない淋しさ、悲しさ、それらをそっと慰めてくれるような、そんな静かで温かみのある言葉、誦むときに響いてくる美しい音色が心の琴線にふれた。それから八木重吉の詩、そしてその後は萩原朔太郎の詩にのめり込むようになっていく。

もう一つはデンマークで留学生活を送っているときに再会した詩の世界だ。1989年9月より2年間ほどコペンハーゲン大学・北欧語研究科でデンマーク文学分析の授業を履修した。米国カリフォルニア大学で1年間北欧文学の客員教授を務め、帰国されたばかりのPil Dahlerup（ピール・ダレロプ）先生が、当時欧米で最盛期を迎えていた文学理論を講義されるというとても刺激的な授業だった。文学理論は私にとっては至極難解で、当時翻訳出版されたばかりの「永遠の文学理論書」と言われるイーグルトンの『文学とは何か』を日本からすぐに送ってもらい、日本語版の虎の巻を片手に必死に予習した覚えがある。しかし付け焼き刃の勉強で文学理論を咀嚼するのに、私の能力は到底及ばなかった。ただそれでもその授業を放棄せずに済んだのは、ダレロプ先生が毎授業の最初に用意して下さった“Dagens digt”（「今日の詩」）と題する、「詩を誦み、詩を読む」豊かな時間があったからだと思う。この時間の最初に出会ったのは戦後の形而上派詩人ポール・ラ・クーア（Paul la Cour）の“Gry”（「夜明け」）と題する詩だった。最初に読んだ北欧の詩は難しかった。訳そうと思っても簡単に訳すことができないのに、詩の中で用いられている一つ一つの言

葉、そしてそれらの言葉の持つ内在的な意味、そして言葉の音感に魅了され、何かを感じることの喜び、そしてそれを言葉に言い表すことのできないもどかしさ、その相矛盾する感覚を体験することが、私にとって北欧文学と向き合う大切な時間へと繋がっていったのだと思う。

若松英輔という批評家が「詩を味わうとは、自らの心の奥にあるものを感じようとする営みであるだけでなく、他者、そして自然、さらには目に見えない存在との関係性を確かめようとする」と述べている。また「詩とは、言葉によって容易に言葉たり得ないものを表現しようとする営みである」と述べている。私が北欧の詩を読むなかで体験、そして経験してきたことは、まさに若松が述べている「自らの心の奥にあるものを感じようとする」とであると同時に、日本人である私が異国の北欧人との関係性について考えること、北欧の自然そして風土を感じることで、さらにはその両者の違いを超越する普遍的な何かを感じることでないかと思う。2年間の授業で出会った数多くの詩のなかで覚えている詩はそれほど多くはないのだが、なかでも一番心に残っているのはモーデン・ニルスン (Morten Nielsen) という 22 歳の若さでレジスタン運動のさなかに命を落とした夭折の詩人の短い詩「春の地平線」(Foraarets Horisont) である。私はこの詩を読んだ時、すぐに八木重吉の詩に思いを馳せた。ともに夭折の詩人という共通点もあるが、簡潔な言葉の選択、そして陰陽綯い交ぜに織りなされたニュアンス溢れる色と響きが、ちょうど八木重吉の詩を読んだときと同様、私の心のなかにすうっと沁み入ってきたからだ。この詩は、後に、2002 年のゼミ論集で久保田さんによって素晴らしい日本語訳がつけられる。(春景色：地は露に濡れ輝いて／天は霞と垂れ込めて／人は恵みを持て余し／涙こらえる術もなし)。そしてこの 4 行詩は短歌にも翻案 (アダプテーション！) された。「霞たち地は潤ひて輝ける恵みの春こそ泣かまほしけれ」

デンマークから帰国後、幸いにも大阪外国語大学デンマーク・スウェーデン語学科でデンマーク語とデンマーク文学を教える機会がもたらされたとき、私はダレロプ先生を見習い、授業の中で必ず詩を取り扱おうと心に決めた。1994 年から「デンマーク文学演習」の授業を担当することになったが、当時はまだ私は本当に駆け出しの新米教師で授業をこなすことで精一杯の日々だった。自分でもどういう授業をしたか、ほとんど思い出せない。ところが今回、まだゼミ論集を発行していなかったときの最初期の卒業生にも声をかけて、「ゼミ論集 20 周年記念号」に何か寄稿してもらえませんかとお願ひすると、何人かの卒業生が快く引き受けてくれ、素晴らしい文章を寄せてくださった。それを読んでいてびっくりしたのは、最初から授業で「詩を誦み、詩を読む」時間を持っていたこと、そしてその時間のことを卒業生のみなさんが懐かしく思い出してくださっていたことだった。またゼミの時間を通して一人一人が出会った北欧文学・文化の世界を私に想い起こさせてくれたことだった。本当に嬉しかった。

ゼミ論集の創刊号は 1999 年度、2000 年の 3 月に *Analyser af moderne lyrik* というタイトルで出された小冊子だ。執筆者 5 名、片面印刷で 32 枚。現在の両面印刷だとわずかに 16 枚にしかない。当時パソコンはまだ登場していなかった。ワープロ作業、色画用紙の表紙、ホッチキス留めしたものを製本テープで包むという、文集を編むようなささやかな

ものだったが、この頃から「詩を読んで解釈する」ことをゼミの授業の根幹においてきたことが改めて懐かしく思い出される。2000 年度の第 2 号で、はじめて私は「はしがき」だけを担当した。そのとき私は、その後自分のライフワークとなるスウェーデン語系フィンランド詩人のエーディット・スーデルグラン (Edith Södergran) の「北欧の春」(Nordisk vår) を訳して引用した。1995 年にスーデルグランの詩にめぐり会ったこと、これも私にとっては決定的な出会いだった。のちにスーデルグランの詩の世界を一冊の本『待ちのぞむ魂』に編むことができたのは、これまでのゼミの中でデンマーク文学のみならず、2007 年からスウェーデン文学にも積極的に関わる機会が与えられたからに他ならない。これまでに読んだ詩人は 105 人、そして取り上げた詩の総数は 268 編に上る。そのなかには、この記念号に寄稿してくれた卒業生からの詩の翻訳寄稿も含まれる。遠いスウェーデンで活躍している三谷くん、東京でバリバリ働いている三谷くんと同期の安田さん、そして学生時代からスウェーデンの讃美歌を訳してくれていた菊地さん、そしてやはり同期で言語ゼミと文学ゼミ双方で奮闘してくれた中谷内さん、本当にどうもありがとう。

文学ゼミは上に述べたように、2007 年からスウェーデン語専攻の学生さんも加わり、初期の 5 名ほどの小家族から、現在では 15 名を超える大家族へと変貌を遂げていく。ゼミ論集の表紙も両専攻語の学生さんが交互に担当してくれる。文学ゼミには芸術的センスに優れたゼミ生が必ず誰かいて、素晴らしい表紙を飾ってくれる。この 20 周年記念号は表の表紙に今年のゼミ生の制作した絵を、裏の表紙にはこれまでの 1 号～19 号までの表紙をすべて載せることにした。どうか裏表紙もじっくりとご覧いただきたい。初期の頃は描いてくれた絵をカラーコピーし、それを一冊一冊表紙に糊付けするという、今となってはレアものと言えるだろう。今年の表紙はスウェーデン文学ゼミの担当で、4 年生の有園さんが「北欧神話」をイメージしたこれまた素敵な絵を描いてくれた。

最後にこの記念号に関わってくれたすべての人にお礼を述べたい。寄稿してくれた卒業生の数は 62 名、現役生の投稿が 19 名、そしてこのゼミをいつも見守り支えてくれたデンマーク語の大辺先生、スウェーデン語の梅谷先生が特別寄稿してくださった。久保田さんは長年ゼミに関わられた最長老として、素晴らしい論考を寄稿してくださった。総勢 84 名の人によってこの記念号は完成した。今年の編集作業は、現役生の原稿編集を有園さん、卒業生からの寄稿編集を飯村さん中心に担ってもらい、浅妻さん、勝矢さん、大鋸さんが校正に協力してくれた。また大鋸さんにはこの特別号の永久保存版の表装を担当してもらった。彼女には昨年度スウェーデンのフォルクフーグスコーラで本の装丁コースで勉強してきたことを活かしてもらえ、本当に幸運だった。

これからもゼミのなかで、「詩」を通して文学と出会い、北欧と出会い、言葉の本質を知ることが学生たちと共有し、かつ私たち一人一人が自らの心の奥にあるものと対話していく時間を見出していくことができればと願っている。

文学ゼミ論集 20 周年記念に寄せて

大辺 理恵(デンマーク語特任講師)

文学ゼミ論集が今号をもって 20 周年を迎えられるとのこと、心よりお祝い申し上げます。20 年もの長きにわたり、文学ゼミの学生さんたちとともに北欧文学を楽しみながら学び、また学生さんたちを指導されてきた田辺先生におかれましては、その喜びもひとしおのことと存じます。

私自身は、文学ゼミ所属ではなく、言語ゼミ所属であったため、本来であれば今号に名前を連ねる立場にはありません。ですが今回このように図々しくも寄稿をしておりますのは、2002 年から 2006 年に私が修士・博士課程の学生であった頃、そして 2009 年以降大阪大学デンマーク語専攻で非常勤講師としてデンマーク語を教え始めて以降、田辺先生そして文学ゼミに所属する皆さんから非常に多くのことを学ばせてもらったからです。

まずは私が修士・博士課程の学生であった頃、私はデンマーク語学が専門でしたが、同時期にデンマーク文学を専門とする修士学生として、大東さん、稲垣さん、久保田さんそして手島さんが在籍していました。院生になると学部時代とは違って、一緒に学ぶ仲間というのはほとんどいなくなってしまいます。語学を専門に選んだ私は、本来であれば孤独な院生生活を送っていてもおかしくはないところを、文学を専門にする仲間に自分の院生生活を助けてもらい、デンマークに留学した後も色々と支えてもらいました。一度、院生向けの文学ゼミに参加させてもらったことがあります。比較的短い文を例文として取り扱うことの多い言語ゼミに対して、文学ゼミでは多くの文からなるテキスト全体を取り扱っていました。また、対象となる言語(デンマーク語)における構造、または意味と形式の関係について焦点を当てる言語ゼミに対して、文学ゼミでは対象となる作品が作家にとってどのような意味を持つのか、またどのような社会背景・歴史背景をもとに書かれているのかということを取り扱っているようでした。当時の私はまだよく理解してはいなかったと思いますが、この時期に文学を専門とする院生仲間と交流できたことは、私自身のその後のデンマーク語学研究に大きく影響を与えていると思います。(余談ですがこの時期にすでに、私の直接の指導教官であった新谷先生は私に「文学作品を読め！フィクションを読め！僕は文学は分からん、だけど文学作品を読むことはデンマーク語を上達させる良い方法だ！」と何度も仰っていました。当時の私は残念ながらあまり真剣にその言葉を受け止めてはいませんでした。)

修士課程までの私の興味は、平たく言えば、見た目の差異と意味の差異の関連(A という形式ではなく B という形式を選ぶことによって生じる意味の違い)などにありましたが、博士課程以降私の興味は別の方へと移っていきました。それは、話者はどのようにして自分自身の意図や願望、相手に対しての不満や反論、そして自分自身の意見・見解が正しいということに対する自信あるいは自信のなさを、言語を使って表しているのだろう、というものでした。このような興味から、私は博士課程以降、自分の研究対象として「法助動詞」や「心態詞」などに取り組んでいます。これらの文法事項を研究するにあたっては、短い文とにらめっこをしていてもどうにもなりません。必要になってくるのは、文脈です。例えば kat と

いうのは恐らく 90%の割合でどのような文に出てきても「ネコ」と訳せるでしょう。(ただ、文脈によっては「自分がいつも翻弄されている彼女」であるとか「劇でネコ役を演じている人」などの意味で使われる場合があるかもしれません。)しかし、skulle の意味や da の意味というのは、それらが使われている文の前後の文脈なしには、その意味を規定することができません。ですから私が現在取り組んでいる研究において、例文を見つけようと思った場合、自ずとデンマーク語で書かれた文学作品に頼らざるを得なくなっており、またひとつの文の意味だけではなく、複数の文からなるある程度まとまったテキストにおける文脈を理解することが不可欠となっています。つまり現在私は、文学作品から例文を見つけ、それらをもとに言語的な研究を行っており、そういう意味では言語ゼミと文学ゼミのどちらにも親しみを感じています。

2009 年以降、大阪大学デンマーク語専攻で教え始めてからは、田辺先生そして文学ゼミの学生さんたちのご厚意で、打ち上げなどに呼んで頂き、非常に楽しい時間を過ごさせてもらいました。また 2011 年以降は仕事の関係で、田辺先生と一緒に過ごす時間も増え、先生からデンマーク文学の流れや北欧文学におけるデンマーク文学の特異性など、色々なことを直に教えて頂くという非常に贅沢な時間を過ごしました。現在、私が講読の授業で文学作品を取り扱うことができているのは、田辺先生のおかげです。また院生時代からずっと仲良くして頂いている久保田さんには、何度もキェルケゴールについて語ってもらいました。いつかキェルケゴールのデンマーク語を対象とした研究もやってみたいなあと思っています。そして学部時代の同期でもあり、留学時代に色々とお助けてもらった萬屋くんには、美術史という観点からデンマークの文化・美術について常に多くのことを教えてもらっています。

私に様々なことを教えてくださった田辺先生そして文学ゼミの皆さん、本当にどうもありがとうございました。来年度(2019 年度)からは、退官される新谷先生に代わり、僭越ながら私が言語ゼミを担当することになりました。まだまだ分からないことが多く頼りない私ですが、今後とも文学ゼミの皆さんと学術的にも個人的にも交流を続けることができればこれほど嬉しいことはありません。

最後になりますが、今後の文学ゼミと文学ゼミ論集のさらなる発展をお祈り申し上げます。

梅谷 綾(スウェーデン語非常勤講師)

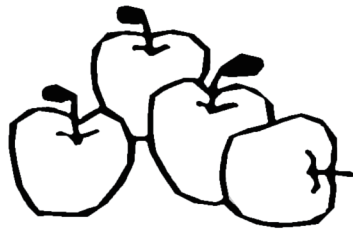
田辺先生，デンマーク語・スウェーデン語文学ゼミの歴代ゼミ生の皆さま，ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。論集の編集を何度かお手伝いしただけの私まで今回こうして 20 周年記念号へのコメントを寄稿する機会を頂けて，とても光栄です。

私が非常勤講師として田辺先生をはじめデンマーク語・スウェーデン語研究室の先生方と一緒に仕事をさせて頂くようになりもうすぐ丸四年になります。この四年間で先生方がいかに学生達のことを考えて努力や苦労を重ねながら指導にあたっておられるかを目の当たりにしました。中でも田辺先生は特に学生一人一人との交流を大切にされていて，ゼミ論集という伝統が今日まで続いてきたのはきっとそんな田辺先生のお人柄や指導力の賜物なのだろうと思います。

これからもこの素敵な伝統が続きますように！先生，私にお手伝い出来ることがあれば，どんなことでもぜひ仰ってくださいね！

第一部

北欧の詩



Fritz Andersen の詩

今城千慧莉

I skovens dybe, stille ro

深く、静謐な森の安らぎ

I skovens dybe, stille ro,
hvor sangerhære bo,
hvor sjælen lytted mangen gang
til fuglens glade sang;
der er idyllisk stille fred
i skovens ensomhed,
og hjertets længsler tie her,
hvor fred og hvile er.

深く、静謐な森の安らぎ、
そこには楽隊が居を構え、
魂は何度も耳を傾けた
鳥が歌う歓びのうたに。
調和的で静かな長閑さがある
森の孤独のなかには、
そして心のうちの憧れは沈黙する、
平和と休息のこの場所で。

Hør! landsbyklokken lyder ned,
bebuder aftenfred,
småfuglen, før den går til blund,
end kvidrer lidt en stund;
I mosen kvækker højt en frø,
stærkt damper mark og sø;
nu klokken tier, - aftnens fred
sig stille sænker ned.

耳を澄ましてごらん！村の鐘の音が降り注ぐ、
黄昏れ時の静けさを報せているのだ、
小鳥が、眠りにつく前の、
少しの間未だに細くさえずっている。
湿原では蛙が一匹朗々と鳴き、
野や湖から濃い蒸気が上がる。
今や鐘は沈黙し、一夕暮れ時の閑寂
静かに夜の帳が下りる。

(出典：FOLKEHØJSKOLENS SANGBOG, 1982)

(今城千慧莉訳)

1. 作者紹介

Fritz Andersen (1829-1910) はデンマークの詩人であり作曲家である。正式な表記は Johannes Fritz Emanuel Andersen. 1829 年にコペンハーゲンで生まれ、音楽教師として活動する一方、作詞、作曲を行った。1864 年には、学校で使用する音楽を集めた歌集本を出版した。

彼の生きた 19 世紀はデンマーク黄金時代と呼ばれ、数多くの著名な芸術家が活動していた。特に文学ではハンス・クリスチャン・アンデルセンなどが知られている。

2. 作品紹介

FOLKEHØJSKOLENS SANGBOG『フォルケホイスコーレのための合唱曲集』に収録されている詩は、讃美歌やデンマークの歌、デンマークの民謡、そして他国（フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデン、フランス、ドイツ、イングランド／アメリカ）の歌に分類されている。本詩”I skovens dybe, stille ro”はその中の Danske sange – Årstiderne（デンマークの歌―季節）に収録されている。夏の終わりを感じさせるこの歌は、Langeland の民謡に Fritz Andersen が詩をつけたものである。

しかしこの詩はもともと作者不明として扱われ、H.C.Andersen の作だと考えられていた。そのため、今回利用した文献 *FOLKEHØJSKOLENS SANGBOG* には、出典部分に Anonymt 1864 i » To – og Trestemmige Sange til Skolebrug« og under mærket A. i 2. ude. 1868 と記述されている。これは 1864 年に出版された際には Anonymt（匿名）とあるように作者は不明であったが、1868 年に出版された第二版には mærket A と記述されており、作者の姓である Andersen が判明していたことを意味している。



3. 詩の解釈

3.1. 詩の構造

本詩は二連の比較的短い詩であり、ro / bo, gang / sang のように二行ずつ韻を踏む形式をとっている。このような詩は一定の脚韻構成を備えている韻文詩（定型詩）であり、脚韻を踏むことで詩の格調を高め、意味を効果的にしている。また定型詩は 19 世紀末までヨーロッパの主流であったため、本詩もそれに則った形で作られたと考えられる。さらにデンマーク黄金時代にヨーロッパではロマン主義が主流であったことから、作者はロマン主義の影響を受けているのではないかと考えられる。ロマン主義の作品は個人の感情や個性、自由などを尊重し、自然との一体感や神秘的な体験、無限なものへの憧れを表現して

いる。以下では連ごとに詩の解釈を行いながら、詩に現れるロマン主義の影響を考察していきたい。

3.2. 第1連

I skovens dybe, stille ro,
hvor sangerhære bo,
hvor sjælen lytted mangen gang
til fuglens glade sang;
der er idyllisk stille fred
i skovens ensomhed,
og hjertets længsler tie her,
hvor fred og hvile er.

深く、静謐な森の安らぎ,
そこには楽隊が居を構え,
魂は何度も耳を傾けた
鳥が歌う歓びのうたに.
調和的で静かな長閑さがある
森の孤独のなかには,
そして心のうちの憧れは沈黙する,
平和と休息のこの場所で.

第1連は自然のなかの情景を聴覚的な表現を用いて書き表している。このことを示すために、静と動（音）に対応する語を以下に挙げていく。静けさ、または静の状態を表す語は傍線部の dyb（深い）、stille（静かな）、ro（平穏）、fred（平和）、ensomhed（孤独）、tie（黙る）、hvile（休憩）である。反対に動（音）に関連する語は波線部の sangerhære（楽隊）、lytte（聴く）、sang（歌）である。本詩は全体を通して stille や fred といった静を表す語が頻出する。ここでは視覚的な表現を排し聴覚的な表現を使うことで、森の静けさ、つまり stille や fred の状態をより一層強調していると考えられる。

また第1連は森の静けさを表現するとともに、sjæl（魂）や hjerte（心）といった人間の精神的な部分を用いて自然の中に安らぎを見出している。これらの表現からはロマン主義的な自然への憧憬を見ることができる。

3.3. 第2連

Hør! landsbyklokken lyder ned,
bebuder aftenfred,
småfuglen, før den går til blund,
end kvidrer lidt en stund;
I mosen kvækker højt en frø,
stærkt damper mark og sø;
nu klokken tier, - aftnens fred
sig stille sænker ned.

耳を澄ましてごらん！村の鐘が降り注いでいく,
黄昏れ時の静けさを報せているのだ,
小鳥が、眠りにつく前の、
少しの間未だに細くさえずっている.
湿原では蛙が一匹朗々と鳴き,
野や湖から濃い蒸気が上がる.
今や鐘は沈黙し, - 夕暮れ時の閑寂
静かに夜の帳が下りる.

第2連も第1連と同様に静と動（音）の対比がなされている。静に対応する単語は傍線部の *aftenfred* / *aftens fred*（夕べの平和）、*tie*（黙る）、*stille*（静かな）であり、動（音）に対応する語は波線部の *høre*（聞く）、*landsbyklokken*（村の鐘）、*lyder*（響く）、*bebude*（発表する）、*kvidre*（さえずる）、*kvække*（鳴く）である。音を発しているのは鐘、小鳥、そして蛙の順であり、ここにも作者の意図が現れていると考えることができる。

鐘の音が最初に来る理由は、第1連が純粹に自然の中だけに存在する視点で語られているとすれば、第2連ではその中に人間の営みが混ざってくるからである。人工的な鐘の音は二つの世界が融合し始めるきっかけを与えているのではないだろうか。またこのことは第2連1行目の *lyder ned* という表現からも考察することができる。通常 *lyde* は響く、聞こえるといった意味であるが、*ned*（下へ）と連なることで音の粒子が上から下へ、地面に染み込むようなイメージを持たせる。人工物の音が地面に染みる、つまり自然と人間の二つの世界が混ざり合うことを示唆していると考えられる。

次に小鳥と蛙の表現には対比が用いられるとともに、時間の経過を表している。小型の鳥の活動時間は主に昼間であり、本詩の小鳥も寢床で最後の一声を上げるのみである。一方、蛙の繁殖行動は一般的には天敵のいない夜に行われるため、小鳥とは対照的に日暮れ頃から朗々と鳴き始める。以上から、作者は三種類の音を用いて第1連からの詩の世界観を変え、ある種の神秘的な情景を描きつつ自然との一体感を表現していると考えられる。

また第2連では音に関連しない動の語も登場する。それが点線部の *dampe*（蒸気を出す）と *sænke*（沈む）であり、他の動の語と比べるとどちらも視覚的な語である。通常、日が傾いていくにつれて視界は悪くなる。しかし作者はあえて詩の表現を視覚的イメージに切り替えることで、暗い夜の闇を詩の流れに引き寄せたと言えるのではないだろうか。

3.4. 訳出について

本詩では *fred* という語が頻出する。簡単に訳すと「平和」となるが、これは本詩の表現にそぐわない。なぜなら日本語の「平和」という語は争いのない状態、つまり人間の社会的な関係や状態を指すものであるからだ。本詩での *fred* の意味は、人間社会が関与しない自然の静寂や穏やかさを指していると考えられた。さらに *aftenfred* / *aftens fred* は日本語にはない言葉である。「～の夕べ」という言葉は日本語に存在するが、こちらは主に夕方に催されるイベント事を指す。これらの日本語にはない表現は、訳者の受け取り方によって意味が変わってくる。筆者は訳に幅を持たせるため、あえて様々な語彙を用いて *fred* を訳した。第1連5行目では、前の行と掛け合わせて鳥が伸び伸びと歌う「長閑けさ」を、8行目ではあえて「平和」と訳すことで「人がいない」という状態を相対的に表現している。第2連2行目の *aftenfred* は「静けさ」と訳すことで人為的な鐘の音が入り込む自然の状態を表し、7行目の *aftens fred* は聞こえていた音がなくなり無の状態になったことを意図している。

4. まとめ

以上の考察と作者の年代を鑑みて, "I skovens dybe, stille ro"はロマン主義の影響を受けた詩であると言えるだろう. またこの詩はデンマークの自然を描いたものでありながら, 日本的な解釈を加えることもできる. 例えば黄昏時 (aften) は誰そ彼とも言い, 生と死, あの世とこの世の境界が曖昧になる時間帯と言われている. そして古来日本では山や森が幽世の入り口とされてきたことから, 自然は異界との境界であった. そのため夕暮れ時に「混ざってしまう」という感覚は日本人にも理解できるのではないだろうか. 未知への好奇心と一体感という点で, 本詩におけるデンマークのロマン主義と日本の文化には共通する感性があると考えられる.

5. 参考文献

5.1. 使用テキスト

FORENINGEN FOR FOLKEHØJSKOLER I DANMARK. (1982). *FOLKEHØJSKOLENS SANGBOG*, Odense : Foreningens Forlag.

5.2. インターネット資料

Det kongelige bibliotek. *Digitale samlinger*,

<http://www.kb.dk/da/soeg/?query=Fritz+Andersen>. (2019.2.13 確認)

HØJSKOLESANGBOGEN. *I skovens dybe stille ro*,

<https://www.hojskolesangbogen.dk/nyheder/2017/sep/i-skovens-dybe-stille-ro/>.

(2019.2.13 確認)

Wikipedia. 定型詩, <https://ja.wikipedia.org/wiki/定型詩>. (2019.2.13 確認)

コトバンク. ロマン主義, <https://kotobank.jp/word/ロマン主義>. (2019.2.13 確認)

Ludvig Holstein の詩

大島虹歩

Æbleblomst

Du fine, hvide Æbleblomst!
Hvem gav dig dette Lykkeskær?
Ak, jeg er Solens Hjertenskær!

Hvor fik du denne Purpurglød,
som brænder i din fine Hud?
Ak, jeg er Solens Foraarsbrud!

Velsignet af min Brudgoms Kys
jeg lever i hans Aandedrag
en kort, lykkelig Foraarsdag.

Og naar hans sidste, varme Kys
i Aftenrøden strejfer mig,
saa hvisker jeg: Jeg elsker dig!

Og lukker mig og bøjer mig
og drysser over Græsset ud
mit hvide Flor, mit Bryllupsskrud —

林檎の花

素敵で白い、林檎の花の君！
誰が君にこの幸福の輝きを贈ったんだ？
ああ、私は太陽の恋人ね！

君はどこでこの紫の光を手に入れたんだ？
君の美しい肌で燃えるような
ああ、私は太陽の春の花嫁ね！

新郎の口づけに祝福されて
私は彼の息の中で生きる
短い、幸せな春の日。

そして彼の最後の熱い口づけが
夕暮れの光の中でそっと私に触れるとき、
私はささやくの、愛してるわ！

そして私は目を閉じ首を垂れ
草の上に振りまく
私の白い花、私の花嫁衣装を —

(出典： *Digte*, 1895)

(大島虹歩訳)

1. 作者について：Ludvig Holstein(1864-1963)

1890年代のデンマーク作家の一人。1895年31歳の時に初の詩集 *Digte*『詩集』を出版した。宗教哲学の散文書 *Den grønne Mark*『緑の印』の中で、彼は古い考えに捉われない汎神論的な自然観にインスピレーションを受けていると述べている。彼は主にコペンハーゲンに住んでおり、彼の詩はシェラン島の自然と密接に関わっている。

“Det lysner over Agres Felt”, “Det er i Dag et Vejer”が *Højskolesangbog* に収録されている。デンマークの最も有名な作曲家カール・ニールセン(Carl Nielsen, 1865-1931)は“Æbleblomst”を含む Ludvig Holstein の6つの詩にメロディーをつけた。

2. 表現分析

1 連目では、作者と林檎の花が会話をしている、1, 2 行目の“du”（君）、3 行目の“jeg”（私）は“Æbleblomst”（林檎の花）を指し、1, 2 行目の作者の林檎の花への問いかけに対する、3 行目の“Jeg er Solens Hjertenskær”（私は太陽の恋人）という林檎の花の答えから、“dette Lykkeskær”（幸福の輝き）を贈ったのは、太陽であるとわかる。つまり、この連では、林檎の白い花が太陽の光を浴びて輝いている様子が描かれている。

2 連目も1 連目と同様、作者と林檎の花の会話である。林檎の花は、花弁の外側が青みがかった濃いピンク色をしているため、蕾の状態では赤く、花が開くと白く見える。“purpurglød”（紫の光）は、外側の花弁を指している。

3 連目に登場する“Brudgom”（新郎）は太陽である。「花嫁」である林檎の花は、太陽と契りを結び、太陽の光という恩恵を受けることで生きていけるのである。林檎の花は非常に短命で2〜3日で散ってしまう。「短い、幸せな春の日」とあるが、その数日間のみ林檎の花は「新郎」である太陽に会うことができるということが示唆されている。

4 連目では、太陽が沈む寸前のわずかな光が林檎の花に当たる様子が表現されている。その瞬間、林檎の花は太陽に愛を告げる。

太陽のもとで生きてきた林檎の花は、日が落ちると同時にその生涯を終える。5 連目では、花びらがしぼみ、しおれ、草の上に散っていく様子が擬人法で描かれている。

3. まとめ

この詩は林檎の花の太陽への愛や儚い生涯が、林檎の花の視点から描かれている。「肌」、「口づけ」、「息」など擬人化を効果的に行うことで、生き生きとした印象を受ける。1, 2 連目は作者と林檎の花の対話形式となっており、林檎の花がしみじみと太陽に思いを馳せる様子が描かれている。3 連目では林檎の花が太陽のもとで息づいている様子が読み取れる。4 連目では太陽が沈む直前の盛り上がり表現し、5 連目で花が散り林檎の花が人生の幕を閉じる描写がされている。また、それぞれの連で韻を踏んでおり、軽やかなリズム感が生まれている。

4. 参考資料

Anne Birgitte Richard, Henrik Wivel & Johannes Nørregaard Frandsen. (2009).

Dansk litteraturs historie:1870-1920. Copenhagen: Gyldendal.

Jørgen I. Jense. (2015). *Carl Nielsen-Danskeren*. Copenhagen: Gyldendal.

Den store danske. *Ludvig Holstein*,

http://denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/1900-14/Ludvig_Holstein. (2019.2.20 確認).

Johan Krohn の詩

糟谷有花

Efter Julen

Og Julen endte –Børnene fik
igjen deres Bøger fat og gik
til Skolen glad og fornøjet
Der tænkte de ikke paa Julen; men
naar Klokken to de kom hjem igjen,
de leged med Juletoj.

Og deres Juletræ de beholdt,
det vilde staa grønt, blev det nok saa koldt,
det kunde de ikke miste.
Paa Duehustaget det blev sat op
og Spurve kvidrede i dets Top,
og Duerne sad paa dets Kviste.

Og træet- ja, det blev et Syn at se,
da det stod fuldt af den hvide Sne;
det var som med Sølv bedækket.-
Men den Gang Foraarsfuglene sang,
med sine brune Grene det hang,
og Toppen var ogsaa knækket

Og Skraldemanden efter det kom,
men Børnene syntes ikke derom,
den Gang det paa Vognen knejste.
Det var jo rigtignok visent, men
det var dog, som om en gammel Ven
for sidste Gang fra dem rejste.

クリスマスの後

そしてクリスマスは終わった—
子ども達は再び本を持って
嬉しそうに、満足げに学校へ行った
彼らはもうクリスマスのことを考えていない。
しかし2時になると彼らは再び家に帰り
クリスマスのおもちゃで遊んだ。

そして彼らが残しておいたクリスマスツリー、
それは緑色で、とても冷たくなっていた
彼らはそれを片付けることができなかった。
家の屋根にツリーを立てた
すずめ達はその頂上でちゅちゅと鳴く
はと達はその枝に立つ

そしてツリー—そう、それは見える光になった、
雪ですっかり覆われているので。
ツリーは銀を纏っているようだった—
しかしその時春の小鳥達が歌った
ぶらさがる茶色い枝と共に
そしててっぺんも折れてしまった

そしてその後ごみ収集の人が来た
しかし子ども達は分からなかった
その時車でツリーが折られたことを。
それは確かに明らかだった、
しかしながらツリーは最後に
彼らの元を離れた友人のようだった。

(出典：Peters Jul, 1866)

(糟谷有花訳)

1. 作家紹介

Johan Krohn は 1841 年に彫刻家である父 F.C.Krohn と母 Sophie Susanne Købke の間に生まれ、1925 年に亡くなった、詩人や作家としても活躍した教育者である。1880 年から 1914 年にかけてコペンハーゲンにある私立男子校の Krebs' Skole で校長を務めた。そんな彼は子ども向けの作品を多く生み出した。代表作は本稿で扱う *Peters Jul*『ピーターのクリスマス』である。

2. 作品紹介

“Efter Julen”は 1866 年 12 月に出版された Johan Krohn の *Peters Jul*に収録されている詩の一つである。*Peters Jul*には“Før Julen”「クリスマスの前」，“Bedstemoer inviteres”「おばあちゃんを招待」，“Mørkningen Juleaften”「暗闇の中のクリスマスイブ」，“Ved Juletræet”「クリスマスツリーの側で」，“Julesangen”「クリスマスソング」，“Faers Juleviser”「お父さんのクリスマスショー」，“Juledag”「クリスマスの日」，“Et Besøg”「ある訪れ」，“Nyttaarsaften”「大晦日」，“Helligtrekongers Aften”「聖なる 3 人の王の夜」，“Efter Julen”「クリスマスの後」が収録されており、一冊を通してクリスマスのヒューグを味わうことができる構成となっている。また、子ども向けのため詩集は絵本になっており、挿絵を見ながら想像を膨らませることができる。

3. 詩の解釈

3.1. 1 連目

ここではクリスマスが終わった後、子どもたちが元気に学校へ登校する様子が描かれている。クリスマス気分はもう抜けているものの、家に帰るとクリスマスに貰ったばかりのおもちゃのプレゼントで遊んでいる。クリスマスの名残を感じさせる連である。

3.2. 2 連目

ここではクリスマスが終わり出番の終わったクリスマスツリーに焦点が当てられている。2 行目の「緑でありたかったがとても冷たくなった」というのは、クリスマスが終わっても色褪せたくないというクリスマスツリーの思いとは裏腹に、その出番が終わってしまった虚無感を表現している。この訳に該当する原文は，“det vilde staa grønt, blev det nok saa koldt”である。“blev”以下において主語と動詞の位置が逆になっているため、はじめに“selvom”（逆説の副詞）を省略していると解釈した。また、4 行目の「家の屋根にはツリーが立ち」という表現はいまいち情景が思い起こしにくい、家の後ろに立っていたクリスマスツリーが大きくなって屋根の高さを超え、家の前からでも見られるようになったことを示している。5, 6 行目における小鳥たちの登場は、クリスマスが終わった後も日常が続く様子を示している。

3.3.3 連目

1行目の「それは見えるようになった」というのは先述の通り、家の後ろに立つクリスマスツリーが屋根越しに見えるということである。また、6行目の「そして頂上も折れてしまった」というところでは、クリスマスツリーにおいて最も重要な頂上の枝も折れてしまい、クリスマスツリーではなくなってしまう様子を描いている。小鳥による日常的な動作によって、本当のクリスマスの終わりを表現しているようである。

3.4.4 連目

ここでは子どもたちとクリスマスツリーとの別れが描かれている。1連目で子どもたちはもうすっかりクリスマス気分が抜けている様子が示されていたが、ここではクリスマスツリーとの別れを惜しんでいる様子が伺える。というのも、原文2行目の”men Børnene syntes ikke derom”という箇所において、”syntes derom”というイディオムが「気に入らない、いやだ」という意味を表すからである。ゴミ収集車の中でクリスマスツリーは折られて枯れてしまい、*Peters Jul*におけるクリスマスは終わりを迎える。また、最後にツリーを「彼らの元を離れた友人のようだった」と描写しているが、そこでクリスマス期間中に子どもたちとクリスマスツリーが常に一緒にいて、友人のような存在だったということが分かる。

4. まとめ

この詩は全体を通して、クリスマスの終わりをクリスマスツリーというモチーフを用いて描いている。クリスマスツリーはクリスマスを象徴する大切なものであるが、この詩を読むとクリスマスが終わると捨てられるクリスマスツリーは、クリスマスの終わりをも象徴していると感じた。クリスマスの終わりを謳っているため一見悲しい詩にも感じられるが、その中でも小鳥のさえずりが聞こえてきたり、雪ですっかり覆われたツリーが銀をまとっているようだという描写に見られるように幻想的なシーンがあったりと、決して暗い詩ではなく、むしろ楽しい春を感じさせる詩であった。

5. 参考文献

5.1. 使用テキスト

Kalliope. *Efter Julen*. 参照日 2018 年 6 月 17 日,

参照先: <https://kalliope.org/da/text/krogn2001112511>

5.2. 参考ホームページ

Wikipedia. *Johan Krohn*. 参照日 2018 年 6 月 18 日,

参照先: https://da.wikipedia.org/wiki/Johan_Krohn

Tove Meyer の詩

浅妻夏香

Jeg går over dagenes spejl

私は日々の鏡を通り抜ける

Jeg går over dagenes spejl

私は日々の鏡を通り抜ける

og ser mig selv gynge

すると自分自身が揺れているのが見える

omvendt, dybt nede

さかさまに、深く

lysende i flaskegrønt mørke

輝きながら暗緑色の闇の中で

som en død i havbundens skove.

それは海底の森のなかに棲む死者のよう.

Skal jeg fostres i tangskovens vugge?

私は海藻の森のゆりかごの中で生み出されるのだろうか?

Skal mørkets hænder flette mig

闇の手は私に光に紡がれた幸福の衣を

min lykkes dragt af lys?

編んでくれるのだろうか?

(出典： *Lyrisk Bogen*, 1952)

(浅妻夏香訳)

1. 作者紹：Tove Meyer (1913-1972)

シュラン島北部の Usserød で生まれる。1928 年に詩を書き始め、1935 年 22 歳にして詩集 *Guds Palet*『神のパレット』でデビューを果たした。彼女の初期の詩には後期象徴主義の特徴が色濃くみられ、シュールレアリスムからもインスピレーションを得ている。彼女にとって幼少期、夢、潜在意識は詩において重要な指針であった。モダニズム作家として、1980 年代の作家にとって大きな基盤となりインスピレーションを与えた。1972 年、自らの手で生涯を終えている。

2. 考察

この詩は二連から成っており、第一連では鏡に映った自分の様子を述べている。鏡の中の自分が海底へ沈んでいく様を思わせる描写は、「死へ向かう自分」を連想させる。第二連は問いかける形で書かれており、「生み出す」や「光」という言葉から、第一連とは対照的に「生」を連想させる。ここで着目したいのは、過去形で書かれていない点である。第二連で描かれている「生」は自分の過去のものではなく、これからやってくる自分の「生」である。そしてもう一つ着目したいのは、第一連で「海底の森」、第二連で「海藻の森」という表現で描かれている、「海底」という場所である。そこで、ここではこの詩における海底と、生と死の関係について考察していく。

一方、この詩が発表されたのは 1952 年であり、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起こった象徴主義の影響をどのように受けているかについても併せて考察し、この詩から読み取れる作者の死生観について考える。

2.1. 作品の解釈

第一連では海底に沈みゆく自分の姿を描き、自分が死へ向かう様子を暗示している。第一連は一文から成り、意図的な改行によって場面が徐々に変わり、読み進めるにつれ海の深いところへ引き込まれるような感覚を読者に与える。さらに、視覚のみの描写をすることで、音のない海の底を巧みに表現している。ここで「自分」は死に対して抗うことなく、静かに、しかし確実に向かっている。これは作者の、死に対する考え方を表していると考えられる。場面が徐々に移り変わる第一連に対し、第二連では立ち止まって、自分自身、あるいは読者に問いかける形をとっている。先に述べたように、「自分の生」についてであるにも関わらず、第二連の二文は過去形ではない。このことから、第二連における「生」は自分の「死」の後にやってくる自分の「生」ではないかと推測できる。つまり、作者自身の経験していない「生」であると言える。経験していない、未知であるからこそ第二連は問いかける形なのである。また、疑問形であることにより、読者にも立ち止まって考えさせる効果をもたらす。

そして、第一連で「海底の森」、第二連で「海藻の森」と表現され、共通して海底が場面として設定されている。海底は「死」をむかえる場所であり、同時に「生」をももたらす場所なのである。つまり魂の回帰する場所であると言える。「私」という魂は、光という衣装

すなわち生を授かるのである。

2.2. 象徴主義の影響

象徴主義は事物を忠実には描かず、理想世界を喚起し、魂の状態の表現を特別扱いする印象や感覚を探究した。

作者の初期の詩には象徴主義の影響が色濃くみられると言われており、この作品は 1952 年に発表されているが、その影響がなお見受けられるモダニズムの詩である。先にも述べたように、この詩における海は回帰や原点の象徴であることが分かる。

2.3. 作者の死生観

第一連において、「自分」は海の中をさかさまに沈んで行き、遠く先にある海底、つまり「死」へと向かっているが、自ら進んで行くわけでも他の力で進められるわけでもない。このことから「死」を、作者は自分の意志や意識、あるいは他の存在とは無関係の次元で起きることのように捉えていると解釈できる。しかし、自分が「死」へ確実に向かっていることを自覚しているのである。一方、第二連で“fostres”(生み出される)という受動態の形で表現されている「生」については曖昧さが残る。受け身の形であることに着目すると、「生」は他から与えられるものであると捉えていると解釈できる。また、問いかける形をとることで、読み手に考えさせる効果をもたらしている。

4. 参考文献

4.1. 使用テキスト

Asger Schnack. (1992). *Lyrik Bogen*. Copenhagen: Munksgaard.

4.2. 参考文献

ステフェン・ハイルスコウ・ラーセン監修、早野勝巳監訳。1993 年。

『デンマーク文学史』、東京：ビネバル出版。

4.3. インターネット資料

Meyer, Tove. *Nordic Women's Literature*,

<https://nordicwomensliterature.net/writers/meyer-tove/>. (2019.2.19 確認)

Wikipedia. 象徴主義, <https://ja.wikipedia.org/wiki/象徴主義>. (2019.2.19 確認)

Hulda Lütken の詩

飯村優生

DET VAR I DAG

Det var i Dag, jeg mødte dig paa Vejen.
Det var i Dag, mit Liv blev til en Drøm.
Jeg husker ikke, hvad vi talte om.
Jeg mindes kun, at du imod mig kom.
Det var i Dag, jeg mødte dig paa vejen.

Der gives intet Liv, der gives Drøm.-
Det var en Drøm, jeg mødte dig paa Vejen.
Jeg husker ikke, hvad vi talte om.
Jeg mindes kun, at du imod mig kom.
Der gives intet Liv, der gives Drøm.-

それは今日だった

それは今日だった、道端であなたに出会ったのは。
それは今日だった、現実が夢に変わったのは。
何を話したかは覚えていない。
ただあなたが向かってきたことだけ覚えている。
それは今日だった、道端であなたに出会ったのは。

現実ではない、夢のことだー
それは夢だった、道端であなたに出会ったのは。
何を話したかは覚えていない。
ただあなたが向かってきたことだけ覚えている。
現実ではない、夢のことだー

(出典： *Digte til min elskede*, 2007)

(飯村優生訳)

1. 作者紹介：Hulda Lütken(1896-1946)

デンマーク女性作家であり詩人。学校教師の娘に生まれ、Vendsyssel で生涯を過ごす。父の学校運営を手伝いながらも執筆活動を始め、詩が地元新聞紙に取り上げられるようになる。1916 年に第一子を出産し 1917 年にその子の父親である男性と結婚するが 1923 年に破局する。

作者初めての詩集は *Debutdigtene Lys og Skygge*『処女詩集—光と影—』(1927)であり、旧来のロマン主義の形式を踏襲していることが特徴として挙げられる。その二年後に自身の経験をもとに *Degnens Hus*『ダイネンの家』(1929)を書く。続く *Lokesæd*『ロキの種』(1931)、*Uansvarlige*『無責任』(1933)においては、主人公である少女たちに対する家族の支配とその恐ろしさを描いており、フロイトの影響が所々見受けられる。*Lænnen*『縛り』(1932)においては縛られているという気持ち、それに加えて性別による不自由が原因で生じるアイデンティティ問題が取り上げられている。“DET VAR I DAG”はこの作品集の一作品である。そして彼女の最後の作品は *Saa er jeg fri*『そして私は自由』(1945)だ。この作品の語り手は男性であり、女性である作者の打ち破ることのできない男女間における葛藤が見て取れる。

2. 作品分析

ここでは Hulda Lütken の詩，“DET VAR I DAG”について、タイトルにもなっている今日(i dag)に何があったのかという問いを中心に論を述べていく。具体的にはまず繰り返しが特徴である詩の構成についてその効果を述べ、そこからさらに詩の内包する意味を分析する。意味分析の中では、特に繰り返し登場する語句“drøm”と“liv”についても解釈を加えていく。

2.1. 詩の構造について

この詩はタイトルである“Det var i Dag”という句から始まる。使用されている語句のほとんどが簡単なものであり、一文が短く区切れもよい。また文末が必ず m か n で終わっており韻が踏まれている。口なじみが良く軽快なリズム感に富んだ詩である。詩自体の特徴としては、強調構文の使用と第一連と第二連の構造の反復性の二点が挙げられる。

それではここでまず強調構文について述べていく。ここで言う強調構文とは文が“det er ～”で始まる文章のことである。“det er”に続く部分「～」が強調される部分である。この詩は 10 の文から成り立っているものであるが、そのうち 6 つがこの強調構文を用いた文である。ただ注意してほしいのは強調される部分は連によって異なっているという点で、第一連では今日(i dag)が、第二連では夢(en drøm)がそれぞれ強調部分に当てはまる。

さらに第一連と第二連は使用される単語は違うが、文章の構造及び連自体の構造としては非常に類似する点が多い。具体的に言うと、各連はそれぞれ 5 つの文から成り立っており、それぞれ第一文と第五文は一言一句変わらず全く同じ文である。第一連では“Det var i

Dag, jeg mødte dig paa Vejen.”, 第二連では”Der gives intet Liv, der gives Drøm.”がこれに当てはまる。

以上に述べたような構造には強調されている”drøm”と”liv”の対比をより明確に一層引き立てる働きがある。また反復することで書き手のより一層の感動を表すことができるだろう。

2.2. drøm と liv の対比構造

それではここで強調されている語句に焦点を当て作品を分析していこうと思う。この詩において強調されている語句とは”drøm”と”liv”のことである。ここではまず”drøm”について考える。”drøm”をデンマーク語辞書で引くと①眠っている間に経験する感覚的なもの、理路整然とした一連の情景、②将来のことなど期待を伴った非現実的な行動や計画、③非常に魅力的な人物やものとある。注目してほしいのが③の用法である。この意味から派生して「行動的で素敵な男性」という意味の”enhver svigemors drøm”という熟語や、「信じられないくらいに素敵で美しい」という意味の”som en drøm”という熟語が存在する。あなたに会ったことがきっかけで書き手の状態が変化したことから、「あなたという人物が書き手を非現実世界に連れ込むほどに非常に魅力的であった」と考えるのが妥当であろう。つまりこの詩においては①と③の用法を織り交ぜていると考えられる。

次に”liv”についてだが、これには多くの方法が見受けられた。①動植物と無機物を区別し生物を生物たらしめるもの、生命、②生物学的個体としての人間または動物、③誕生から死までの時間、生涯、④ある種の人間やグループの特定の生活様式、⑤目が覚めており意識的に考え行動することができる状態、⑥活力、活動、喜び、⑦身体的接触における身体、⑧身体の中央部、腹。”liv”はこのように様々な意味を持つ単語である。前章で述べたように”drøm”の対比的な位置に存在していることを考慮すると、この詩においての”liv”は③及び⑤の意味で用いられていると考えられる。人生において自分の意識がはっきりとしている時間、つまり現実世界のことだ。

夢想世界と現実世界を意味し、相反する意味を持つこの二つの単語を日本語訳ではそれぞれ「夢」と「現実」で表現した。また第二連第一文と最終文の”Der gives intet Liv, der gives Drøm.”については、直訳すると「現実世界では与えられない、夢想世界で与えられる」という意味になる。しかしやや不自然さが残るため、これを意識し「現実ではない、夢でのことだ」と表現した。

2.3. 詩の内包する意味、一体今日何があったのか

ここでは前章を踏まえてタイトルにて強調されている”i dag”, つまり今日一体何があったのかについて言及していく。

この詩は書き手があなた(dig)に出会ったのは今日だった、という事実を述べるところから始まる。詩全体を通して今日(i dag)という表現に対し過去形が使われているため、書き

手は出会った日の内に出会った際の感情を想起していると考えられる。この過去形の使用は読み手により一層の非現実感を与えるだろう。また”i dag”が繰り返し強調されているのは、あなたに出会ったのが今日初めてであること、つまり書き手とあなたは今までは面識が全くなかったことを強調するためだと考えられる。また書き手があなたと出会った今日この日を祝しているとも言えるだろう。

第一連二文目の”mit liv blev til drøm”という表現だが、前章の内容を踏まえると「現実が夢に変わった」という意味である。 ”drøm”という単語自体にマイナスな意味はない。つまりあなたと出会ったという経験が書き手の世界を今までとはまるで違う素晴らしいものに変えたということだ。あなたとの出会いが書き手の世界を変えたということは、この詩の意味内容の考察において重要な点のひとつである。

また各連第三文にある”Jeg husker ikke, hvad vi talte om.”だが、これは「話した内容は覚えていない」という意味だ。なぜ何を話したか覚えていないのか。それは他のことに気を取られており余裕がなかったから、つまりあなたに会ったという事実で頭がいっぱいだったからであろう。現に次に続く第四文で”Jeg mindes kun, at du imod mig kom.”、つまり「あなたが向かってきたことだけ覚えている」と述べている。書き手にとってあなたとの出会いがどれほど衝撃的だったかを表す部分だ。

これらを踏まえると、今日初めてあなたという人物に出会い、その出会いはあまりに衝撃的でそれによって世界が反転してしまうほどだった、というのが今日書き手の身に起こった出来事である。初対面の人との出会いで世界が素晴らしいものになるところは恋に落ちた人間、特に一目ぼれを経験した人間の感情の起伏の典型である。つまり語り手はあなたという人物に一目ぼれしたということだ。

「一目ぼれする」や「恋に落ちる」、「好きになる」といった直接的な意味を持つ単語や熟語を使わずに、”drøm”と”liv”という単語で示唆的に一目ぼれを表現している点がこの詩の一番の特徴である。一目ぼれのメタファーとして「夢」と「現実」を用い、それらをうまく調和させることで詩の世界をより奥深いものにしている。

3. まとめ

この詩では書き手があなたという人物に恋に落ちたことが、対比的に用いられる”drøm”と”liv”の二語によって暗示されている。第一連で強調されている単語は”liv”で、続く第二連では”drøm”が強調されている。これはまず第一連で今日現実世界で起こった出来事が書き手にとって如何に衝撃的であったかを強調し、第二連でそれによって世界がすっかり変わりその余韻に浸っている書き手の様子を表現している。衝撃や驚きといった突発的な感情から、想起や恍惚といった緩やかで現実とは離れた感情への流れが見て取れる。

ここで言及しておきたいことは”vejen”という語句の働きについてである。 ”vejen”の最も主要な意味は「道」である。この詩においては”vejen”が、現実世界が夢想世界に変わるその過程を一つの道筋として暗示していると考えられる。 ”vejen”という単語を用いて出会い

の物語性を示すことで、一目ぼれした場面を突発的なものではなく流動的なもの、よりやわらかでなめらかな体験として描いている。現実世界と夢世界を融合させることに一役買っていると言えるだろう。日本語においても夢の通り路という表現が存在する。これは「夢の中で展開されていく筋道」という意味のほかに、「夢の中で男女が会う道」という意味も持ち合わせている。夢というものが非現実的なものでありそれでいて男女の出会いを暗示するものであること、さらにそれが「みち」という語によって導かれるということは言語の壁を超えて共通する。

また詩全体を通して書き手の体験した事実とそれによって生じた感覚が入り混じっており、具体的には会ったという事実に対し覚えているという感覚、話したという事実に対し覚えていないという感覚が対応している。その客観的事実と主観的感覚の対比も鮮やかで、夢の通り路に迷い込んでしまった書き手の様子がうかがえる。

この詩は *Lænken* という詩集に収録されており、タイトルになっている“*Lænken*”の意味は「縛り」である。この詩は恋愛感情によって書き手が縛られるきっかけ、つまり二人の関係のはじまりを軽やかに詠っているのだ。

4. 参考文献

4.1. 参考文献

ステフェン・ハイルスコウ・ラーセン監修，早野勝巳監訳．『デンマーク文学史』，
東京：ビネバル出版。
Gyldendal&de enkelte digtes forfattere. (2007). *Digte til min elskede*.
Copenhagen : Gyldendal.

4.2. インターネット資料

GYLDENDAL DEN STORE DAMSKE,
denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/1914-40/Hulda_Lütken. (2018.12.31 確認).

Janina Katz の詩

今石茉那

Barnet. Farvel

Du har boet i mig
længe nok.
Du bliver nødt
til at flytte.
Jeg forlader dig
for bestandig.
Kommer ikke på
besøg.
Du ved selv
hvor længe
det har stået på.
Til sidst blev du så stridig.
Gemte mine dukker.
Lod mig ikke lege
med min lille hund.
Gå nu.
Tag mit legetøj
med.
Jeg har ikke lyst
til at blive voksen.
Men solen går ned.
Floden bliver mørk.
Jeg må ud at svømme,
ganske langsomt,
over til den modsatte kyst.
Og jeg vil ikke tage dig
med mig.

こどもよ。さようなら

あなたは私の中に住んでいた
十分長い間。
あなたはもう
出て行かなくては。
私はあなたのもとを去る
永遠に。
訪ねには
来ない。
あなた自身わかっている
どれだけ
続いたのか。
ついにあなたはとても強情になった。
私の人形を隠した。
遊ぶのを許さなかった
私の小さな犬と。
もう行って。
私のおもちゃを
持って行って。
私はなりたくない
おとなには。
でも陽は沈む。
川は昏くなる。
泳いで行かなくては、
とてもゆっくりと、
向こう岸へ。
そして私はあなたを
連れて行きたくはない。

(出典： *Mit uvirkelige liv*, 1992)

(今石茉那訳)

1. 作者紹介

Janina Katz (1939-2013)はポーランドのクラクフでユダヤ人の両親のもとに生まれた。彼女の家族のほとんどは強制収容所で亡くなったが、彼女自身はポーランドの強制労働収容所から連れ出され、彼女が「戦争の両親」と呼ぶ夫婦のもとに隠された。ここで彼女はカトリックとなる。ある日、敵の協力者だった養父は連れて行かれ、処刑された。それに関して彼女はインタビューで、自分は敬虔なカトリックの少女で、宗教画で養父を助けようと試み、そして聖人が助けてくれると確信していた、と話している。

彼女が6歳のとき戦争が終わり、いくつもの強制収容所での恐ろしい体験を生き延びた彼女の母親が彼女を迎えに来た。しかし、Katz は自分の母親がわからず「醜いユダヤ人の女」についていきたくなかったと後の作品で書いている。

Katz は大学で社会学と文学史を学び、文学批評家として働いた。1969年に彼女はデンマークに移住し、ポーランド文学の翻訳家として王立図書館に勤めた。52歳のとき、詩集 *Min moders datter*『母の娘』(1991)でデビュー。この作品で彼女は、彼女の家族の数少ない生き残りになったうしろめたさ、母との難しい関係、自分の国と母語を捨てたことを表現している。翌年、“Barnet. Farvel”が収録された *Mit uvirkelige liv*『非現実的生活』を出版した。1987年に彼女の母は亡くなっており、自伝的小説である *Mit liv som barbar*『野蛮人としての人生』(1993)では母の死までのKatzの人生について書かれている。これは、デンマーク芸術財団(Statens Kunstfond)の年間最優秀小説に与えられる賞を受賞した。2011年に発表された *Skrevet på polsk*『ポーランド語で』が彼女の最後の詩集となった。彼女は自身の個人的な体験や記憶、ユダヤの歴史を反映した詩集や小説を書いた。そのため彼女の作品は伝記かフィクションか区別するのが難しいと言われている。

1. 詩の構造分析

27行から成るこの詩は、複数の連に分かれることなく一続きで書かれており、改行が多用されて文が細かく刻まれている。そうすることで、意図的に読者の読む速度をコントロールしている、あるいは言葉の意味を協調しているように思われる。また、8行目・18行目は改行によって一行に一つの単語しか置かれていない。全体を通してこの詩は連によってわかれているわけではないが、8行目・18行目の次の行から内容が切り替わっており、それらの行が意味上の切れ目になっているといえる。1行目から8行目では、“du”(あなた)と離別しなければならないという“jeg”(私)の意思について書かれているが、9行目から18行目までは、“du”(あなた)への語りかけとなっている。そして、19行目から27行目は、“du”(あなた)と離別する様子について書かれている。このように、一行に一単語しか配置されないという極端な改行により、内容が切り替わる、つまりある種の連が一つ終わるということを示唆していると考えられる。

2. 詩の考察

この詩では”jeg”（私）と”du”（あなた）が対峙し、”jeg”（私）は”du”（あなた）と決別しようとしている。最も考えさせられるのは、それぞれが誰を指しているのかということである。作者のKatzは自身の体験を反映させた作品を多く残しており、”jeg”（私）というのはこの詩を書いた作者自身であると推測できる。また、この詩のタイトル”Barnet. Farvel”（こどもよ、さようなら）からわかるように、”du”（あなた）とは”Barnet”（こども）を指していることがわかる。つまり、この詩は自身の心の中に住んでいる「こども」の自分へ別れを告げようとする作者の心境を描いていると考えられる。

1行目から8行目の場面では、「私」は自分の中の「こども」に「私」の中から出ていくように促し、別離を強く決意している。9行目から18行目では、「あなた」を責め立てるような形で語りかけていく。16行目から18行目は命令文となっており、「こども」へ直接的な言葉で決別を言い渡している。だが、自分の内なる「こども」と袂を分かちたいという意思と反して19・20行目では、”Jeg har ikke lyst til at blive voksen”（私はおとなにはなりたくない）と書かれており、前文で述べている内容と矛盾している。これは「こども」の自分と決別するという意思と「おとな」にはなりたくないという思いのせめぎ合いであり、心の葛藤が見て取れる。

さらに、「こども」というのは、「こども時代の記憶」という意味も含むと考えることができる。つまり、5行目から8行目は、こども時代の記憶をもう思い返さないということを意味している。26・27行目”jeg vil ikke tage dig med mig（私はあなたを連れて行きたくない）”というのは、幼少期の辛い過去を忘れたいという思いが表れているのだろう。この場合、”mine dukker”（私の人形）と”lege med min lille hund”（私の小さな犬と遊ぶ）というのは、幼少期の楽しい記憶を暗示しているのではないだろうか。12行目から15行目は、対峙する「私」と「あなた」の関係の中において、こども時代の過去を拒絶することで、楽しかった思い出さえ思い起こせないのだということを表現していると解釈できる。

この作品では、装飾的な趣向をこらすのではなく必要最小限に省略したミニマリズムの形式が用いられ、簡素な言葉で綴られている。そうすることで、一つの思いとそれに相反する思いがせめぎ合う姿が浮き彫りとなっている。また、作者の複雑な心理状況が簡素ながらも婉曲的によく表されている。21・22行目では、”solen går ned”（陽は沈む）や”Floden bliver mørk”（川は昏くなる）のように自然現象を用いて、おとなへの移り変わりを仄暗い表現で描いている。おとなになるということを、輝かしい成長とは捉えていない、おとなという存在への作者の思いが見て取れる。23行目から25行目には、とてもゆっくりと川の向こう岸へ泳いで行くことで、自らのこどもの部分や記憶と別れ、徐々におとなへと成長していかうとする様が表現されている。多くの文学作品で川が異なる世界との境界として描かれてきたように、ここでも「おとな」と「こども」の境界として川が用いられているのがわかる。

作者紹介で触れたように、第二次世界大戦後に作者は育ての親と別れ、実の母のもとに連れて行かれることとなった。たとえ実の母であったとしても、状況を理解できていない少女

にとって、共に暮らしていた家族や育った環境から引き離され、母だと認識できない人間のもとへ行くことは苦痛であっただろう。そのため、彼女を振り回したおとなたちへの抵抗感が彼女の心の中に刻まれ、おとなになりたくないという気持ちを抱かせたのかもしれない。しかし、彼女は「こどもの自分」や「こども時代の記憶」を自分から切り離し、成長して前に進まなくてはならないと決意を固めている。これは作者が置かれた複雑な成育環境の影響が現れている詩だといえるだろう。

3. 参考文献

3.1. 使用テキスト

Katz, Janina. (1992). *Mit uvirkelige liv*. Valby: Vindrose.

3.2. インターネット資料

Forfatterweb. *Janina Katz*, <https://forfatterweb.dk/oversigt/zkatz00>, 2018 年 12 月 3 日確認

Gyldendal Den Store Dansk. *Janina Katz*,

http://denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/Janina_Katz, 2018 年 12 月 3 日確認

The History of Nordic Women's Literature. *Janina Katz*,

<https://nordicwomensliterature.net/writers/katz-janina/>, 2018 年 12 月 3 日確認

Wikipedia. *Janina Katz*, https://en.wikipedia.org/wiki/Janina_Katz, 2018 年 12 月 3 日確認

Unatur

Det føles lidt, som om det har regnet
men jeg er ikke sikker.
Det er lummert. På mig virker solen
som om den kæmper
for at komme ud af skyerne
selv om jeg ved, at naturen ikke er sådan
at man kan sige om solen, at den kæmper.
Så det føles ikke naturligt
at have sagt det sådan.
Men haver er naturligvis
lige så lidt natur
som ord eller den ske
som en eller anden har tabt
midt ude på plænen.
Den skinner
så jeg føler, at jeg også må skinne
fordi skeen og jeg er de eneste i denne have
der synes at reagere på solen
så alt andet komme til at virke uldent.
Lidt som om her er blevet holdt en fest
der pludselig blev afbrudt.
Det kunne ikke være
mere forkert.
Det tog mange år for den sidste deltager
at komme væk herfra.
Derfor kan bassen også fortsætte
med uformindsket styrke
selv om orkesteret
for længst er blevet pakket sammen.

不自然

少し感じる，まるで雨が降ったようだ
けれど私に確信はない。
蒸し暑い．私にはまるで太陽が
戦っているかのように映る
雲から出て来ようと
自然はそんなものではないと私は知っているにもかかわらず
太陽が戦っている，などと人が言えるようなものでは。
だから自然なことには感じられない
そのように言うてしまうことは。
しかし庭は当然ながら
ほとんど自然でないものだ
言葉や，あるいは
その芝生の真ん中で
誰かが落としたそのスプーンのように。
そのスプーンは輝いている
だから私は感じている，私もまた輝かねばと
なぜならそのスプーンと私はこの庭で唯一
太陽に応えて輝いているように見えるものだから
それで他の物がすべてぼやけて見えてくる。
もしかしたらここで少しパーティーが開かれていたかもしれない
突然中断されてしまったパーティーが。
それはもうこれ以上
間違いではありえない。
何年もの年月がかかった。
最後の参加者がここから消え失せるのに。
だからベースもたゆまず鳴り続けるだろう
音が小さくなることもなく
オーケストラは
もうずいぶん前に荷造りを終えて立ち去ったにも関わらず

(出典：3/2D, 2012)

(勝矢博子訳)

1. 作者紹介：Henrik Nordbrandt (1945～)¹

1945 年 Frederiksberg に生まれる。1966 年 *Digte*『詩集』でデビュー以来作家として活動し、多様なジャンルで執筆活動が続ける。デンマークで数々の賞を受賞し、2000 年には *Drømmebroder*『夢の兄弟』で北欧理事会文学賞(Nordisk Råds Litteraturpris)を受賞した。成人して以来長く地中海地域に暮らし、定住地を持たない移動文学者・詩人と称される。彼の詩には難解な詩と比較的平易な詩の 2 タイプがあるとされており、読みやすい詩の中にもノアブラント独自の哲学が表されていると言われている。

2. 作品の解釈

ここでは Nordbrandt の詩, “Unatur”についてその意味を分析し, 解釈を行う。まずは順を追って言葉の意味などに着目し, 解釈を進める。次に作品の形式に注目しその効果について述べる。

2.1. 言葉, 意味の解釈

まず 1 行目から 4 行目で, 語り手は確信のない様子で天気について述べている。雨が降ったかのように見えるが実際のところはわからない。また 4 行目から 7 行目にあるように, 太陽が戦っているように見えるが, それはそう見えるだけである。自然について, 実際のことを自然にそのまま述べることの不可能さが前半の 9 行で示されている。どのように言ったところで, 突き詰めて考えると違和感が残り, 不自然な表現になるのである。

10 行目以降では庭, 言葉, スプーンというほとんど自然ではないものが登場する。庭といえば緑豊かであたかも自然であるかのように思われる。しかし庭は人間が作りあげたものであり, 実際のところは自然を装った不自然, あるいは形骸的な自然である。しかし一方で人間が日光や植物, 風や雨といった自然のものに触れられる場所であることも確かであり, 自然と人間を媒介する場所でもある。ゆえに庭はほとんど自然ではないが, 少しばかり自然の要素を併せ持つ。さらに言えば, ほとんど自然でない庭が人間に自然を見せる場であるというこの状況も, どこか不自然に感じられるものである。言葉も, 自然と出てくる言葉もあれば, 非常に作為的に選ばれ, あるいは作られて発せられる場合もある。スプーンも人間が作り上げたものであり, ほとんど自然なものではない。ただしスプーンが併せ持つわずかな自然の要素は何であるか, 筆者は今回の分析で見出すことができなかった。なおここでスプーンが登場するのは, 庭の芝生に落ちて光っているところを語り手が見かけたからである。

15 行目から 18 行目では, 庭で太陽の光に応じて輝くスプーンと, そのスプーンを見て輝かねばと思う私についての言及がある。語り手はスプーンの輝きに, どこか受け身では

¹ 田辺・大辺, s.80

<https://www.information.dk/kultur/anmeldelse/2012/09/utidig-aarstid-doeden-gaest> 参照。

<https://www.poetryinternationalweb.net/pi/site/poet/item/432/9262/Henrik-Nordbrandt> 参照。

ない積極的な姿勢を感じている。これはほとんど自然ではないスプーンが、ほとんど自然でない庭という場所において、太陽という自然を求めて反応しているため、と捉えることができる。これを受けて語り手は、自分も太陽や自然に応じたいと考える。その結果 19 行目にあるように、周りのその他すべてのもの、すなわちほとんど自然ではない庭のものがぼやけたものに見えてくるのである。

20 行目以降はパーティーという単語が新たに登場する。ここでパーティーという言葉が出てきたのは、落ちていたスプーンからの連想であると考えられる。語り手は落ちていたスプーンからパーティーの食事や客を連想したのだ。ところでパーティーというものは人間が意図的に作り上げるものである。多くの客が集まり、食事がふるまわれ、音楽が演奏される。スプーンも含め、そのパーティーで使われる物や、そのパーティーで発される言葉、そのパーティーを構成するものはすべて人間の意思の支配下にあるものである。それらは自然なものとは言えない。ここで読者は人間の意思のままにできない自然と、人間の意思のままにできるパーティーというものが同時に存在する状況について考えさせられる。そんな状況において自然に応えようと輝くスプーンがある。スプーンを見たときに語り手は自分も自然に応じたいと考えた。これにより読者は人間も含めどんな感覚も物体も、どんなところに置かれたとしても、自然を求めて応えようとするものであることに気が付くのである。

24 行目以降で語り手は、パーティーの最後の参加者とパーティーでの音楽について触れている。最後の参加者は客でもありえ、また音楽の演奏者の 1 人でもあり得る。20 行目と 21 行目でパーティーが突然中断されたように見えるとあったが、24、25 行目においてパーティーが終わるのが突然ではなかったことが示される。さらに今でもそのパーティーの音楽の音だけは、残って続いているようであることが 26、27 行目から読み取れる。なお 26 行目で登場するベースは、スプーンの金属光沢からの連想であると考えられる。いずれも太陽の光に応じて輝くものである。28、29 行目は、パーティーの楽隊がもうずっと前に荷物をまとめて出ていったことを述べている。楽隊がいなくなり、パーティーは時間をかけてだいぶん前に終わった。それにも関わらず、ベースの音が弱められることもなく続いているように感じられる。これは先ほども述べたようにベースも含めどのようなものも自然にどこかで応じようとし続けるものであることを示していると考えられる。

2.2. 作品の形式について

この作品は明らかに意図的に言葉が中央に揃えられ、一見波立って見える形式になるように意図的に改行が行われている。なお翻訳に際し筆者はなるべく原文に近い形式になるよう改行や語の数に配慮した。ここでは作品の形式に注目し、その意図や効果について考察する。なお詩集 *3½D* では他に“HJULET”と“VED VEJS ENDE”の 2 つの詩が中央揃えにされている。また中央揃えではないものの“EGO”もかなり独特な形式になっている。

2.2.1. 特殊な形式がもたらす効果①：リズム

まずこの詩の特別な体裁は、この詩をどこかリズムカルにしている。これは特に朗読の際に顕著になる。文法規則のためだけでない改行は独特なリズムを生み出し、場合によっては語をより印象的に聞こえさせる。例えば 22 行目と 23 行目の間の改行は文法的には不必要である。しかしここで改行がなされることで、mere forkert がより印象に残る。1 行に 2 単語しかない行では特に語が際立つように思われた。例えば 15 行目や 23 行目がそうである。

2.2.2. 特殊な形式がもたらす効果②：不自然を体現

この作品で行われている中央揃えや改行は、作爲的に行われていることが明らかであり、不自然といえる。筆者は、そうすることにより形式の面からも不自然を表現しているのではないかと考えた。通常とは異なる形式をとることで、視覚のうえでも読者が不自然さに思い至る。不自然の例の 1 つとして、この形式を示しているのである。また 11 行目と 12 行目において、ほとんど自然でないものとして「言葉」が挙げられている。詩はそのような性質をもつ言葉を扱い、言葉で構成されるものである。そのような詩もまたほとんど不自然なものであることを、不自然な形式により示しているとも考えられる。

3. まとめ

以上で見てきたように、この詩は非常に感覚的な詩となっている。この詩により読者は自然とは不自然とは何かを考えさせられる。それは考えれば考えるほど迷宮に入ってしまうような問いである。また不自然や自然について語る時点で、その表現はどうしても不自然さと違和感が残るものになってしまう。自然と不自然について、その言い表しにくさを Nordbrandt はこの詩で示しているといえる。ところでこの詩が収録されている詩集のタイトル $3\frac{1}{2}D$ とは 3,5 次元という意味である。つまり 3 次元と 4 次元の間の次元を指している。Nordbrandt はこの詩において、偏りがなく、不思議で、どこか全てをないまぜに見るような視点を持っている。このことは詩集のタイトルと合致しているといえる。

この詩は文法や単語は比較的理解しやすいが、その意味については難解な詩であると言える。その点で Nordbrandt らしい詩の 1 つ¹である。一読ではその詩の意味するところが捉えきれないところは、この詩を魅力的にしている 1 つの要素であると思われた。

¹田辺・大辺, s.80

4. 参考文献

4.1. 使用テキスト

Nordbrandt, Henrik. 2012. 3½D. Danmark: Gyldendal.

4.2. 参考文献

田辺欧, 大辺理恵. 2014 年. 『デンマーク語で四季を読む』, 広島: 溪水社.

ミカエル・リファテール著 (斎藤兆史訳). 2000. 『詩の記号論』, 東京: 勁草書房

ジョージ・レイコフ, マーク・ターナー著 (大堀俊夫訳). 1994. 『詩と認知』.

東京: 紀伊国屋書店.

新谷俊裕, 大辺理恵, Thomas Breck Pedersen. 2014 年. 『デンマーク語』.

大阪大学外国語学部世界の言語シリーズ 10. 大阪: 大阪大学出版会.

ジョナサン・カラー (荒木映子、富山太佳夫訳). 2003 年. 『1冊でわかる 文学理論』.

東京: 岩波書店.

Axelsen Jens. 1995. *Dansk-Engelsk Ordbog*. Gyldendals Røde Ordbøger 10. udgave,

10 oplag. Copenhagen: Gyldendalske Boghandel.

4.3. インターネット資料

Tue Andersen Nexø, 7. september 2012, *Utidig årstid med døden som gæst*, information.

<https://www.information.dk/kultur/anmeldelse/2012/09/utidig-aarstid-doeden-gaest>. (2019.2.20 確認).

田辺欧, Utas værelse, *Henrik Nordbrandt*, julekalender 15. december,

<http://riefive6.wixsite.com/utatanabe/tove-ditlevsen> (2019.2.20 確認).

Annelies van Hees, *Denmark Henrik Nordbrandt*, Poetry International Web,

<https://www.poetryinternationalweb.net/pi/site/poet/item/432/9262/Henrik-Nordbrandt> (2019.2.20 確認).

Ordnet.dk, *Den Danske Ordbog*, <http://ordnet.dk/ddo> (2019.2.20 確認).

Henrik Nordbrandt の詩

菊井彰乃

Hjemme

Omsider er alle steder hjemme:
De rosa bjerge
og den blånende bugt
og den støvede vej, som forbinder dem
i nymånens skær.

Og huset, som vi er kommet
så langt bort fra
for at bosætte os i
består af en eneste, uendelig lang
hvidkalket væg.

ふるさと

ようやくあらゆる場所がふるさとになる
薔薇色の山々
青みゆく入江
そしてそれらへとつながるほこりっぽい道
新月の微光の中で

それから、私たちがやってきた家
とても遠くから
私たちが住み着くために
たった一つで、無限で、果てしなく長い
漆喰で白く塗られた壁でできている

(出典： *Egne digte*, 2000)

(菊井彰乃訳)

1. 作者紹介：Henrik Nordbrandt (1945-)

Nordbrandt はデンマークの詩人、作家、エッセイスト。1945 年 3 月 21 日にフレゼレクスベア(Frederiksberg)で生まれ、現在 73 歳である。

Nordbrandt はコペンハーゲン大学で、中国語、トルコ語、アラビア語を学んだ。1966 年に詩集 *Digte*『詩集』でデビューし、1990 年にスウェーデンアカデミー北欧賞を受賞。2000 年には、詩集 *Drømmebror*『夢の兄弟』で北欧理事会文学賞を受賞する。詩集に加え、犯罪小説、児童書、トルコ料理本も出版している。

デンマーク人であるが、人生の多くをギリシャやトルコといった地中海で過ごしており、このことは彼の作品に深い影響を与えている。本稿で扱う詩”Hjemme”は、北欧理事会文学賞を受賞した *Drømmebror* と同じ年に作られた詩集 *Egne digte*『私の詩集』に収められている。

2. 作品解釈：“Hjemme”

一見するとこの詩は、彼のふるさと、つまりデンマークについての詩のように思われる。だがここで描かれている景色は、デンマークから想像されるものとは大きく異なっている。「薔薇色の山々」、「青く染まった入江」、「漆喰で白く塗られた壁」、この三つの言葉からは、デンマークよりもかなり温暖な気候が感じられる。すでに述べたように、Nordbrandt は人生の多くをギリシャやトルコ、イタリアといった地中海で過ごしていた。この詩で描かれているのは、地中海に面した南ヨーロッパの暖かな風景なのである。

短く、わかりやすい単語を使っているこの詩だが、何を示しているのか捉えるのは難しい。それが最も如実に表れているのは、タイトルにもなっている”Hjemme”であろう。デンマーク語の”hjemme”は英語の”home”にあたり、直訳すると「家」である。このことから、最初は単純に”hjemme”を「家」と考えていたが、読み進めていくうちに、「山」や「入江」、「道」などが登場し、それが果たして「家」なのか、という疑問を持ち始めた。少なくとも住居としての「家」を指しているわけではないように感じられる。また、第二連の”hus”は英語の”house”にあたり、これも「家」と訳すことができるが、これでは”hjemme”と”hus”の違いを示すことができない。

”hjemme”と”hus”の辞書記述を見ると、”hjemme”は「(人が) 家にいる状態、あるいは近隣や地域、固定の住人がいる、またはやってくる故郷のこと」、”hus”は「住むために使われる自立した建物」とある。つまり”hjemme”は人が住んでいる物理的な「家」を指すわけではなく、人がいる場所・空間そのものや、人がそこにいるという「状態」を意味している。それに対して”hus”は、物理的に存在する建物としての「家」を意味している。つまり、”hjemme”の指す「家」とは、建物としての「家」ではなく、もっと概念的な「家」である。心が安らぐ場所、自分が帰ってくる場所、自分の居場所といった意味がこの”hjemme”に込められているのではないか。そして、このような場所を指す日本語としてふさわしいの

は、「家」よりも「ふるさと」「故郷」ではないかと考え、タイトルを「ふるさと」とすることにした。

以上のことをふまえて、一行目の“Omsider er alle steder hjemme”に注目すると、気にかかるのは“Omsider”（ようやく）という表現である。この詩の舞台が Nordbrandt の移住した南ヨーロッパであるとする、彼はこの詩で移住先の国を「ふるさと」として認めたということになる。Nordbrandt がコペンハーゲン大学を卒業していることを考えると、彼がデンマークを離れ地中海へ向かったのは 1960 年代後半である。この詩が作られたのは 2000 年のことであり、移住してきてから実に約 40 年が経過している。彼が「ふるさと」だと感じている景色は、新月の夜の中にありながら非常に色鮮やかであり、デンマークの景色と対照的な部分を強調しているようにも感じられる。また、第二連で彼は、自分が“så langt bort fra”「とても遠くから」来た、ということを告白する。つまり、ここは彼の本当の故郷ではないのである。この場所が「ふるさと」と感じられるほど馴染むまでにかかった 40 年もの年月が“Omsider”や“så langt bort fra”という表現から透けて見える。

ちなみに、デンマークでは家の外壁にレンガや石を使うことが多いが、地中海では石灰を原料にした壁や漆喰で塗られた壁が一般的である。つまり、“hvidkalket væg”もまた、デンマークと地中海で違う部分の一つである。同じところではなく違うところを中心に描き、それらを「ふるさと」と呼ぶことは、彼の中の変化を強調する役割を果たしている。

Nordbrandt は地中海で過ごすことによって、その場所から新しい経験や発見を得ながら、そこを「ふるさと」と感じる程に馴染んでいった。ここでの経験が彼の作品に影響を与えたのは、新天地で新しい知見を得るとともに、デンマークから離れることで祖国を客観視することができたからではないだろうか。

3. インターネット資料

Wikipedia. *Henrik Nordbrandt*. https://en.wikipedia.org/wiki/Henrik_Nordbrandt.

(2019.2.23 確認)

Poetry International Web. *Henrik Nordbrandt*.

<https://www.poetryinternationalweb.net/pi/site/poet/item/432/9262/Henrik-Nordbrandt>. (2019.2.23 確認)

H.C. Andersen の詩

栗林利佳

Da hun sang

Naar Verden meer ei lytter til din Sang,
Vil jeg henrykkes ved din Læbes Klang.
Naar Ungdoms Smilet svinder fra din Mund,
Jeg seer det dog i Øiets dybe Grund.
Din Sjæl er stor, dit Hjerte er saa rigt.
Hvad gemmer Du om mig? — Et gammelt Digt.

彼女が歌った時

世界中があなたの歌にもう耳を傾けなくなったとしても、
わたしはあなたの唇が奏でる音色を喜ばしく思うだろう。
あなたの口元から若々しい微笑みが薄れたとしても、
わたしは目の奥深くにそれを見るだろう。
あなたの魂は大きく、そして心は豊かだ。
あなたはわたしの何を覚えているのだ？ — ある古い詩である。

(出典：H.C. ANDERSEN DIGT II, 1847)

(栗林利佳訳)

1. 作者紹介

ハンス・クリスチャン・アンデルセンは 1805 年 4 月 2 日、フュン島の都市オーデンセの貧しい夫婦の間に生まれる。

両親の愛、特に母親の盲目的な愛情のもとで育てられ、若い頃から豊かな想像力を発揮した。15 歳の時、オペラ歌手になろうとコペンハーゲンに渡ったが、彼が創作した劇作や歌などは認められず、最初の 3 年間は困窮を極めた。その後も挫折を繰り返し、デンマーク王立バレエ団のバレエ学校に在籍していたこともある。その後、政治家でコペンハーゲン王立劇場の支配人であったヨナス・コリンの助けで大学に行き、文献学と哲学を学んだ。しかし在学中の 5 年間（1822-1828）は文学的才能について学長から嘲笑されるなど、悲惨なものであった。1835 年に最初の小説『即興詩人』を出版し、これはかなりの反響を呼んでヨーロッパ各国で翻訳出版された。

1875 年に死去するまでに多くの童話を発表し続け、また旅行を自分の学校として多くの旅行記を残した。

1956 年には彼の功績を記念して、国際児童図書評議会（IBBY）が「児童文学への永続的な寄与」に対する表彰として国際アンデルセン賞を創設し、隔年で授与が行われている。この賞は「児童文学のノーベル賞」とも呼ばれ、高い評価を得ている。

2. 作品分析

この詩には古いデンマーク語表記が多く使われている。例えば文頭ではないのに大文字となっている箇所があるが、これはかつての正書法で名詞の頭文字を大文字にするという規則があったからである。この規則は 1948 年まで続いた。また mere が meer となっていたり、øjets が øiets、ej が ei と表記されていたりするように、J が I で表記されている。この ej は“Kommer du, eller ej?”のように使われ、現代の nej の意味を表す。さらに seer のように e が余計に挿入されている箇所がいくつかあるが、これは e の直前の母音（この単語では一つ目の e）が長母音であることを示すためである。

5 行目の「あなたの魂は大きく、そして心は豊かだ」という箇所では、「魂」と「心」が別のものとして書かれている。「魂」"sjæl"と「心」"hjerter"の違いとして、前者は「その人の本質であり不動で揺れ動かないもの」、後者は「周りの環境に左右されて変化するもの」ではないかと考えられる。これを踏まえると、この行は「あなたの懐は深く、あなたの感受性は豊かで」と読み替えることもできる。

また、詩の題名に Naar（英語の when に相当）ではなく Da（「そのとき」を意味する副詞）が用いられていることから、「彼女」が数多くの歌を歌っていた中でも、「わたし」がこの詩を書こうと決意するに至った、「わたし」にとって忘れられない瞬間があったということが推測できる。

この詩は、全体を最後の行とそれ以外の二つに分けることができる。1 から 5 行目は、ある一人の女性への愛を歌った詩である。だが、6 行目ではその女性が自分に抱く心情を、

皮肉を込めて問うている。そして、「ある古い詩」というのは、まさにこの詩の1から5行目までのことを指している。前半部分で語られた恒久的で唯一無二の愛情は、最後のこの一言により「古い詩」という虚構に押し込められている。

この詩の「わたし」が作者アンデルセンそのものであるなら、この詩は彼の片思いの詩だと言える。では相手の女性とは一体誰なのか。アンデルセンが片思いをした女性は沢山いるが、その中でも歌が上手なことから、イエニ・リンドという女性ではないかと推測される。彼女はスウェーデンの歌手であり、その美声から「スウェーデンのナイチンゲール」と呼ばれる程であった。イエニが1843年にデンマークへと演奏旅行に出た際、アンデルセンは彼女の才能や豊かな感受性に惹かれて恋に落ちてしまう。二人はよき友人となったものの、彼女がアンデルセンの期待に応えることはなかった。イエニがアンデルセンに送ったクリスマスカードに「親愛なるお兄様」と記述していたことから分かるように、尊敬を超えた恋愛の感情は芽生えなかったのである。彼女は彼の作品である“Under Piletræet”「柳の木の下で」、 “Engelen”「天使」、 “Nattergalen”「小夜啼鳥」の三つの童話に影響を与えたが、特に“Nattergalen”はアンデルセンがイエニのために二日で書き上げたと言われている。彼はこの恋の終わりにより一生独身で生き抜くことを覚悟するが、イエニの方も恋愛が成就することはなく、生涯結婚することはなかった。この二人の家庭環境に恵まれず、自らの才能で世界の頂点に上り詰めたところや、恋愛の運に恵まれなかったところなどを見ると、実は似た者同士だったのかもしれない。彼の日記には1843年から1873年に渡ってイエニに関しての記述があるが、どれも非常に偏執的である。何度イエニが求婚をかわしても諦めずにアタックする反面、彼女の歌や性格までもを否定するような記述もあり、彼のこじれた恋愛観や不器用さを垣間見ることができる。

日記から浮かび上がるアンデルセン像は、概してコンプレックスの塊であり、どこか女性的で女々しく、気難し屋な男性である。恋愛に対して非常に憶病であるかと思いきや、狙いを定めた女性にはどんな手を使ってでもアプローチする姿勢も見られ、極端で矛盾している。アンデルセンは感受性が強く、喜怒哀楽が激しく、ロマンチストでもあった。そんな彼にとって、熱く秘めた想いの告白を「ある古い詩」というフィクションに落とし込むことは、自己防衛の一つの手段だったのではないだろうか。

3. 参考文献・インターネット資料

Wikipedia. *H.C.Andersen*. https://da.wikipedia.org/wiki/H.C._Andersen.

(2019.2.16 確認).

重森ツル子. (2009). 『哀愁のプリマドンナージェニー・リンド物語』. 教文館.

ハンス・クリスチャン アンデルセン. 角野栄子訳. (2009).

『アンデルセンの絵本 ナイチンゲール』. 小学館.

Tusind Stykker

Man si'r at over skyerne er himlen altid blå
Det kan være svært at forstå når man ikke kan se den
Og man si'r at efter stormens pisker kommer solen frem
Men det hjælper sjældent dem der er blevet våde

For når vennerne forsvinder
Og når livet er betrangt
Ser man alt med ganske andre øjne
Man øver sig og bliver langsomt bedre til at se
Og skelne mellem sandheder og løgne

Man siger jo at det der sker er altid godt for noget
Og troen har vi fået for at bruge den
Man siger så meget men ved så lidt når angsten tager fat
Og sjælen mærker illusioner briste

For når vennerne forsvinder
Og når livet er betrangt
Ser man alt med ganske andre øjne
Man øver sig og bliver langsomt bedre til at se
Og skelne mellem sandheder og løgne

Alting kan gå itu
Et hjerte kan gå i tusind stykker
Kaldte du mig for ven engang
Så er jeg her nok endnu...

千のかけら

雲の上にある空はいつも青いと人はいう。
でもその空が見えないと、これを理解するのは難しいときもあったりする。
嵐が吹き荒れたあとは太陽が顔を出してくると人はいう。
でも悲しみに濡れてしまった心がすぐに乾いてしまうことなんてめったにない。

友だちがいなくなって、
生活が追いつめられたら、
人はすべてをまったく違う視点から捉えてしまう。
でも、時間がたつとともに、だんだんゆっくりと見えるようになってくる。
そうしてやっと真実と虚構とを見分けることができる。

起こることすべてに意味がある、
信念は使うために持っているものだと言人はいう。
こうやってよくいわれるけれど、どうしてもできない不安でいっぱいになってしまうと
そんなこと考えられやしない。
そして幻想が心の中で粉々に破裂してしまうのを感じる。

友だちがいなくなって、
生活が追いつめられたら、
人はすべてをまったく違う視点から捉えてしまう。
でも、時間がたつにつれて、だんだんとゆっくり見えるようになってくる。
そうしてやっと真実と虚構とを見分けることができる。

すべてが粉々になってしまうことだってある。
心が千のかけらにまで粉々になってしまうことだってある。
もし君がもう一度私を友だちと呼んでくれたら、
もしかしたら私はまだここにいるかもしれない。

(出典： *Jeg er jo lige her*, 1988)

(藤原希訳)

1. 作者紹介：Anne Linnet

1953 年、デンマークのオーフス（Århus）で生まれる。現在 64 歳。歌手、音楽家そして作曲家。1970 年代から今日まで多くのソロアルバムをリリースしており、Shit & Chanel や Anne Linnet Band や Marquis de Sade といったバンドのメンバーでもある。長年の間、デンマーク国内で人気を誇っており、デンマークの音楽シーンで作詞家、作曲家として高い評価を受けている。センスが良く正直な歌詞、さまざまな音楽スタイルへ挑戦していることで知られている。

Anne Linnet はこれまで男性だけでなく女性とも同棲してきている。1974 年から 1985 年までは、ジャズサックス奏者と婚姻関係にあり、彼との間に二人の子供がいる。1988 年にもう一人子供を出産し、2001 年にはルーマニアから姉弟を養子として迎え入れた。2010 年には Tessa Franck という女性と登録パートナーシップを結んだ。同年 Tessa は娘を出産している。

2008 年には、その長年の音楽活動を讃えられ、デンマーク国際レコード連盟（IFPI Denmark）から賞を受けている。

2. 作品解釈・分析：“Tusind Stykker”（*Jeg er jo lige her*：1988）

“Tusind Stykker” が収録してあるアルバム *Jeg er jo lige her*『わたしはここにいる』は、Anne Linnet が 1988 年にリリースした自身 6 番目のアルバムで、彼女のアルバムの中で最も人気があり、デンマーク国内で 4 番目によく売れたアルバムであるとされている。“Tusind Stykker” はその中でもオープニングナンバーとして収録されており、1989 年スウェーデン語版として Björn Afzelius によって “Tusen bitar” という題名でカバーされスウェーデンでも大きなヒットを生んだことから、この歌がデンマークのみならず、多くの人びとの間で受け入れられ、ポピュラーになったことがうかがえる。以下にこの作品を訳した上での解釈および分析を記す。

まず、この作品には「孤独感」が漂っている、というのが第一印象だった。Linnet はデンマークの音楽界を長年牽引する存在の一人であり続けている一方で、プライベートでは結婚、離婚、養子縁組、女性との同棲といった数々の変化を経験してきている。この詩には、彼女がその変化の中で味わってきた「孤独」が強く反映されている。デンマーク国内外で高い評価を受け、多くの人に支持されている彼女だが、個人としてはむしろ満たされないものがあり、「孤独」という感情が常につきまとっていたのではないだろうか。

2007 年に書かれた Jyllands-Posten の記事によると、このアルバムには彼女の人生の中の 2 つの大きなイベントが影響していると指摘されている。まず一つ目は息子の Alexander の妊娠、二つ目は彼女が「ソウル・メート」と呼ぶ女性との同棲である。この二つの出来事がどのようにアルバム全体に影響を与えているのかについて Anne Linnet は「1980 年代初めに起こった大きな出来事の後、多くの物事が正しい場所に収まってきました。そして妊娠した時、心の底から再び地に足をつけるべき時が来たと感じました。私はその頃自分が完全に

人間であると感じました。そしてこのアルバムにはその頃感じた気持ちが多く反映されています」と答えている。ここで彼女が言っている「1980年代初めに起こった大きな出来事」というのは、おそらく1985年に離婚を経験したことではないかと思われる。1974年に結婚しているから、11年の結婚生活に幕を閉じたということである。決して短いとはいえない期間である。

詩中においては“vennerne”つまり「友だち」という単語の複数既知形を使って、「友だちがいなくなったら」と作者は表しているが、前述の彼女の発言から、ここでは別れた元夫のことも少なからず示唆しているのではないかと感じられる。元夫と離婚した理由ははっきりとはわからないが、おそらく彼女は深い悲しみと孤独に悩まされたのだろう。しかし、そのような状況乗り越えて新しい命を授かり、新しい生活を始め、辛い時期を乗り越えることができたがゆえにこのような歌詞を書くことができたのではないか。

また、この歌詞の内容はデンマーク人だけでなく、世界中の人びとによって共感をもって理解されるものである。というのは、これまで信頼を寄せてきた人が何らかの理由で自分から離れてしまう、もしくはどうしてもできない困難が目の前にあらわれるということは誰にとっても必ず起こりえる普遍的な状況だからである。まさに今そのような状況にある人にとって、この“Tusind Stykker”は何よりの応援歌となり得るだろう。

ただ、最後の第5連目の下2行については理解するのが難しかった。この歌詞が意味するところは一体何なのだろうか。その上、それまでは“ven”つまり「友だち」はすべて複数形で書かれていたにも拘らず、最後には“du”つまり2人称単数の「あなた」という表現がされている。ここで単数の“du”があらわれることにより、この歌詞全体が急に個人的なメッセージのように捉えられるのである。ここで2人称複数の「あなたたち」である“I”を使用していないということは、この歌詞が特定のあるひとりだけを思って書かれた可能性があることを示している。

最後に、この“Tusind Stykker”は歌詞だけでも十分すばらしいが、やはり Anne Linnet の深くどこかユニークな声で歌われている実際の歌を聞くことで、内容がずっと心に染みていくような気がした。この作品だけでなく *Jeg er jo lige her* の中に収録されている他の8つの歌も内容を意識しながらぜひ味わってみたいと思う。

3. インターネット資料

Wikipedia. *Anne Linnet*. https://en.wikipedia.org/wiki/Anne_Linnet. (2019.2.13 確認)

Anne Linnet Det Officielle Website. <http://www.annelinnet.dk>. (2019.2.13 確認)

Jyllands-Posten. (2007). *Anne Linnet indspiller egen musikhistorie*.

<http://jyllands-posten.dk/kultur/musik/ECE3291951/Anne-Linnet-indspiller-egen-musikhistorie/>. (2019.2.13 確認)

Piet Hein の詩

堀聖我

Ø

島

Vi sidder på en grønklædt ø
i sol og storm og dybblå sø,
en verden med en lukket ring omkring.

私達は緑の草に覆われた島に座っている。
太陽と風と深い青の海に囲まれた、
閉ざされたぼんやりとした円の世界。

Højt over vores hoder flyr
de store hvide sommerskyer,
og solen går sin bane hen igen.

私達の頭上空高くには
大きく白い夏雲が浮かび、
太陽は再び自らの黄道を行く。

Og tiden er et tidløst nu,
og menneskeheden jeg og du,
og bare græs og bølgespil er til.

今や時間は永遠で
人は私とあなた、
そしてあとは草と波だけ。

(出典：DIGTE fra alle årene, 1991)

(堀聖我訳)

1. 作者紹介

ピート・ハイン(1905-1996)は、デンマークの数学者、発明家、デザイナー、作家、詩人。コペンハーゲン出身。コペンハーゲン大学の理論物理学研究所、およびデンマーク工科大学で学び、1972年にエール大学から名誉博士号を授与された。

スーパー楕円の考案者としても知られている。スーパー楕円とは楕円と長方形の中間の形のことである。1959年にストックホルムで新しい円形交差点が作られる際、長方形の地形にフィットしつつ車のハンドリングがしやすいカーブを持つデザインとして、ハインはこの形を考案した。彼のホームページでは、ロゴとしてこのスーパー楕円が使われている。

2. 詩の考察

この詩の中の舞台である島は、現実的なものを指すのではなく、精神世界の抽象的な理想郷のようなものだと考えられる。第1連の時点では、島には緑の草が生い茂っていることから、季節は春か夏であり、寒さ厳しい冬ではないことが想像できる。さらに、島は深く青い海に囲まれて太陽の光が射していることから、南国の暖かい島のような印象を受ける。多くのデンマーク人は、寒さが厳しく暗い憂鬱な冬を過ごすことから、暖かい夏や太陽の日差しに憧れのようなものを持っている。この詩の中でみられる島の南国の暖かい島のような印象も、デンマーク人であるピート・ハインの憧れが映し出されているのではないだろうか。詩の中の”omkring”「ぼんやりとした」という表現も、その島の円の範囲が定かでないことを表しており、この島が現実世界に関わるものではなく空想的なものである根拠の一つである。

そして、島が閉ざされている、ということについては、たとえ物理的に開放されていたとしても、心理的に自分が望む人間以外は誰も寄せ付けないという意味なのではと考えることができる。また、そもそも島が物理的に閉鎖されていることを表現している可能性もある。島の周りは海に囲まれ、陸地では繋がっていない。ゆえに、泳いで島に近づくか、船を使わなければ島に上陸することはできない。泳いで島に近づくことはあまり現実的ではなく、そういった島の近づきにくさが「閉ざされた」という表現になったとも考えられる。

第2連では頭上空高くに、大きくて白い夏雲が浮かんでいることがわかる。この時点で第1連だけでは確定できなかった季節が、夏であることが読み取れる。この頭上空高くに夏雲が浮かんでいる描写からは、島の大きな自然に囲まれた開放感のある雰囲気が感じられる。一方で、そのような広大な自然の中にいる小さな自分が対照的で、より閉塞感を生み出している。

次の行では太陽が登場するが、それだけでは時刻が朝なのか昼なのか、もしくは夕方なのか定かではない。この部分を読む上で、特に気になったのは”igen”(再び)という語だった。この語からは、今まさに太陽が黄道を進み始めたような印象を受ける。そうであるとするならば、時刻は朝であり、太陽は昇り始めたところであるのかもしれない。しかし、そもそもこの場所が空想世界であるならば、時間は重要ではないのではないかと。というのも、第3連

には、時間は永遠だと書かれているからである。「時間は永遠」という表現が、時間が一切流れずに停止しているのか、あるいは同じ朝と夜を何度も繰り返すように、一定の時間が繰り返されているのか、どちらを示しているのかは定かではない。しかし、このことからやはり、この島は現実のものではなく空想の世界のものであるという印象を受ける。

また、この詩に登場する人物は「わたし」と「あなた」の2人だけである。「あなた」は「わたし」にとって大切な人であると考えられる。理想郷には自分と自分にとって大切な人だけが存在し得るからだ。そしてその円の世界が「閉ざされ」ているのは、自分にとっての敵や、余計なその他の要素を侵入させないためだと考えられる。あくまでも島は「わたし」にとって完璧な理想郷でなければならない。最後の文にもあるように、「わたし」と「あなた」の間に介入しうるのは、草や波のような自然の存在だけである。

第3連を訳す際に気になったのは“bølgespil”だ。「波の矢」という意味の語だが、草の波である可能性もあり、島が海に囲まれてあることから海の波である可能性もある。「波」だけであれば、草のざわめく様子を表した単語である可能性が高いが、「波」だけでなく「矢」という語があることから、草についての表現としては少し不自然であると感じた。「波」が海の波であると仮定すると、海に立つ白波の白い線を矢に例えていると考えることができる。そのため、この詩では“bølgespil”を「海の波」として訳した。

前述のように、ハインはスーパー楕円の考案者であり、円という形に対してこだわりを持っていた。ハインは非常に多才な人物だが、現代において特に彼が有名なのは、スーパー楕円の開発者としてである。「閉ざされたぼんやりとした円の世界」を理想の世界として描いていることと、彼の円に対する考え方は深い関係があると考えられる。

ピート・ハインの他の詩には、人間がちっぽけであることや、その人間が生きる世界もちっぽけなものだという考えを読み取ることができる。しかし決してそのちっぽけな世界のことを消極的に捉えているのではなく、そのちっぽけな世界を完成させることで十分だと言っている。つまりこの詩の小さな島の世界も、ピート・ハインが理想としていたものであると言える。島の広大な自然の中に、ちっぽけな「わたし」と「あなた」が存在し、草と波に囲まれることでこの世界は完結しているのだ。

3. 参考文献・インターネット資料

Hein, Piet. (1991). *DIGTE fra alle årene*. København: Borgen.

Piet Hein. <https://www.piethein.com/>. (2019.2.13 確認)

Wikipedia. *Piet Hein*, https://da.wikipedia.org/wiki/Piet_Hein. (2019.2.13 確認)

Vilhelm Ekelund の詩

有園菜希子

Lunaria.

ルナリア

Här tätt vid den yppiga klyftan
flammar din ensamma prakt,
sig hög i skuggan reser,
din spensliga växt.

この草木の生い茂る谷で
君の孤独な栄光は燃える。
日陰で高く立ち上がる、
君の細い茎。

Din gestalt, så lätt och så kraftig,
aldrig beundrar jag nog,
ett ädelt barn du är
av den blomsterrika dunkla jorden,
dess klara safter välla
i din höga friska kropp
så genomskinliga rena,
där spänstigt fri och stolt
i skönhetsbräddad kraft
du över svarta grunden strålar
det levandes symbol.

君の姿は、とてもかろやかでとても力強い。
私は決して十分に称えられない。
君は気高き子どもである
この豊かに花咲く暗き土地の。
澄んだ体液が噴きだしている
君の丈高い健やかな身体で
それはとても透明で清冽である。
このうえなく自由で誇り高い場所で
美しさの詰めこまれた力で
君は黒い地面の上を光る
生命の象徴。

Så skild från de andra du synes stå,
så främmande och tyst,
och din blick är egen och kall;
men djupet är tungt av längtan.
Ingen ditt lynne liknar.

君は他とはまったく違ってみえる。
どこにも溶け込まずとても静かである。
そして君のまなざしは独特で冷たいが、
その奥は切望で重くなっている。
君の性は誰にも似ない。

Men soliga klyftan upptill
är full av den sorlande sommar,
där dallrar törnros, konvolvel glad
och kaprifol i flamma;
de spela i vinden, de vaja mot varann,
de le och sjunga,
och alla blommor äro glada mot varandra,
och alla blommor äro vackra mot varandra.

しかし晴れ晴れと開けた谷は
さんざめく夏でいっぱいになっている。
そこではイヌバラはゆらめき、ヒルガオは喜び
スイカズラは炎の中にある。
彼らは風の中に遊び、彼らは互いに揺れあい、
彼らは微笑み歌う。
そしてすべての花々は喜びをわかちあい、
そしてすべての花々は美しさをわかちあう。

Ingen dig ser,
ingen märker dig av de andra.
Var har du din vän, du blomma kall?

だれも君を見ず,
だれも君に気づかない.
君の友はどこにいるのか, 花よ?

Eller kanske när allt i slummer sänks
och djupa blanka darra
och den tysta klyftan fylls
av svart och hemligt sus,
med stjärnorna du talar?

あるいはおそらくまどろみの内のすべてが沈み
そしてその奥深くは輝き震え
そしてこの静かな谷が
黒い秘密のため息で満ちるそのときに,
星々と君は語るのでしょうか?

(出典: *Dithyramber i aftonglans*, 1906)

(有園菜希子訳)

1. 作品紹介

1.1. 作者について

Vilhelm Ekelund(1880-1949)は 1900 年代スウェーデンを代表する作家の一人。詩人、エッセイスト、箴言家。スウェーデンにおける自由律詩¹と内的自己表現²の先駆者である。彼の作品は後に、多くのモダニズム作家にインスピレーションを与えている。

Ekelund は 1880 年にスコーネの小さな町 Stehag で、鍛冶屋の父のもとに生まれた。弱冠 20 歳で詩集『春風』*Vårbris* でデビューし、詩人として頭角を現す。1900 年のデビューから 1906 年の『夕光のディシラム』*Dithyramber i aftonglans* まで、八冊の詩集を立て続けに発表した。うち三冊は 1906 年に出たものである。1908 年にベルリンに移住した後は詩作から距離を置き、主にエッセイスト、箴言作家として活動した。1912 年から 21 年まではデンマークで過ごし、その後スウェーデンに帰国している。Ekelund は翻訳家としても功績を残しており、古代ギリシャの詩やジャコモ・レオパルディ、ペトラルカの詩などを訳した。

1.2. この詩について

この詩は彼の第八詩集『夕光のディシラム』*Dithyramber i aftonglans* に収められている。

Ekelund にとってルナリアは子ども時代から親しんでいた花で、1909 年のエッセイでは、「ルナリアはブナの森の小さな天才である。私はスコーネのブナの森で、ルナリアとともに夢を見たのだ」³という記述がみられる。同詩集に収められている「植物園」"Botanisk Trädgård"という詩にもルナリアは登場している。なおこの「植物園」はドイツのベルリン＝ダーレム植物園のことである。

¹ "den fria versen"

² "det intensiva själsuttrycket"

³ "...det är bokskogens underbarn; jag har drömt vid i Skånes bokskogar."

ルナリアは別名「月のスマレ」(månvioleten)。異名の通りスマレのような花を咲かせるがスマレ科ではなくアブラナ科の植物である。果実の形が独特で、薄く透ける円盤型の袋に大きな種が入っている。この果実の形から月が連想され上記の名前になった。なお和名には、ゴウダソウ（日本に種子を持ち込んだ合田清の名に由来）、銀扇草（果実の形から連想）などがある。

この詩の舞台となっている谷は、Ekelund が 1906 年夏にスコーネの Kullen で借りた別荘の近くにあった峡谷とされており、そこでは自生しているルナリアを見ることができる。

2. 考察

植物を扱った詩は古くから非常に多い。特に花は、その美しさから恋人と重ねられ、多くの恋の詩が作られてきた。この詩ももちろん恋の詩として読むことができるが、第四連の「君の友はどこにいるのか、花よ」からは恋情よりも友愛、共感に満ちた印象を受ける。また非常に抒情的に一つの風景を描いた詩として読むこともできる。

一方この詩が発表されたのが 1906 年、20 世紀初頭であることも興味深い。なぜなら、この詩は 18 世紀末から 19 世紀初頭のヨーロッパを席捲したロマン主義⁴の影響が強く見受けられるからである。そこで本稿では、この詩の主題がルナリアという花である点と、最終連に現れる花と星の関係性という二つの観点から、この詩がどのようにロマン主義に影響を受けているか考察する。そしてその結果詩が持つに至った効果について考えてみる。

2.1. 主題がルナリアであること

この詩においてルナリアはイヌバラやヒルガオ、スイカズラなどの他の花とは異なる、目立たない孤高の存在として描かれている。またルナリアは、あくまで自然の中に咲く「野の花」の一つであり、派手さや華やかさからは一歩ひいた、素朴な魅力と力強さにあふれている。

ロマン主義は、合理化を推し進め「人間」を無視した時代に反旗を翻し、こうしたささやかな自然や、それに感応する人間の感受性に重きを置いていた。「野の花」には「人間の幼年時代」つまり無垢の時代を象徴する働きがある。ドイツロマン派の代表的詩人ノヴァーリスは 1800 年 4 月 15 日の日記にこう記している。

この世には、超地上的な起源をもち、地上の風土のなかでは栄えない花たちが少なくない。本来、それらは、未来のよりよき生活を告げる使者、伝令氏（ヘーロルト）である。これらの花たちのひとつに、とりわけ宗教と愛がある。

⁴ 山中, 1992, pp. 222–244 参照

ここには「地上の風土」つまり現代の社会から、「よりよき生活」つまり人間の感性を重視した新しい世界へと導くものをして花が挙げられている。未来のよりよい世界はこの場合、人類が原罪を背負う前の、穢れのない魂を持った幼年時代とほぼ等しい。

ルナリアという花が, Ekelund にとって自分の幼少期の象徴となるようなものであることは、すでに挙げたエッセイの一文から明らかである。さらにルナリアは彼の出身地スコーネと、切っても切れない関係にある。幼少期の純粋な心と郷愁、この二つがこの詩の支点になっている。

2.2. 最終連の花と星の関係性

最終連はルナリアが夜、星々と語る場面を想起している。いかにも詩的な表現だが、この花と星の語り合い、という要素も大変ロマン主義と関わりが深い。

ノヴァーリスの引用からもわかる通り、ロマン主義において花は伝令氏（ヘーロルト）であり、天と地をつなぐもの、天とコンタクトを持つものという面を持っていた。ここにはキリスト教的な考え方も多く表れているが、地上とは別に天上界が存在するという世界観は、キリスト教にだけあてはまるものではない。

ロマン主義において天と地が特に結びつくのは、夕暮れから夜にかけての時間だった。このとき地上の花は天上の星とまなざしを交換し合う。星と花の交流を表現した詩にはイギリスロマン派詩人ワーズワースの『うた』がある。

苔むす石のかげに咲く
人眼にふれないひとつの菫。
——夜空にただひとつ輝いている
星の美しさだった

この詩ではスミレの花を星に例えており、スミレに似た花であるルナリアを扱っている”Lunaria”との類似性を見出すことができる。

またこの詩は単にスミレを星に例えているだけではない。詩に描かれている風景を思い描けば、自然と花と星が向き合っている構図を想像することができる。この点も”Lunaria”における花と星との語らいと一致している。

これらのことから、”Lunaria”という詩はロマン主義に強く影響を受けた、まさにロマン主義的な詩と考えることができる。

2.3. この詩のスタイルによる効果

一昔前のロマン主義の形跡を色濃く残す”Lunaria”は、当時としても少し古い、保守的な詩として捉えられたかもしれない。あるいは、それによって逆に新鮮味があったということも考えられる。いずれにせよ、幼年期の原風景を表現するのに花というモチーフを扱うこと

や、花と星の語らいといったロマン主義的な表現を用いることによって、この詩はどこからともなく湧き上がる懐かしさや郷愁、神秘的で抒情的な雰囲気醸すことに成功している。ただし、花を通じて新世界つまり幼年世界を提示しているというよりは、幼年世界を呼び起こさせるものとして花の表現を使っている、という印象が強い。

詩や文学を通じて何かを主張するという行為と、純粋な表現技法はまた別の問題である。ロマン主義における花や星の表現は、確かに多様で美しく、当時の Ekelund になじむものだったのだろう。この詩の持つ抒情性は心情と表現のマッチングによって支えられている。また、表現自体に「古さ」が織り込まれていることで、二重に懐かしさを表現しているとも言える。

詩作というのは新しさを求めるという行為だけではないことを思い出させてくれる一篇である。

3. 参考文献

3.1. 使用テキスト

Frostenson, Katarina. Ellerström, Jonas. (2004). *Vilhelm Ekelund: Samlade dikter I-II*. Svenska Akademin.

3.2. 参考文献

Frostenson, Katarina. Ellerström, Jonas. (2004). *Vilhelm Ekelund: Samlade dikter I-II*. Svenska Akademin.

山中哲夫. (1992). 『ヨーロッパ文学 花の詩史 詩にうたわれた花の意味』.
大修館書店.

ノヴァーリス. (1970). 『日記・花粉』. (前田敬作訳). 現代思潮社.

ワーズワース, W. コールリッジ, S. T. (1984).

『抒情歌謡集——リリカル・バラッズ』(宮下忠二訳). 大修館書店.

3.3. インターネット資料

Litteratur Banken. *Vilhelm Ekelund*. <https://litteraturbanken.se/forfattare/EkelundV>.
(2019.2.13 確認)

Wikipedia. ゴウダソウ. <https://ja.wikipedia.org/wiki/ゴウダソウ>. (2019.2.13 確認)

Karin Boye の詩

片井優花

Ja visst gör det ont
Ja visst gör det ont när knoppar brister.
Varför skulle annars våren tveka?
Varför skulle all vår heta längtan
bindas i det frusna bitterbleka?
Höljet var ju knoppen hela vintern.
Vad är det för nytt, som tär och spränger?
Ja visst gör det ont när knoppar brister,
ont för det som växer
och det som stänger.

Ja nog är det svårt när droppar faller.
Skälvande av ängslan tungt de hänger,
klamrar sig vid kvisten, sväller, glider -
tyngden drar dem neråt, hur de klänger.
Svårt att vara oviss, rädd och delad,
svårt att känna djupet dra och kalla,
ändå sitta kvar och bara darra -
svårt att vilja stanna
och vilja falla.

Då, när det är värst och inget hjälper,
Brister som i jubel trädets knoppar.
Då, när ingen rädsla längre håller,
faller i ett glitter kvistens droppar
glömmer att de skrämdes av det nya
glömmer att de ängslades för färden -
känner en sekund sin största trygghet,
vilar i den tillit
som skapar världen.

もちろん痛い
つぼみが開くときはもちろん痛い。
そうでなければなぜ春はためらうのか。
なぜ私たちの熱いあこがれは
凍てついた辛く青白いものに縛り付けられるのか。
冬の間は苞もつぼみだった。
衰え裂ける、この新しいものは何だろうか。
つぼみが開くときはもちろん痛い、
成長するものの痛みと、
閉じこめるものの痛み。

しずくが落ちるときはもちろん苦しい。
不安に震えながら重く吊り下がり、
小枝にしがみついて、膨らんで、滑る—
どんなに登ろうとも、重力が彼らを引き下ろす。
不確かなのも、怖れるのも分かれたるのも苦しく、
深淵が引き込み呼び掛けてくるのを感じるのも、
そこに残ってただ震えているのも苦しい—
留まろうとするのも
落ちようとするのも苦しい。

最悪の状態でどうしようもないとき、
まるで歓喜するかのようにその木のつぼみは開く。
もう何の恐れも無いとき、
小枝のしずくがきらめいて落ちる
新しいことに怯えていたのを忘れる
旅に不安を覚えていたのを忘れる—
たちまち大いなる安息を感じ、
世界を創る

安らぎの中にねむる。

(出典： *För trädets skull*, 1935)

(片井優花訳)

カリン・ボイエの詩”Ja visst gör det ont”をめぐって —木の成長が持つ両義性—

0. はじめに

筆者が留学生活約 10 か月間を過ごしたスウェーデン第 2 の都市ヨーテボリは、詩人カリン・ボイエの出世の地である。ヨーテボリ中心街にある図書館 Stadbibliotek の隣には少女時代の彼女を模した銅像が設置されており、花を手に握らされていたり毛糸の帽子を被せられていたり、市民に愛されながらヨーテボリの街並みに溶け込んでいる。1909 年にストックホルムに移り住むまで、ボイエは少女時代をこの街ですごした。そしてまた、彼女の遺体が見つかったのはヨーテボリから 1 時間半ほど電車とバスを乗り継いだ先にあるアーリングソースという小さな街であり、いま彼女が眠っているのはヨーテボリの中央駅からトラムで 10 分程度の場所にある墓地である。ヨーテボリでの 10 か月を通して、筆者は今も愛され続けるこのカリン・ボイエという詩人に関心を持った。

母国スウェーデン国内では非常によく知られた詩人であるカリン・ボイエだが、いまだ日本においての知名度はほとんど無いものと言って良いだろう。日本では唯一、長編小説『カロカイン』*Kallockain* が出版されるのみに留まっている。そこで筆者は卒業論文にて、微力ながら彼女の詩を日本の読者に紹介するため、彼女の象徴的なモチーフ「木」に着目し 6 篇の詩を分析した。本稿ではその中の 1 篇、ボイエの代名詞的な詩である「もちろん痛い」”Ja visst gör det ont”を紹介する。

1. 作品概要

1.1. 作者 Karin Boye について

1900 年 10 月 26 日、3 人姉弟の第一子としてヨーテボリに生まれる。文化的に豊かな家庭だった。1909 年にストックホルムに引っ越し、このころから彼女は詩を書くようになる。

1921 年から 26 年にかけてはウプサラ大学でギリシャ語や北欧語、文学史を学ぶ。在学中の 1922 年に処女詩集『雲』*Moln* を出版した。在学中にはさらに 2 冊の詩集を上梓している。

また 1925 年から 32 年まで、クラルテ (Clarté) という無党派の社会主義・反ファシズムの団体のウプサラ支部に所属し、その活動に没頭した。1928 年にはクラルテのメンバーとともにソビエト連邦にも訪れている。1929 年、クラルテのメンバーであった Leif Björk と結婚した。

1931 年、初の小説『アスタルテ』*Astarte* を出版、北欧小説賞 (Nordisk romanpristävling) を受賞した。

1932 年 1 月、夫 Leif Björk と離婚すると、ボイエはベルリンへと飛び、その後 1933 年にかけてドイツに滞在する。このドイツ滞在中に初めて本格的な精神分析を受けた。また、その後生涯の伴侶となるドイツ人女性 Margot Hanel に出会った。1934 年以降は彼女とともに

にストックホルムで生活している。

ドイツからスウェーデンに戻って以降の数年間に、ボイエは小説作品を次々と発表。1935年には彼女の代表作となる詩集『木のために』 *För trädets skull* が出版された。

1941年4月23日、ヨーテボリ郊外の町アーリングソースにて遺体が発見された。死因は睡眠薬による自殺である。

主な詩集は『雲』(1922), 『隠された土地』 *Gömda land* (1924), 『炉辺』 *Härdarna* (1927), 『木のために』 (1935), 『七つの大罪』 *De sju dödssynderna* (死後 1941), 主な小説は『アスタルテ』 (1931), 『危機』 *Kris* (1934), 『カロカイン』 (1940) などである。

1.2. 詩集『木のために』 *För trädets skull* について

1935年に発行されたボイエ4冊目の詩集である。34のボイエ作の詩と、ボイエが Erik Mesterton とともにスウェーデン語への翻訳を行った T. S. エリオットの『荒地』 *The Waste Land* をはじめとする翻訳詩数本が掲載されている。

詩集の構成は基本的に年代順になっている。掲載された詩には、1927年に出版された3冊目の詩集『炉辺』以降の8年の空白のあいだ彼女の身に起きた様々な出来事が反映されており、特に Margot Hanel らとの恋愛やベルリンでの精神分析の体験の影響が見られると言われている。また、それ以前に発行された3冊の詩集は伝統的で明瞭な形式で書かれており、ボイエの理想主義者であり唯美主義者である側面が反映されていた一方で、この新しい詩集は神話や深層心理に由来するイメージを含む、モダニズム的な詩のスタイルに変化したと先行研究では指摘されている¹。

この詩集は同時代の批評家たちには”modernistiskt dunkel”(モダニズム的な暗闇)と評されていたが、後世になってこれに収録されているモダニズム的な作品「太陽への祈り」”Bön till Solen”, 「蝶でいっぱい私の肌」”Min hud är full av fjärilar”, 「もちろん痛い」”Ja visst gör det ont”などが、彼女の傑作として認められるようになった²。Svenska Akademien によって発表された「世界の図書館が選ぶ50の詩集」³の1つにも選出されている。

2. ”Ja visst gör det ont”についての考察

この詩はクロノロジカルな構成となっており、1本の木を中心に据え、季節が冬から春へと移り変わっていく。1連目では春を待つ花のつぼみ、2連目では小枝についた水滴に注目し、それぞれ春に至るまでの苦しみを描く。3連目ではついに春が到来、花のつぼみは開き、しずくはきらめきながら落ち、安らかな春が訪れるのだ。

特筆すべきは、一貫して示される両義性だろう。レイコフ、ターナー(1989)によると、「人

¹ KVINDELITTERATURHISTORIE PÅ NETTET. 2012.

<https://nordicwomensliterature.net/writers/boye-karin/>. 2018年12月26日確認。

² Lönnroth・Delbranc, p.38.

³ Världsbibliotekets lista över de 50 bästa diktsamlingarna

間は植物である」という隠喩に則り、人間の一生はしばしば植物に重ね合わされ⁴、その中でごく一般的には「春は誕生・再生の季節、冬は死の季節」とされる。この詩においても、第1連で冬を「凍てついた辛く青白いもの」、春への待望を「私たちの切なるあこがれ」と描写しているところから、その一般的な隠喩は大前提として成立していることが窺える。しかしその一方で、この詩は読者に「苦しみの冬・喜びの春」という安易な二項対立を感じさせない。第3連で春が訪れ、「歓喜」"jubil"という単語も登場するものの、世間一般にイメージされるような、もしくは北欧人が長い冬の間ずっと待ち望んでいるような「歓喜の春」とは必ずしも同一でない—もしくはそれとは反対の一印象を受ける。というのも、春を迎えるまでに味わう苦しみと、春の訪れとともに消えていく存在についての描写が我々に強い印象を残すからだ。春という季節が内包するアンビバレントな性質が、この詩全体を覆うある種の静けさのようなものを創出している。

作者ボイエは、この詩を「愛と死の詩」とであると語ったという⁵が、それに基づきここでは「死」の部分に特に注目してこの詩の持つ両義性を検討し、その上でこの詩においてモチーフ「木」が表象しているものについて考察する。

	冬	(経過)		春
一般的なイメージ				
	死	→		再生・誕生
1 連				
つぼみ	一体化している	分離する	成長する	花開く
苞(覆い)			閉じ込める	衰え裂ける
2 連				
しずく	木の枝にいる	重力に引き下ろされる		落下する

この詩で描写されている現象を、冬から春への時間の移り変わりに注目してまとめたものが上の表である。また、参考として一般的なイメージについても併記した。

第1連においては春を待つ木のつぼみについて一より正確に言うなれば、「つぼみ」"knopp"という花の部分と「苞(直訳では"覆い")」"hölje"とよばれるつぼみを覆う緑色の部分について語られている。苞はもともとつぼみの一部だったのだが、春の訪れに際し「つぼみ」とは分離するのだ。そしてつぼみと苞はそれぞれ「成長するもの」と「閉じこめるもの」になり、つぼみはいわば「誕生」を迎え、一方で苞は「死」を迎える。ここには「ひとつのものが分

⁴ ジョージ・レイコフ、マイク・ターナー。 p.8.

⁵ Svedjedal, p.329.

化してまったく異なる運命をたどる」というところに両義性を見ることができる。また、春の象徴とも言える花が、このような死の上で誕生しているという点でも両義性を含んでいると言っているだろう。さらに、第2連で描写される枝についたしずくについても、春の訪れとともに落下するという点において同様のことが指摘できる。なお、後述する詩「木々」の中に「生命が土へと還っていく」という表現があることから、しずくの落下は死を表象していると考えて差し支えないだろう。

第3連では、満を持して春が到来する。しかし、冬もしくは冬から春へ移り変わる時期を扱っている第1連・第2連では「生きるための闘争」の描写が多くみられるのに対し、この第3連からはどこか静けさのようなものが感じられる。連の前半では「歓喜」"jubel", 「きらめいて」"i ett glitter"という輝かしい表現を用いて春の到来を表現しながらも、最後の3行では「安息(直訳では"安心")」"trygghet", 「安らぎの中にねむる(直訳では"信頼の中に安息する")」"vilar i den tillit"などの静的なイメージを誘う言い回しが用いられているのだ。特に"vilar i den tillit"という表現からは、英語でいうところの"rest in peace"に相当する"vilar i frid"という慣用句が想起される。春という季節には歓喜と同時に静けさも内包されており、ここにも我々は両義性を見て取ることができるのだ。そしてそれを踏まえたとき、この連における「新しいこと」"det nya"や「旅」"färden"が意味するものが、未来や新しい生のことであるのか、それとも死や死出の旅のことであるのか、読者はわからなくなるのである。

したがってこの詩においてボイエは、春の訪れが「再生」「誕生」というイメージに特徴づけられる歓喜の季節であることを前提とし、そこに至るまでの闘争や生命力、到来する歓喜を描きながらも、同時に内包されている「死」をじっと見つめているのだ。そして、一般的な春のイメージだけに終始せず両義性を見出していくこのまなざしからは、ボイエがむしろ春という季節に対して「死」の観点に立っていることが感じ取れる。

上記で検討したことから、この詩における語り手は、「木」を通して「両義性をはらみながら前へと前進していく世界」を見ていると考えることが可能だろう。木を中心に据えて普遍的な世界の理について語っているのだ。これは、北欧神話において神々や人間の住む9つの世界を内包し、世界そのものを体現している大木、ユグドラシルのイメージを反映しているのかもしれない。ここにおいて「木」は、様々な生命・物質をその身にあずかりながら悠然と成長する存在として描かれ、その成長には多くの痛みや死が内包されているのだ。

3. おわりに

筆者は自身の卒業論文において6篇の詩を考察した末に、ボイエの詩作におけるモチーフ「木」の特徴はその「神秘性」であると結論付けた。この神秘性は本稿で扱った詩「もちろん痛い」でも見ることができる。一般的に、木はその様子から「成長力」と強く結びつけられることが多いが、ボイエはその成長に生と死の両義性を持たせて描くことにより、読者が安直に「木」を歓喜へと向かう動的なエネルギーに結び付けることを拒む。そしてそこに生まれた静的・両義的なイメージが、木に「神秘性」のヴェールを付与しているのである。

ボーエは動乱の時代を駆け抜けるように生き、41歳で自殺を選んだ。ニーチェの学説やフロイトの精神分析の登場を目の当たりにし、当時まだ社会的に許されなかった同性愛や、2度の大戦をも経験するという、従来の観念が次々と崩れつくりかえられていくような人生だっただろう。また自殺未遂も複数回あったと言われ、彼女は常に生への渴望と死の魅惑との間を行き来し苦悩していた。そのようなボーエにとって「木」という存在は、どんなときでも変わることなく静かにゆっくりと成長していく、信頼できる存在であり、また同時に、北欧神話的な概念のもとでどこか神聖ではかりしれない、俗世を超越した大いなる存在だったのかもしれない。

4. 参考文献

4.1. 使用テキスト

Karin Boye. <https://litteraturbanken.se/forfattare/BoyeK>. 2019年1月19日確認

4.2. 参考文献

レイコフ, ジョージ・ターナー, マイク. (大塚俊夫訳). 1994. 『詩と認知』. 紀伊国屋書店.

Lönnroth, Lars・Delbranc, Sven. 1989. *Den Svenska Litteraturen V*.

Bonniers Fakta Bokförlag AB.

Morén, Monica. 2001. *DITT NAMN BLAND KERBERNA. EN STUDIE I KARIN BOYES POETIK OCH POESI*. Department of Literature, Uppsala University.

Svedjedal, Johan. 2017. *Den nya dagen gryr*. Wahlström & Widstrand.

4.3. インターネット資料

Helgeson, Paulina. (2012). *Karin Boye*.

https://litteraturbanken.se/red/forfattare/BoyeK/presentation/BoyeK_presentation.pdf. 2019年1月19日確認

Lenken, Peter. (発行年不明). *Hon tog sitt liv i en skogsdunge i Alingsås*.

<https://www.vastsverige.com/alingsas/produkter/karin-boyes-minnessten/>. 2019年1月19日確認

Karin Boye. <https://nordicwomensliterature.net/writers/boy-karin/>.

2019年1月19日確認

Karin Boye Sällskapet. <http://www.karinboye.se>. 2019年1月19日確認

Lisa Sandell の詩

伊地知俊紀

Bred dina vida vingar

Bred dina vida vingar,
o Jesus, över mig,
och låt mig stilla vila
i ve och väl hos dig.
Bli du min ro, min starkhet,
min visdom och mitt råd,
och låt mig alla dagar
få leva av din nåd.

Förlåt mig alla synder,
mig rena i ditt blod.
Giv mig ett heligt sinne,
en vilja ny och god.
Tag i din vård och hägnad
oss alla, stora, små,
och låt i frid oss åter
till nattens vila gå.

大きな羽を広げてください

大きな羽を広げてください,
イエス様は私の上に,
私に安らぎを与えてください,
あなたの元で、辛い時も嬉しい時も。
あなたは私の安らぎ、強さ,
知恵と導き手になります,
どんな日も私を受け入れ
あなたの慈悲で生きることをお赦しください。

私の全ての罪をお許しください,
あなたの血で私を清めてください。
私に聖なる心を,
新しい良い意思をお与えください。
私たちを支えてください
大人も子供も、私たち皆を,
そして再び
安らかに眠らせてください。

(出典： *Den svenska psalmboken*, 1986)

(伊地知俊紀訳)

1. 作者紹介：Lina Sandell-Berg(1832-1903)

詩人、作家、賛美歌作者。キリスト教ルター派プロテスタント。

ユンシューピング地方の Fröderyd 教区で生まれる。幼少期は家庭で牧師の父より教育を受け、8-9 歳になると外国語を操れるようになっていた。もともと病弱で、10 歳に発症した神経熱が原因で体の一部が麻痺してしまった。その後、さらに衰弱し、死にかけると死の淵より生還。そのとき、教会で父の読んでいた聖書の一部を読み、死から蘇ったヤイロンの娘の部分を読んだ時に、「準備はできているか」と神からの声を聞いた、というエピソードがある。26 才の時に父が、その 2 年後には母が亡くなった。1867 年に 7 歳年下の Oskar Berg と結婚し、その後ストックホルムへ引っ越した。

彼女は 1700 以上の詩を残したが、とりわけ有名な作品が“Tryggare kan ingen vara”「誰も安息することはなし」、”Blott en dag”「たった一日」、”Jag kan icke räkna dem alla”「わたしは数えない」、そして本稿で扱う”Bred dina vida vingar”「大きな翼を広げてください」の 4 篇である。いずれも賛美歌としての知名度が非常に高い。

2. タイトルについて

”Bred dina vida vingar”について、筆者は「大きな羽を広げてください」と訳したが、誰の羽を指しているのかという点については疑問が残る。というのは、イエスは本来羽を持っていないと考えられるためである。しかし、”dina”を含め本作における二人称はイエスのことを指していること、さらにイエス以外の人物が考えられないこと。以上のことを踏まえると、イエスが大きな羽を広げ、我々(キリスト教信者)を包み込んでください、と考えるのが意味的にも自然だと考えられる。

3. 音楽的観点からの分析

3.1. リズムおよび語感について

この賛美歌は、第一連と第二連においてメロディに違いはなく、また韻を踏むのに重要な母音の数は両者で完全に対応している。このため、作者はメロディをつけることを前提にしていると考えられる。

語感について、”Låt i frid oss åter”の部分は、本来”Låt oss vila i frid åter”とされるはずだが、母音の数や歌うときの語感のために少し切り落としたり、語順を整えたりしている。

また、曲はアウフタクト(4 拍子の曲において、曲の一番初めを 4 拍目から始める、いわば助走のようなもの)で始まり、曲の頭の部分からイエスが羽を壮大に広げる様子をイメージすることができる。

3.2. メロディおよびコード信仰の果たしている役割について

先程述べたような、羽を壮大に広げるイメージについては、コード進行からも読み取ることができる。冒頭の”Bred dina vida vingar”の部分では G メジャーにおいて弱々しく不安定な

コード D, F# (ドミナント) から羽を広げる大らかなイメージを想起させるコード G が使われて G→F#→G と進行しており、歌詞の意味をメロディがよく反映していると言える。

また、各 8 行ある連のうち、1 行目から 4 行目までと 7 行目から 8 行目までは安定感の強いメロディ (G や Em) で進行するのに対して、5 行目から 6 行目にかけてはそれまでの状況から一変して、ほとんどが緊張感や不安定感の強い効果を持つコードおよびメロディで進行する。各連の 5 行目から 6 行目は、「あなたは私の安らぎ、強さ、知恵と指針になります」、
「私たちを支えてください、大人も子供も、私たち皆を」となっており、辛く厳しい状況が連想され、そこに人々が救いを求めている情景が思い浮かぶ。これはメロディおよびコード進行に対応したイメージや言葉が当てはまっていると考えられる。この詩では、特に冒頭部および中間部において、もし音楽がなければ緊張感や物語の展開の予想はできず、まったく異なったイメージを抱くであろうと考えられるので、メロディが付いていることは詩のイメージをさらに豊かに彩ることに貢献していると言えるだろう。

4. まとめ

「大きな羽を広げてください」というタイトルは一見奇妙であるが、キリスト教の観点に基づくと、神であるイエスがキリスト教の信者を守るという意味で、大きな羽を広げて皆を守るということを意味していると理解することができる。またこの詩は賛美歌として、リズムや語感、さらにメロディやコード進行において多彩な工夫がなされており、音楽には詩のイメージをより鮮明なものにする働きがあると言える。音楽なしでは、この詩のイメージは完全にはならないだろう。

今回は詩の韻についてあまり考察できなかったのですが、次回機会があれば韻が曲中、詩中で果たす役割についても考察したい。

5. 参考ホームページ

Svenska Yle. *Fascinerad av Lina Sandell*.

<https://svenska.yle.fi/artikel/2015/02/05/fascinerad-av-lina-sandell>. (2019.2.13 確認)

DAGEN. *En av Sveriges mest älskade psalmdiktare*.

<http://www.dagen.se/livsstil/en-av-sveriges-mest-alskade-psalmdiktare-1.112555>

(2019.2.13 確認)

Carl Jonas Love Almqvist の詩

大鋸瑞穂

Tintomaras sång

Mig finner ingen,

Ingen jag finner.

Alm, hägg och hassel blomstra för vind

Jag ler åt alla,

Alla åt mig le.

Alm, hägg och hassel, lönn, sälg och lind

Blomstra för vind,

Buga för vind –

Ett vet jag bättre än att klänga och springa,

Det är att sjunga här under lind.

Hvad? Tintomara,

Hörde du bara?

Alm, hägg och hassel blomstra för vind

Gök, trast, harar...?

Tyst...kan det vara...?

Alm, hägg och hassel, lönn, sälg och lind

Blomstra för vind,

Buga för vind –

Ett vet jag värre än skator och harar,

Det är om slagbjörn kommer till lind.

Kommer en slagbjörn,

Slagbjörn jag smeker.

Alm, hägg och hassel blomstra för vind

Men – Tintomara,

Om han ej smeker?

Alm, hägg och hassel, lönn, sälg och lind

Blomstra för vind,

Buga för vind –

Då blir jag fågel! jag blir ingen svag örn,

Flyger från slagbjörn bort som en vind.

野性の歌（ティントマーラの歌）

私を見つける者はいない

何者も私はとらえない

（榆の木、溝桜、榛の花々が 風に揺られて咲き零れる）

私は皆に微笑みかけ

皆は私に笑みを返す

（榆の木、溝桜、榛に、楓、山猫柳、冬菩提樹の木々

風のなかで咲き誇る

風に吹かれて頭を垂れる―）

私は一つ知っている 木によじ登り 駆け回るよりずっといいこと

それは菩提樹の下で歌うこと

どうしたの？ティントマーラ

森の声を聴いていたの？

（榆の木、溝桜、榛の花々が 風に揺られて咲き零れる）

かっこう、鶉、野兎たち…？

静まって…一体どうして…？

（榆の木、溝桜、榛に、楓、山猫柳、冬菩提樹の木々

風のなかで咲き誇る

風に吹かれて頭を垂れる―）

私は一つ知っている 鵲や野兎よりも恐ろしいこと

それは獰猛な熊が菩提樹へとやって来ること

一匹の熊がやって来る

その身体を私は撫でる

（榆の木、溝桜、榛の花々が 風に揺られて咲き零れる）

でも―ティントマーラ

もし彼が応えなかったら？

（榆の木、溝桜、榛に、楓、山猫柳、冬菩提樹の木々

風のなかで咲き誇る

風に吹かれて頭を垂れる―）

ならば私は鳥になろう！弱さの微塵もない鷺になり

熊のもとを風のように飛び去ろう

（出典： *Drottningens juvelsmycke*, 1834）

（大鋸瑞穂訳）

1. 作者紹介：Carl Jonas Love Almquist (1793－1866)

スウェーデン、ストックホルム出身の 19 世紀の作家。スウェーデン文学史上最も偉大で多才な作家の一人であると言われ、後世の作家や詩人に多くの影響を与えていることで知られている。ルソーの思想への憧憬から農夫になった時期もあれば、教育人として小学校の校長をつとめ、ジャーナリストとして働いていた時期もあり、作品もロマン主義からリアリズム的なものまで幅広い。代表作に本作や短編小説 *Det går an*『それでよい』(1839)がある。

2. 小説 *Drottningens juvelsmycke*『女王の宝石飾り』について

2.1. 概要

アルムクヴィストの代表作 *Törnrosens bok*『野ばらの書』の第 4 巻に収録され、1834 年に発表された脚本形式の長編小説。『野ばらの書』はアルムクヴィストが 1832-51 年の間に執筆した小説ほか詩や戯曲、エッセイなどを収録した作品集で、正式タイトルを *Fria Fantasier hvilka, betraktade såsom ett helt, af Herr Hugo Löwenstjerna stundom kallades Törnrosens Bok, stundom En irrande Hind*¹ といい、その内容は全体において枠物語の体裁をとっている。“Drottningens juvelsmycke”「女王の宝石飾り」はその中でも特に有名な作品として知られ、現在も様々な解釈、アレンジのもと舞台等で上演されている。

2.2. 作品内容

本作は 1792 年 スtockホルムのオペラ座で起こったスウェーデン王グスタフ 3 世の暗殺事件を下敷きにしたスウェーデン最初の歴史小説と言われ、事件をきっかけに展開する主人公ティントマーラの数奇で悲劇的な人生を描いている。作中のティントマーラはアンドロギュヌス(両性具有者)として描かれており、男性・女性を問わずして人々を魅了し、また時として彼らを破滅に導く存在である。暗殺事件の当日の夜、女王の宝石飾り(ティアラ)を盗み、暗殺に関与した疑いで無実の罪を着せられたティントマーラは生まれ育ったオペラ座を離れて森へ逃げ込む。森で男二人組と一組の姉妹と出会い、共に暮らし始めるが、4 人全員がティントマーラに惹かれ、恋に落ちてしまう。恋愛感情を持たず、気持ちに伝えられないティントマーラは 4 人のもとを離れ、再びストックホルムへ戻るが後に悲劇的な最期を遂げる。

3. 詩の構造分析

全体的な構造としては、本作は 10 行 3 連の詩で、各連は呼応する 2 行のかたまりと、全ての連において共通して挿入されるイタリック体で書かれた 1 行および 3 行から成る部分によって構成され、従って連全体を 2・①・2・③・2 行に区切ることが出来る。また①と

¹ 本タイトル直訳『全体として見れば、ヒューゴ・ルーウェンシェーナ氏によって時に野ばらの書、時にあてもなく彷徨う一匹の女鹿と呼ばれる、自由なる空想物語集』

③では一部共通の文章が反復的に用いられており、連単位でも詩節単位でも、本作は構造上において非常に規則性のある詩となっている。それはこの詩が律動を伴って歌われることを前提として書かれた「歌詩」であることと関係があるのではないかと考えられる。

またこの詩の大きな特徴に、視点の変化が挙げられる。第 1 連においてはイタリック体の行を除き、一人称単数形 jag が主体となっているが、第 2 連 1・2 行目において第 3 者からの呼びかけ(“Hvad? Tintomara,”)が行われ、それによって jag であるところのティントマーラを俯瞰するような視点が生まれている。そこからは jag の視点と第 3 者の視点が交互に移り変わり、その合間にはイタリック体で書かれた情景描写が挿入され、最終的に第 3 者からの問いかけに応じるかたちで、jag 主観で書かれた 2 行によって詩は締めくくられる。それらはこの詩が劇中歌であることに深く関係し、またこの小説自体が枠物語内で語られる劇中劇であることとも関連付けられる。

(各連における構造)

- 第 1 連 1・2 行目および 4・5 行目における呼応関係、倒置反復
3・6－8 行目における脚韻、頭韻 -lind/-vind Bl-/Bu- (全連共通)
9・10 行目における動詞不定形語尾の一致 klän**ga**/spring**a**/sjung**a**
- 第 2 連 1・2 行目および 4・5 行目における呼応関係、および脚韻 -ara/-arar
第 1 連の 9・10 行目との対称性および反復表現 Ett vet jag bättre/värre
- 第 3 連 1・2 行目および 4・5 行目における呼応関係
9・10 行目における単語の音韻一致 svag örn/slagbjörn

4. 詩の解釈

上記に述べた構造分析にある通り、この詩の特徴はこれが劇中歌であることにあり、さらにその劇そのものが枠物語内に組み込まれた劇中劇であることは、この詩の解釈にあたって重要な意味を持つ。本作は小説「女王の宝石飾り」の第 9 章、ティントマーラがオペラ座を逃げ出して駆け込んだ Kolmorden の森にて、ティントマーラ自身によって歌われる劇中歌の「歌詩」であり、それゆえに一般的な詩作や詩集に対する分析とはまた異なったアプローチが必要になってくる。それはつまり小説内における「歌詩」としての効果や、物語及び登場する人物との関係性に焦点を当てた分析であり、物語の中心人物が詩題に名を冠する以上、後者は特に必須である。

小説「女王の宝石飾り」は作品集『野ばらの書』に収録された脚本形式の小説であり、枠物語の外枠のストーリーにおける登場人物リッカルド・フルモ、あるいはヒューゴ・ルーウェンシェーナといった語り手によって物語られる小話の一つという体裁をなしている。詩の全連における一人称 jag は全て歌の主体であるティントマーラ自身のことであると考えられるが、そこで訳出にあたって生じる疑問点として以下の二点が挙げられる。全連 3 行目及び 6-8 行目に置かれた詩がイタリック体で書かれている意図は何か(日本語訳において

は括弧内に入れて訳出)。そして第2連1, 2行目及び第3連4, 5行目においてティントマーラに呼び掛ける声は誰のものなのか、という点である。

第一の点においてまず考えうるのは、書体を変化させることで、その光景が主体とは別の視点から描写されているということを暗に示しているという説であるが、それはこれが第三者の視点から書かれた小説であるということ、さらにはこの詩を内包する物語が枠物語内で語られる劇中劇であって、物語の外にはまた別の語り手が存在しているという前提から考察されうるものである。そこで原作の当該箇所を読むと、第1連6行目末尾にアスタリスクを用いた注釈が付けられており、それは以下のように記されている。

おそらくヒューゴ氏はこれら全ての樹種が皆同時に開花することはないだろうと指摘するであろう。私は森でのこの貧相な即興が物事をそれほど忠実に捉えてはいないが、しかし（実際）彼女は数種の木々に咲いた花々を見たときに、それら全てについてを歌ったのだ、ということ以外の答えを出すことはできない。加えて、私はどんな人々にとっての非合理的な発想や発言、あるいは不条理な出来事にも責任を負うことはしない。

これはその語り口から物語の語り手リッカルドによって加えられた注釈であると考えられるが、つまりここから分かることは、第三者の語り手にとってもその内容は確かなものではなく、これらの詩の描写は主体からの視点ではあるが少なくともティントマーラの目の前に広がる光景を忠実に映し出したものではなく実際の光景から着想を得た想像上の風景である可能性が大いにあるということである。それらを踏まえて改めて原詩を振り返ると、詩が異なる書体で書かれることにより、描かれた情景を読み手により印象的に、また際立って幻想的に想起させる効果があると分かる。

第二の疑問点に関しては様々な解釈が可能であるが、第2連のそれに続く言葉を順に追っていくと、2行目の“Hörde du bara?”が何を意味するのかもまた問題となってくる。4, 5行目及び9, 10行目から第3連への流れを、ティントマーラが鳥や兎たちが静まり返る様子から不穏な気配、つまり罌の到来を予感したと解釈するならば、2行目に対する答えとして、ティントマーラは森の中で耳をすませ、動物の鳴き声や彼らが動き地面を踏みしめる音を聞いていたのではないかと推測できる。第1連の流れを汲んで、森とティントマーラの間をより近いものと表現するためにこれらを擬人的に「森の声」と訳出したが、小説内における神の視点でもってティントマーラを俯瞰し問い掛ける声の主もまた森、あるいは自然そのものであると言えるのではないかと考えられる。

また詩全体を解釈するにあたっては、作者がこの森でのシーンに劇中歌を置いている点に関して、ティントマーラの人物造形を踏まえた考察の余地があるだろう。作中ティントマーラは男性、女性の性別を問わずして人々を魅了する両性具有者(アンドロギュヌス)であると同時に、無性愛者(アセクシャル)的な存在として描かれており、特定の性を持たぬ存在と

して他の登場人物たちとは一線を画している。またオペラ座で生まれ育ったティントマーラは洗礼を受けておらず無宗教で、また本名すら持っていない(ティントマーラという名もオペラの舞台から仮にとって付けられた名である)。そういった人間の規範から外れた存在であるティントマーラは、この詩に見られるように自然に溶け込み、一体化する動物的な性質を持っており、そこから今回詩訳をするにあたって、この「ティントマーラの歌」という詩がティントマーラの本質をその自由な野性にあるものとして歌ったものであると解釈した上で、詩題邦訳を「野性の歌」とするに至った。詩の中で描かれる豊かな自然は自身を匿い、見守りつつ時に脅威ともなりうる存在である。この詩の魅力は、それら自然の中に表れるティントマーラの持つ野性の輝きが美しく描き出されている点にあるといえよう。

5. 参考文献

- Almqvist, C.J.L. (1834/2000). *Samlade verk 6. Törnrosens bok. Duodesupplagan. Band IV. Drottningens Juvelsmycke*. (red. av Lars Burman). Stockholm: Svenska Vitterhetssamfundet.
※以下の URL で閲覧可能：<https://litteraturbanken.se/forfattare/AlmqvistCJL/titlar/SamladeVerk6/sida/III/etext> (2019. 2.23 確認)
- Andersson, Jenny. (2008). *Text i tolkning: Berättarteknisk analys av Carl Jonas Love Almqvists Drottningens juvelsmycke* (Unpublished master's thesis). Karlstad University, Sweden.
※以下の URL で閲覧可能：www.diva-portal.org/smash/get/diva2:24593/FULLTEXT01.pdf (2019. 2.23 確認)

Anna Rydstedt の詩

竹内あゆみ

Frukost

Kom morgon med stilla arom
av grapefruktens beska gryningssyra.
Kom sol och slicka honung ur mitt te.
Bred mejerskans glädjekärnade smör på ditt bröd.
Känn den unga kons oskyldiga glädje över osten
med löpet från hennes första kalv.
Kom sol, så skall du få en apelsin.

朝食

朝よいらっしゃい、夜明けのグレープフルーツの
苦くて酸っぱい穏やかな香りとともに、
太陽よ登っていらっしゃい、そして私のお茶からはちみつの味を味わってみて、
バターをあなたのパンに塗ってみて、そのバターは搾乳婦が愛情を込めて攪拌したの、
感じてみて、そのチーズに託された若い雌牛の純真な喜びを、
それには自分の初めての子牛から採った酵素が生きているの、
太陽よ登っていらっしゃい、そうしたらあなたにオレンジをあげましょう。

(出典：SVENSK POESI UNDER REDAKTION AV DANIEL MÖLLER OCH NIKLAS SCHIÖLER, 1957)

(竹内あゆみ訳)

1. 作者紹介：Anna Rydstedt (1928-1994)

Rydstedt は 1928 年にスウェーデンの Öland 南部にある小さな村 Vantlinge で生まれた。1990 年から 5 年間、ルンド大学で学び、この頃から雑誌や新聞で詩を発表するようになる。大学卒業後は、フォルクフーグスコーラの教師としてスコーネやストックホルムで教鞭をとった。彼女は牧師を目指していたが、当時保守的な神学者や教授たちは女性が牧師になることに強く反対していたため、彼女の希望が叶うことはなかった。第一詩集 *Bannlyst prästinna* 『追放された女牧師』(1953)では、そのことに対する怒りと失望が強く表現されている。

Rydstedt は仕事を続けながらも、夏の間は帰郷する生活を送っていたが、1965 年、母親の死をきっかけに実家の農園を引き継いだ。第二詩集 *Lökvår* 『たまねぎの春』(1957)は Öland の風景に感化された詩が多く、全体的に平易で日常的であり、第一詩集の雰囲気とは大きく異なるものとなっている。故郷 Öland は彼女にとって非常に重要な存在であり、後に「自分の人生の中心である」と述べている。

その後、Rydstedt は 1994 年に亡くなるまでに、*Min punkt* 『私の点』(1960)、*Presensbarn* 『現代のこども』(1964)、*Jag var ett barn* 『わたしはこどもだった』(1970)、*Dess kropp av verklighet* 『現実の身体』(1976)、*Genom nålsögat* 『針穴の向こう』(1989)、の 4 冊の詩集を世に送り出した。また、第八詩集 *Kore* 『コーレ』(1995)が死後友人によって出版されている。

彼女の詩は、大いなるものと小さきものの結びつきを捉えていると評価されている。現実や日常についての丁寧な表現は、生と死にまつわる実存的な問い、という大きなテーマを孕んだ緊張を持っており、彼女の詩の奥深さはそこにあると言える。

2. 詩の解釈

“Frukost”は第二詩集『たまねぎの春』に収録されている。この詩はタイトルの通り朝食がテーマとなっており、太陽がくれた恵みに対して感謝し、語り手が太陽に対し色々なものを与え、お返しをするという内容である。

特徴的なのは事細かな形容で、日本語に訳す際、あまりに具体的になりすぎて詩的な文章にするのが難しく感じるほどだった。例えば一行目の “stilla arom av grapefruktens beska gryningssyra” では、グレープフルーツに、“stilla arom” (穏やかな香り)、“beska” (苦い)、“gryningssyra” (夜明けの酸味)と、三つの形容が施されている。“mejerskans glädjekärnade smör” (搾乳婦が愛情を込めて攪拌したバター)や “den unga kons oskyldiga glädje över osten med löpet från hennes första kalv” (チーズに託された若い雌牛の初めての子牛から採った酵素とともにある純真な喜び)にも同様の事が言える。ここで繰り返されている “glädje” (喜び)はどちらも太陽に対して喜んでバターやチーズを捧げていることを示している。

そして最後に捧げられているのがオレンジである。このオレンジには今まで過剰なほどに施されていた形容が一つもない。そのため、具体性はあまり感じられず、シンプルで象徴的である。そして最後に登場することからも、オレンジには何か特別な意味があると考えられ

る。ここで注目したいのは、太陽とオレンジが似た色と形を持っているという事実である。オレンジは太陽への捧げ物であると同時に、太陽の恵みの象徴でもあるのではないか。

日常の風景を、太陽を擬人化しながら温かく描いたこの詩で、オレンジは平和な世界の象徴の一つである。一方、その平和な世界が存在するのは、太陽のおかげである。太陽が無ければ作物は育たず、十分な食べ物を得ることはできない。また、住民が調和して暮らせる世界を形作るのにも、太陽が必要である。毎朝太陽が昇ってくることによって人々は光を得て、生活を始め、仕事に取りかかることができる。

太陽のもたらす平和な世界が、一つの果実として結実し、捧げられる。太陽に太陽の恵みをお返しする、という構図は多分に生贄的なニュアンスを含む。ただし、詩の語り手から感じられるのは、あくまでも瑞々しい感謝である。ここに、語り手の「神」に対する態度を読み取ることができる。朝食のような、日常のささやかな行いをきちんと積み重ねていくことが、大いなるものへの一番の感謝の表し方なのである。

Rydstedt は、自分が牧師になれないというフラストレーションを抱えて詩作を始めた。そのため、彼女の詩には「自分の思いを表現する手段」としての側面が強く感じられる。この詩が、具体的な一つの風景を描いたものでありながら、普遍的にも感じられるのは、根底に大きなテーマを持ち、そしてそれに対する彼女の意見を含んでいるからではないだろうか。

3. インターネット資料

Anna Rydstedt-sällskapet. <https://annarydstedt.se/>. (2019.2.13 確認)

Litteraturbanken. *Anna Rydstedt*, <https://litteraturbanken.se/forfattare/RydstedtA>.
(2019.2.13 確認)

Carl Jonas Love Almqvist の詩

日野美南子

Var finns en sjö...

Var finns en sjö, där man i frid och lugn kan drunkna,
och det med nöje, utan obehaglig lukt?
Där inga lik förut på botten finnas sjunkna
och som med otäckheter fylla denna bukt —
ej heller någon självdöd fisk, och inga unkna
kanaljekräftor, döda utan sans och tukt —
Finns väl en sådan sjö, så vill jag utan buller, bråk
och vimmel
gå dit rätt snart, och i dess vackra vatten finna ljuvt min
himmel.

湖はどこに...

湖はどこにあるのだろう。自由と平穏の中で溺れ死ぬことのできる湖は、
喜びとともに、不快な臭いなく。
かつて底に沈んでいた死体
その入り江を不愉快で満たす死体のない湖は—
絶滅した魚もおらず、かび臭くなく、
落ち着きや秩序なく死んだ凶暴なザリガニもいない湖は—
もしそんな湖があるのなら、私は雑音や騒音や
群衆から逃れ
今すぐそこへ行きたい。その美しい水の中で心地よく私の天国を見つけない。

(出典： *Dikter i landsflykt*, 1956)

(日野美南子訳)

1. 作者紹介：Carl Jonas Love Almqvist (1793－1866)

1793 年生まれ作家、詩人、リアリスト。スウェーデンのストックホルムで育つ。1822 年 *Amolina*『アモリーナ』でデビューしてからは革新的なロマン主義運動で注目されるが、1834 年の *Drottningens juvelsmycke*『女王の宝石飾り』ののちは、一転して、ルソーの「自然に帰れ」という思想に影響を受け、リアリズム、社会批判関連の作品を著すようになった。1839 年に著された、女性解放を先駆けて取り扱ったフェミニズムの短編小説である *Det går an*『それでよい』では、「結婚とは個人の問題であるため、教会や国家が介入する必要はない」という主張が当時の人々の響きを買った。職を転々とする生活を送り、1839 年以降は記者として働いた。1851 年に証書の変造や金利的問題で老人大尉をヒ素で毒殺しようとした容疑にかけられ、アメリカへ亡命し各地を放浪するが、1866 年、ドイツで死去する。彼の作風の変貌の激しさは、彼のふり幅の大きい性格を表している。亡命後を含め、Almqvist の生涯はスウェーデン文学史上もっとも謎に満ちたものとされている。

2. 詩の解釈

本稿で扱う詩“Var finns en sjö...”は 1956 年に出版された *Dikter i landsflykt*『詩集～亡命にて～』という詩集に収録されている。出版社は Bokgillet 社、編集者は Erik Julius Gamby、詩自体の作成年は不明。

本稿ではこの詩について、まず詩の内容に関する考察を行い、そこから Almqvist の人生とこの詩の関係を推測する。続いて楽曲化された“Var finns en sjö...”とその歌手 Blå Tåget (ブロー・トーゲット、意味は「青い電車」)に注目し、なぜこの詩が選ばれ楽曲化されたのか、また、Blå Tåget の他の曲から見る彼らの思想や社会背景についてまとめている。

まず、この詩が収録されている *Dikter i landsflykt* は、邦訳すると『詩集～亡命にて～』となることや、「死」という単語、自分の置かれている環境から逃げ出し天国に行きたいという表現が用いられていることから、“Var finns en sjö...”は Almqvist の亡命後(1851 年～)に書かれたものと推測することができる。

また、「湖はどこにあるのだろう。自由と平穏の中で溺れ死ぬことのできる湖は」、「私は雑音や騒音や群衆から逃れ今すぐそこへ行きたい。その美しい水の中で心地よく私の天国を見つけない」という表現からは、死への願望、世俗から離れ一刻も早く穏やかに死にたいという考えが見て取れる。これが亡命後の詩とすると、彼は亡命後も職を転々とし、生活が安定しなかったこと、殺人容疑にかけられ人々から響きを買ったことが心の傷となり、このような表現をするに至ったと考えられる。

加えて、“lik”(死体)という単語や“kanaljekräftor, döda utan sans och tukt”「落ち着きや秩序なく死んだ凶暴なザリガニ」という表現は、彼が置かれていた環境や周囲の人々が彼にとってあまりにも不快であった(=彼にとって理想的ではない湖)ことを示していると考えられる。また、彼が逃れたい“buller, bråk och vimmel”「雑音や騒音や群衆」は彼を取り囲む人々や思い悩ませる状況を指し、その後の“himmel”(天国)と韻を踏んでいる。

この詩は 1972 年にスウェーデンの音楽グループ Blå Tåget によって曲をつけられ、アルバム *Brustna Hjärtans Hotell*『失恋ホテル』に収められた。Blå Tåget はスウェーデンのバンドで、1962 年の結成当時当初は、GunderHägg（グンダー・ヘーグ）の名前で活動していたが、バンド名について騒動があったのちは Blå Tåget に改名して活動している。“Var finns en sjö...”以外の楽曲の歌詞は、ほとんどメンバーが作詞したものである。

彼らの創作する楽曲は、マルクス主義的な分析や芸術批評、1940 年代の子供時代のノスタルジア、日常生活に現れるイメージ、実験的なポップアート作品まで幅広くカバーしている。また、初期の作品では Saltsjöbandsandan（政府、大企業と労働組合との連携ではなく、紛争を通じて社会主義と資本主義を混合しようとするスウェーデンのモデル）への批判も楽曲内で描いている。そういった社会批判的な視点で楽曲を創作してきた Blå Tåget にとって、“Var finns en sjö...”の人生に対する諦めや周囲の環境に辟易しているような表現が、彼らの音楽のイメージと合致したのではないだろうか。楽曲化された“Var finns en sjö...”は死体や不愉快、といった単語のイメージとはかけ離れた穏やかな曲調であり、彼が置かれている状況への絶望というよりは、「心地よい天国へ行きたい」という願望を強く表現していると思われる。

Blå Tåget の代表作は“Den ena handen vet vad den andra gör”「片手はもう片方が何をしているか知っている」であり、のちにバンド EbbaGrön によって曲名を“Staten och kapitalet”「州と資本」に変更されてカバーされ、1980 年にヒットした。この曲が収録されているアルバムは、“Var finns en sjö...”と同じ *Brustna Hjärtans Hotell*である。“Den ena handen vet vad den andra gör”は、Blå Tåget の Saltsjöbandsandan への批判を色濃く表現した楽曲である。以下、メインパートの和訳を載せておく。

Sida vid sida, tillsammans hjälps de åt	横並びで、彼らは一緒に助け合う
Staten och kapitalet	州と資本
De sitter i samma båt	彼らは同じボートにいる
Fast det är inte de som ror	舵を取るのとは彼らではないが
Som ror så att svetten lackar	舵を取って汗にまみれるの
Och piskan som kittlar	そして、釜のような鞭ではなく
Kittlar inte heller deras feta nackar	釜ではなく、彼らの太った首でもない

この楽曲は、当時のスウェーデンの Saltsjöbandsandan の、国を運営する（ror＝舵を取る）のは社会主義、資本主義の権力者ではなく彼らは上に居座っているだけだというような状況を批判していると考えられる。

以上のことから、“Var finns en sjö...”は Almqvist が亡命したあとに書かれた詩であり、現在の状況から離れ心地よい天国へ逃げ出したいという心情が表れている詩であると考えることができる。またこの詩に曲をつけた Blå Tåget は、音楽を通して盛んにスウェーデン社

会批判を行っているグループであり、彼らがこの詩を題材に選んだのは、社会から疎外された者の「天国への希求」が共感されたからだと言える。このことはつまり、「Var finns en sjö…」はある種の社会批判として読み解くこともできることを示しているのではないだろうか。

3. インターネット資料

Wikipedia. *Carl Jonas Love Almqvist*.

https://sv.wikipedia.org/wiki/Carl_Jonas_Love_Almqvist (2019.2.20 確認)

Wikipedia. *Saltsjöbadsavtalet*. <https://sv.wikipedia.org/wiki/Saltsjöbadsavtalet>.

(2019.2.20 確認)

Nt.se. *Saltsjöbadsandan gjorde Sverige unikt*.

<http://www.nt.se/asikter/ledare/saltsjobadsandan-gjorde-sverige-unikt-9172392.aspx>

(2019.2.20 確認)

Wikipedia. *Blå Tåget (musikgrupp)*.

[https://sv.wikipedia.org/wiki/Blå_Tåget_\(musikgrupp\)](https://sv.wikipedia.org/wiki/Blå_Tåget_(musikgrupp)). (2019.2.20 確認)

GENIUS. *Den ena handen vet vad den andra gör*.

<https://genius.com/Bla-taget-den-ena-handen-vet-vad-den-andra-gor-lyrics>

(2019.2.20 確認)

Wikipedia. *Brustna hjärtans hotell*. https://sv.wikipedia.org/wiki/Brustna_hjärtans_hotell

(2019.2.20 確認)

Wikipedia. *Den ena handen vet vad den andra gör*.

https://sv.wikipedia.org/wiki/Den_ena_handen_vet_vad_den_andra_gör

(2019.2.20 確認)

Ernst Josephson の詩

山口祐奈

Violoncell

ヴィオロンチェロ

Jag från hjärtas hjärta hör
en klagoton, som darrar klar;
han cellosträngs vemod har,
och smältande han sakta dör. -

こころの奥から聞こえてくる
悲しい音色、それが震える
彼には弦の憂鬱があり
そして彼はゆっくり死へと消えていく――

Men skruven sköter sorgen om;
allt hårdare hon strängen spänt
för varje gång hon honom vänt
alltmera klangfullt ljudet kom.

しかし螺子は悲しみを支える
彼女は弦をより強く張る
彼女が彼を巻くたびに
ますます明るい音が聞こえてくる

Det taget gjorde ondt likväl!
Men skönare blev tonens klang -
ack, herre gud, om strängen sprang -
då höjde sig min fria själ!

それでもその音は傷つけた！
しかし音の調べはいっそう美しくなっていく――
ああ、神よ、その弦がはじけてしまえば――
私の自由な魂は舞い上がっていく！

(出典： *Gula rosor*, 1896)

(山口祐奈訳)

1. 作者紹介：Ernst Josephson (1851-1906)

Ernst Abraham Josephson は 1851 年にストックホルムで生まれる。1906 年没。詩人としてだけでなく、画家としても知られる人物である。ストックホルムの王立美術学校で教育を受ける。1872 年、ノルウェーでの旅行中に、ネッケン (Näcken) という妖精に出会い、これは彼の作品で何度も出てくるモチーフとなる。彼は長年、フィレンツェやローマ、ベルリンなどのヨーロッパの大きな芸術都市を移り住んでいた。経済的に恵まれなかったことから詩を書くようになり、1888 年には詩集 *Svarta rosor*『黒薔薇』を出版した。当時すでに彼は強い自尊心と早期の精神病に苦しんでいたが、ウプサラの病院に何度か入院し、治療を通して絵を再開。後に大きな成功を収めることができた。絵においては、彼はとりわけ人間の形にこだわりがあったので、印象派や表現主義者に近いとされている。詩についてはそれとは異なり、素朴でシンプルであることが特徴である。

Josephson の詩は Bellman (1777-1795) と Almqvist (1793-1866) から影響を受けたシンプルさが特徴で、人間関係を描いた詩が多く、強いユーモアが見られる。彼の自然への愛は絵画よりも詩で、明瞭な表現を用いて表されている。風景に関して、彼はかなり情緒的に捉えており、人の生活の象徴として海を考えることもあった。もう 1 つの詩集である *Gula rosor*『黄薔薇』は 1896 年に出版された。

Josephson の絵画に強く影響を与えたネッケンとは、水の妖精の一種である。彼らはヴァイオリンの名手であり、ヴァイオリンを弾いて子どもや女性を誘惑し、溺れさせようとする。しかし、女性や子どもだけでなく男性をも誘惑したり、聴衆には全くの無害であったりという話も残っている。彼はこの妖精がヴァイオリンを弾く姿を好んで描いた。

2. 作品の考察

2.1. 作品について

本作品“Violoncell”「ヴィオロンチェロ」は Josephson によって 1896 年に出版された詩集 *Gula rosor* に収録されており、この詩集は彼の生前に出版されたものの中では最後の詩集となった。この詩は 3 連で構成されており、比較的短い詩であるといえる。この詩には私、彼そして彼女が登場し、この 3 人とヴィオロンチェロの音の関係が、この詩の主題となっている。この作者の詩は韻を踏む部分が多いことが特徴的であり、この詩においても多くの箇所では韻が踏まれており、統一感のある詩になっている。本稿ではこの詩がいったい何を描いているのかについて考察する。

2.2. 分析

先述の通り、本作品には私と彼、そして彼女が登場する。特に彼や彼女、私に対しても深い描写はなく、第 1 連から第 3 連を通してヴィオロンチェロの音色や、弦やその弦をまく螺子といった楽器の部品と共に描かれるのみである。

まず初めに、彼と彼女がヴィオロンチェロの何かを暗喩しているのではないかと考えた。

この詩で明確に登場するヴィオロンチェロの部位は弦と螺子だけである。よって彼女と彼はヴィオロンチェロの弦もしくは螺子であると考えられる。ヴィオロンチェロには弦は 4 本、それに対応する螺子もまた 4 つであるので、彼と彼女どちらも弦である、または螺子であるといった可能性も考えられる。

本作品に登場する彼女は彼を巻く、弦を張りつめさせる存在である。また、別人のように彼と彼女が描かれていることから、彼とは対となる存在であることが見て取れる。一方、彼が何ものであるかを断定することはひどく難しい。弦であるか螺子であるかはひどく曖昧であり、短い詩であるがゆえに、詩の中における彼女と彼の関係性もあまりはっきりとしない。またこころの底から聞こえてくる音に耳を傾ける私と彼女、彼の関係も謎に包まれており、読者の想像をかきたてる材料になっている。

この詩のところどころにちりばめられた憂鬱や死、傷などといった言葉はこの作者の生涯にひどく影響を受けているように思われる。作者は精神病から、何度も入院を繰り返しており、病気とは切っても切り離せない人生だったという。最後の行にある、「私の魂が舞い上がっていく」という表現も、精神病で苦しむ彼の人生が感じられるような表現であると思われる。

この作品は第 1 連から第 2 連の前半 1 行にかけて、悲しみや憂鬱といった暗い印象を与える言葉が続き、第 2 連 2 行目で彼女が弦をより強く張ることを境にその音は美しく、明るくなっていきクライマックスを迎え、最後には私の心が舞い上がるという描写で終わる。短い 3 連の詩でひどく劇的な変化を見せるという印象を与えるが、これはヴァイオリンとはまた違う、ヴィオロンチェロという楽器だからこその表現ではないか。ヴィオロンチェロはヴァイオリンと比べて低い音を出す楽器であり、ゆったりとした音を出すことができる。一般的に、曲の中でもヴァイオリンやヴィオラをその低音で支えている場面が多いように思われる。しかし、この楽器は激しく情熱的に演奏されることも珍しくない。こういったヴィオロンチェロという楽器の持つ二面性と本作品の感情の劇的な変化はうまく対応しているように思われる。また、弦をきつく巻き、張りつめさせすぎると弦がはじけるように切れてしまうことがある。第 2 連で彼女が張っていた弦が弾けてしまう様子が浮かぶようである。以上から、本作品はヴィオロンチェロの特性を活かした詩であることが分かる。

3. インターネット資料

Litteraturbanken. *Ernst Josephson*. <https://litteraturbanken.se/forfattare/JosephsonE>.

(2019.2.13 確認)

Riksarkivet. *Ernst A Josephson*. <https://sok.riksarkivet.se/SBL/Presentation.aspx?id=12215>.

(2019.2.13 確認)

Ann Jäderlund の詩

渡部和泉

På en åker...

På en åker föll höstsolen ner i klara döda färger.
 Och jorden föll också ner till maskarna. Man förde
 ut en svan på åkern och plöjde ner henne i den
 svarta jorden. En svartstrupad honungsfågel. Ett
 strålhjärta med paradismun. Av svält drog hon allt
 djupare andetag. Man plöjde ner fjädrarna i
 åkern. Och sådde svanen med hennes egna fula
 vita frön. Hon luktade som de döda. Men hon kom
 upp som de efterlängtrade. En strupvila med runda
 sköna ögon. Över den strålande jordkragen. Den
 bildade en blomma.

畑で...

畑で秋の陽の光が明らかな死の色の上に降り注いだ。
 そして土もミミズの上に降り注いだ。人が
 一羽の白鳥を畑に持ち出して彼女をその
 黒い土の中にすき込んだ。黒いのどのミツスイ。
 きらきら光る心臓と楽園を歌う嘴。飢えのために彼女はいっそう
 深く息を吸った。人はその羽をすき込んだ。
 そして白鳥は自身の乱れた
 真っ白な種を畑中にまいた。彼女は死人のような匂いがした。しかし彼女は
 期待され芽生えた。丸い輝く瞳で
 のどを休めること。きらきら光る畝の上で。
 それは一輪の花を形づくった。

(出典： *Dagens dikt 75 år EN META-ANTLOGI REDIGERAD AV Göran Sommardal, 2012*)

(渡部和泉訳)

1. 作者紹介：Ann Jäderlund

1955 年生まれの作家，詩人，脚本家．ストックホルムで生まれ育つ．1985 年に *Vimpelstaden*『ペナントの町』という詩集でデビューした．”På en åker...”は 1990 年に出版された *Snart går jag i sommaren ut*『まもなく夏へ』という詩集に収録されている．2004 年に Dobloug 賞（スウェーデン人作家とノルウェー人作家の作品に贈られる賞）を受賞している．

象徴的・哲学的な描写が彼女の作品の特徴である．詩人としてデビューする以前は，働きながら大学で哲学を学んでいた．聖書やヴェーダなどの教典や芸術からインスピレーションを得ることもある．

2. 詩の分析と解釈

Jäderlund の作品は象徴的な描写が特徴であり，これは今回取り上げた詩”På en åker...”にもよく表れている．たとえば，詩の 1 行目の ”klara döda färger”「明らかな死の色」や 4 行目の ”En svartstrupad honungsfågel”「黒いのどのミツスイ」などである．「死の色」というのは，もちろん実際にはそのような色は存在しない．この表現は，死というものが色として見えるほどに近づいている，つまり瀕死の状態であるということを意味している．また「黒いのどのミツスイ」については，その後同じ表現は登場しておらず，唐突に感じられる．この表現は 3 行目の ”en svan”「一羽の白鳥」の「白」という色との象徴的な対比，または 4 行目の ”svarta jorden”「黒い土」の「黒」と合わせた表現ではないかと考えられる．あるいは，4 行目の ”Ett strålhjärta med paradismun”「きらきら光る心臓と楽園を歌う嘴」に白鳥とミツスイとの共通点を見出し，詩に織り込んだのではないだろうか．

このような表現は，彼女が大学で学んでいた哲学や，聖書やヴェーダのような教典から影響を受けたものと考えられる．3 行目の ”Man förde ut en svan på åkern”「人は一羽の白鳥を畑に持ち出し」という表現は，スウェーデン語の聖書の一節（5 Mosebok 28:38）の ”Mycken säd skall du föra ut på åkern”「多くの種はあなたを畑に連れ出し」という表現に酷似している．

また，詩を繰り返し読んでいくうちに，この詩は「死人のような匂いがする」白鳥ではなく，10 行目の ”Den bildade en blomma.”「それは一輪の花を形づくった」という文を主題として作られたのではないかと考えるようになった．この詩はすべて過去形で書かれているが，文章を追っていくと最後の文がもっとも時系列的には新しいものであり，「一輪の花」という「結果」のために「白鳥の死」があり，「土をかぶせられるミミズ」たちが描かれ，存在しているのではないだろうか．作者がヴェーダから着想を得ている，あるいは少なくとも影響を受けているとすると，「白鳥の死」によって生を得た「一輪の花」は，輪廻転生や来世といったものを暗示しているようにも考えられる．

本稿で扱った詩は，ただ読むだけでは内容を理解するのがかなり難しかったが，作者が影響を受けた事柄などの背景を知ることによって，いくらかは読み解くことができた．作品を深く読

み解く上で、作者についての背景や作品にまつわる知識を得ることは、読解の足がかりを得るために重要であると言える。

3. インターネット資料

Poetry International Web. *Ann Jäderlund*.

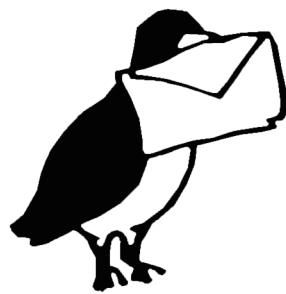
<https://www.poetryinternationalweb.net/pi/site/poet/item/24136/9263/Ann-Jaderlund> (2019.2.13 確認)

BibelSite. *5 Mosebok 28:38*. <http://sv.bibelsite.com/deuteronomy/28-38.htm>.

(2019.2.13 確認)

第二部

卒業生寄稿



文学ゼミの思い出

原田(井形) 真理子(1990 年入学 DM)

デンマーク、ヨーロッパの隅っこにある小国でありながら、文化、福祉、教育等、その独自性を失わずに存在している国。また、パンフレットで見る風景はアンデルセンの童話から抜け出してきたかのように美しくかわいらしい。

ーそんな国の言語を学べるのだ。

今から 20 数年前、私は、まるで秘密基地を発見した子供のようにわくわくした感情を抱いてデンマーク・スウェーデン語学科に入学した。

当時まだ、インターネットも SNS もなく、大学で、先生や先輩から聞く情報が全てであり、まだ見ぬデンマークへの憧れは妄想で勝手に膨らんだ。

検索エンジンも、ましてや電子辞書も無かった時代なので予習は大変であった。頼りになるのは赤い辞書、デンマーク・英語辞典。適切な英語を見つけ出し、その後、英和辞典を引いて日本語訳にやっとたどり着く。これを卒業するまで、ただひたすら繰り返す。

田辺先生のゼミは文学のゼミであった。只日本語へ訳すればそれで終了ではなく、その言葉の背景、情景も読みとらなければならない。私が予習でたどり着いた「自分なりのとんちんかんな解釈」と、本番のゼミで先生や仲間が示したそれが、あまりにかけ離れていて、恥ずかしさのあまり授業中に消えたい！と思ったことが何度もあった。

そんな語学に関してあまり優秀でない生徒であったが、先生のゼミはとても面白かった。浅はかな私は、文学とは、才能があって、浮世離れしたふわふわした人達がただ何かしら言葉を紡ぎ出すものとばかり思っていた。だが、先生はゼミを通じて、世界の文学や絵画、工芸等、文化はそれぞれ繋がっていて、何かを作り出すこと(人)は、それぞれが影響を及ぼしあっているのだ。ということを示して下さったように思う。また、一つの時代に焦点をあてることにより、(20 世紀初頭が多かったように記憶している。違っていたら申し訳ありません。)デンマークという一小国の文学においても、世界の時代背景や、文化・芸術の潮流に強い影響を受けていることを学ぶことができた。また、先生が紹介する詩や文学の分析は、難解ではあったが、ロマンがあった。分からないなりにではあったが、表現者のエネルギーを感じ取ることができた。

ゼミの後は、自然発生的に食事会をすることが多くなった。皆が持ち寄ったおかずで夕食を頂く。恐れ多くも先生の研究室でご飯を炊いたこともあった。一人暮らしや遠距離通学者が多かったゼミ生達の楽しい思い出である。また、課外授業的に映画を見に行ったり、電車を乗り継いで、滋賀県の美術館へ出かけたりもした。本当に恵まれた環境を与えて頂いた。

留学も含めると五年間の学生生活であった。残念ながら語学の才能が花開くことはなかった。(のかも知れない。)けれど、めまぐるしく変わってゆく世の中であって、一つのことをじっくり掘り下げて学ばせて頂いた経験は、現在でも役に立っているし、異なる言語を学んだことで、客観的な視点も持てるようになったと信じている。

最後になりましたが、こういった文章を書く機会を与えてくださった先生には感謝の気

持ちで一杯です。これからもデンマーク文学のゼミがさらに発展し、続いてゆきますようにと心より願っています。有難うございました。

三宅(伊藤) 水季(1990 年入学 DM)

外大でデンマーク語を専攻していた、と言うと、たいがい驚かれる。

まあ、そうだと思う。今でこそ、デンマーク、スウェーデンほか北欧はメジャーで、女性の憧れの国々になっているけれど、私たちが高校、大学の時代はまだ、せいぜい、高福祉国家として知られ始めたくらいだった。4 回生の時がちょうどバブルの終わりの頃で、就職活動が前年度に比べ急に厳しくなった年だった。

私はもともと北欧の美術、工芸、特にクラフトマンシップに興味があった。George Jensen の銀細工、ガラス製品、名作と言われる椅子や照明器具……

デンマーク語学科が縁で、デンマークのシルバーアクセサリーの店で、アルバイトもした。デンマークの作家たちの個性的なデザインは、ほかにはないもので、その時社員の割引で購入したリングやイヤリングは、今でも現役だ。

卒論のテーマを、北欧のデザイン、又はクラフトマンシップにしたいと先生に相談したのだが、指導教官が決まらなかった。見かねた欧先生が、1920 年代からデンマークで活躍した Poul Hennigsen という文章も画も描くマルチな工業デザイナーがいるので、その軌跡を考察するというのはどう？と提案して下さって、「確かに PH ランプって聞いたことある！」と迷わず飛び付いた。まったく欧先生のおかげで、希望していたテーマで、卒論を仕上げる事ができたのだ。欧先生だからこそのご提案だったなあと、改めて感謝している。結果、考察するのも楽しく、充実した四年生生活だった。

欧先生との思い出は、ゼミに限らない。何回かお宅にお邪魔させていただいて、遅くまでいろんな話をしたり、先生お気にいりのお店でお食事会をしたり、またお手製のお料理をみんなでいただいたり……デンマークのいろいろな事情を教えてくれる先生であり、失礼な言い方を許していただけるなら、ちょっと背伸びした体験をさせてくれる、お姉さんみたいな存在でもあった。

卒業後は、一見北欧とは関係ない生活を送っているようにも見えるが……食事の時の食器やカトラリー、椅子たちにはじまり、ファブリック、子どもたちが小さかった頃買ったおもちゃなど、家の中は北欧の物でいっぱいだ。パートナーが語科の先輩ということもあり、今後も我が家の北欧に対するアンテナの感度は衰えないだろう。

大学生の息子がこの頃、デンマークで教育を勉強したいから、デンマークに一年間留学したいと言い出した。ほら、こうして、続いて行くのだ。

和田 方子(1990 年入学 DM)

卒業してから四半世紀以上が過ぎてしまいました。念願のデンマーク語科に入学して、留学も一年させてもらったくせに、結局卒業後はデンマークとはまったく縁のない仕事をしていることもあり、ゼミ論集への寄稿には場違いな内容になるのではないかと心配しています。が、お声をかけていただいたことがありがたく、今になって思うことを少し書かせていただきます。

デンマーク文学にほんの少しの間でしたが触れさせていただいて、その豊かな世界を垣間見られたのは、とにかくにも欧先生のおかげです。当時大阪外大のデンマーク語科に、欧先生がいらっしゃらなければ、デンマークの近現代文学史の主だった作家の作品を読むことはできなかったと思います。インターネットも普及しておらず、メールアドレスを持っている学生は何割いたでしょうか。4年生で留学する前は、個人的に年に一度くらいデンマークの本屋さんから書籍を数冊取り寄せてみることにしていましたが、内容もよくわからない小説を紙のカタログの書名と表紙写真だけを頼りにイチかバチかで注文していたような時代です。そんなところに作家名を見て、だいたいいつのころのどういう作風の人なのかなんとかわかる作家が増えていったのですから、まさにデンマーク文学への扉を開いてくださったわけです。

デンマーク文学は、いわゆる辺境の文学のひとつでしょう。ヨーロッパ文学という大きなくくりの中にうずもれてしまうような小さな世界。デンマーク語を習わなければアンデルセンやブリクセンぐらいしか知らずに終わったであろうところを、もう一步踏み入って見えるもの。それは、ありきたりではありますが、世界のどこであろうと人間はみんな同じなんだという物懐かしさと、みんな同じなんだけれどもそこから抑えきれずに溢れてくる独特のユーモアや頑固さを含むデンマークらしさ、デンマーク人らしさです。どんな遠い国の情報でも簡単に手に入る現在ですが、だからこそ直接触れた、直接知ったという感覚は貴重なのかもしれません。会ったこともない作家たちの中の何人かは未だに、知り合いのデンマーク人と同じくらいの親しさをもって頭の中に現れたりします。

ずっとデンマーク語から離れていても、「子供にもう少し手がかからなくなったら」「仕事に余裕ができたなら」辞書を引き引きでもまた手に取ってみようと、何度か繰り返した引っ越しの間もずっと一緒についてきたデンマーク文学の本たち。いまだに叶っていないので、本棚の一角を占めている彼らに申し訳ない気持ちでいましたが、この原稿のお話をいただいて、いつかはきっと読み返したいという思いを強くしました。ありがとうございました。

欧先生をはじめとして、現・旧ゼミ生のみなさんのご活躍をお祈りいたします。

中村 友紀(1991 年入学 DM)

この度は、ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。そしてその記念すべき号にこのような書く機会を与えて頂き、ありがとうございます。

私が欧先生のゼミで勉強していたのは、もうかれこれ 25 年程前。現在はデンマーク人の夫、二人の娘とコペンハーゲン近郊に住んでおります。デンマーク在住とはいえ、今では文学とはかけ離れた生活を送っていて、忙しい毎日の中、日本語はおろかデンマーク語の本を読んだりすることは全くと言っていいほどありません。

それでもこの寄稿の話を受けた時、締め切りまでそんなに時間もないし、今さら詩を読んで分析などできないとは思いつつ、図書館司書の夫に、「最近のデンマークの詩人で有名な人って誰？」と聞いてみました。

何人か名前が挙がった中で気になったのが、自分と同世代の Ursula Andkjær Olsen でした。図書館でパラパラと彼女の詩集をいくつかめくって見て、本の構成が変わっていて視覚的に面白そうだなと思い、"Det 3. årtusindes hjerte" (2012, Gyldendal) という詩集を借りてみました。

先にも書いた通り、時間の余裕もないので、深く突っ込んだことを言うつもりは毛頭ありませんが、とにかく彼女の詩が独特の世界を醸し出しているのはわかりました。彼女が朗読する姿は YouTube でもアップされていますが、彼女自身にも独特の雰囲気があって、とても興味をそそられました。

そして彼女の詩を朗読する姿を見て、大学当時文学ゼミで読んだ詩のことを思い出しました。当時ゼミでは Inger Christensen の "Sommerfugledalen" (1991, Gyldendal) を読んでいました。難しくて、これはどういう意味なんだろうとよく話し合っていたような記憶があります。Inger 自身が朗読しているテープを聴いて、意味はよくわからないけど、別の世界に引き込まれていくような気になったのを覚えています。今は亡き彼女の朗読する姿も YouTube で見ることができます。

すごいですね。昔はカセットテープだったのに。

この詩集の批評をいくつか見ましたが、賞賛の声ばかりです。何度か再版されていることから、時代が変わっても評価が高く、人気のある詩集なのだと察します。そんな詩集を学生時代に鑑賞できたことは嬉しいことだし、駆け出しだったとはいえ、欧先生のゼミが楽しいだけでなく、質の高いものであったことを改めて感じました。

これからも先生の益々のご活躍、また、ゼミ論集が末永く続き、発展していくことをお祈りしております。

赤坂(亀岡) 直子(1993 年入学 DM)

この度は、ゼミ論集発行が 20 周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。書いた本人でさえ覚束ない記憶しかない卒論をご指導されるのは、いつもとは違うご苦労があったのではないのでしょうか。お手数をおかけしました。

ゼミの思い出として印象に残っているのは、最後に、御宅へお招きいただきご馳走になったことです。お料理が美味しかったのはもちろん、テーブルセッティングが素敵で！かなり影響を受け、その後しばらくは折に触れ、自宅でも再現を試みていました。文学ゼミ本来の思い出ではなくて恐縮です。

ただ、いずれにいたしましても、田辺先生のおかげで、大学での楽しい思い出が増えたことは事実です。本当にありがとうございました。

最後になりますが、田辺先生の今後さらなるご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

大羽(吉田) 晶子(1993 年入学 DM)

93 年度入学の吉田(旧姓 大羽)です。卒論では、Sven Åge Madsen の戯曲をテーマとしました。自分にとっては全く未知の戯曲に、悪戦苦闘しながらも、なんとか書き上げることができ、ひとつ自分の大きな糧となった体験でした。現在はデンマーク語と全く関わりのない生活を送っていますが、折に触れて、卒論で取り上げた作品について、また田辺先生と過ごしたゼミでの楽しかった時間を思い出しています。先生、またお会いできたら嬉しいです。

うつわの話ー民藝運動と北欧デザイン

落合(長谷川) 千佳(1993 年入学 DM)

ご縁があり、毎年夏に島根県を訪問しています。島根県は土壌が作陶に適しているため窯元が多い。器が好きなので毎回窯元巡りを楽しんでいます。私はその地で民窯というものを初めて意識しました。民窯、すなわち民藝品の器を焼く窯元です。

ご存知の方も多いでしょうが、柳宗悦が提唱した民藝運動、その初期メンバー五名のうちの四名は陶芸家でした。彼らは全国を巡り「民藝品」を見出すと同時に、各地の窯元で指導をしています。また、初期メンバー五名のうちの一人はバーナード・リーチというイギリス人でした。彼は洋食器の製法・技法を滞在した窯元に伝授しています。結果、民藝運動の影響を色濃く保った窯元の器は、和でありながら洋風なものが多い。和食にも洋食にも馴染む普段使いの器です。

和食にも洋食にも馴染む普段使いの器.....北欧ブランドの食器の説明でよく目にする表現ですね。そもそも「民藝品」とは何かを調べていくと、北欧デザインとの共通項の多さ

に驚きます。

柳は「民藝品」の条件として

- ・実用性...鑑賞のためではなく実用性を備えていること
- ・無銘性...無名の職人によって作られたものであること、名を上げるための仕事でないこと
- ・複数性...民衆の需要に応じるため、数多く作られたものであること
- ・廉価性...民衆が日用品として購入できる、安価なものであること
- ・地方性...色、かたち、模様などに土地の暮らしに根ざした地域性があること
- ・分業性...量産を可能にするため熟練工による共同作業でつくられていること
- ・伝統性...先人が培ってきた技術や知識の蓄積にのっとっていること
- ・他力性...個人の力よりも、気候風土や伝統などの他力に支えられていること

の8項目をあげています。

これらの条件を満たし、且つそこに「用の美(日用品として耐久性と使い心地の良さを持った品が持つ健康的な美しさ、つまり物単独ではなく使い手との関係性への意識があって初めて生まれる美)」を備えた品が「民藝品」だということです。

北欧デザインの特徴として挙げられる、シンプルさ・暖かみを感じる素朴な手仕事感・使い勝手の良さと耐久性の高さ・自然や伝統との融合.....これらはまさに柳の言う民藝品の条件にあてはまるのではないのでしょうか。

また、北欧デザインでよく使われる「機能美」という表現。一見十分な表現にも感じますが、北欧デザインの魅力を表すには少し足りない。合理主義・機能主義なモダンの美に hygge が加味されたもの、それが北欧デザインの魅力だと思うのです。そう考えると柳のいう「用の美」という表現の方が相応しい気がします。

北欧デザインは他の西洋モダンデザイン同様、アーツ&クラフツ運動ー粗悪なマスプロダクツへの批判から始まった芸術と生活の一体化を目指す運動ーの系譜に連なるものです。

民藝運動もまた、マスプロダクツ批判という同じ出発点から始まりました。しかし、前者が芸術(美)を日用品に持ち込み且つ新たな美を作り出すという方向性であるのに対し、民藝運動は既にある日用品の中から美を拾い上げるという、全く異なる視線を持つ運動でした。前者の影響の果てに生まれた北欧デザインが後者の美意識に適う。とても興味深い。

.....そして、個人的に、とても感慨深い。

学生の頃、北欧の物を見つけるだけでドキドキしました。今のように北欧雑貨のセレクトショップなんぞというものが此処彼処にはなかった時代です。当時阪神百貨店にあった北欧製品専門店の品々を、指を咥えて眺めていました。20代半ば以降、北欧からは遠ざかりました。アールヌーヴォーだウィーン分離派だ、モダンならダッチデザイン、実家の蔵から引っ張りだした祖母曾祖母の洋食器を愛用し、いつの間にかやってきていた北欧ブームを横目で眺めていました。

そして、不惑が見え始めた頃に島根県で出会った民窯。窯元巡りをする中で知った民藝運動の美意識が、かつての自分が心躍らせた北欧に通じているというこそばゆさ。

卒業して二十数年、故郷に戻ってきた鮭の気分です。

参考文献

- 萩原 健太郎(2012)『民藝の教科書 1 うつわ』久野恵一監修 グラフィック社
日本民藝館 監修(2018)『NHK 趣味どきっ!私の好きな民藝』
藤田 治彦(2009)『もっと知りたいウィリアムモリスとアーツ&クラフツ』東京美術
小野 二郎(1992)『ウィリアム・モリス—ラディカル・デザインの思想』中央公論社

私と文学ゼミの思い出

小坂井(田中) 由香(1993 年入学 DM)

先日この春中学生になる息子が、長いこと家の片隅に眠っていたワープロを見つけて引っ張り出してきました。私が大学生になった時に生協で購入したデンマーク語が打てるワープロでした。箱の中には卒論の収録されたフロッピーディスクもありました。フロッピーディスクという今となっては見かけるどころか存在すら忘れ去られている記憶媒体に慄きつつ、ワープロに電源を入れてみましたが、全くもって動きませんでした。あんなに夜な夜な一人暮らしの部屋の中で悩んだり迷ったりしながら書き上げた卒論を(研究室に行けば今でもあることは知っていますが)もう見ることはできないのだと思うと、一抹の寂しさと過ぎ去った時の長さに感慨深くなりました。

そもそも私がデンマーク語科を目指したキッカケは児童文学、とりわけアンデルセンを研究したいというものでした。ですからゼミを選ぶ時に迷いはありませんでした。念願叶って文学ゼミに入って、元々少人数の語科の中でも更に文学を学びたい仲間ばかりのアットホームな空間で、憧れの欧先生の下、様々な物語を読み意見を交換し合うあの時間はなんと贅沢な時間だったでしょう。

そしてそこで出会った作家としての Goldschmidt ! 当時、そもそもの志望動機であったアンデルセンの人物像にかなり落胆していた若い私は、彼の経歴からはちょっと想像し難い、それこそ童話風の作品にすっかり魅せられてしまいました。

あの時先生が Goldschmidt を取り上げてくださらなかったら、私は卒論をどうしていただろうと今でも思います。

大方の日本人は例え Goldschmidt のことを知る機会があったとしても、Kierkegaard にまつわる出来事しか知り得なかったでしょうし、そのような人物の書いた作品のことなど興味を持たないのではないのでしょうか。それはとても勿体無いことであり、人は決して一つの面だけではなく色々な顔を持っていることを、改めて文学を通して学ぶことができました。

あれから長い年月が過ぎすっかりデンマーク語からも遠ざかってしまいましたが、今も

変わらず大阪北摂の地で欧先生が文学ゼミを開催していらっしゃることは、当時とまだ繋がっていると感じられて大変嬉しく思いますし、喜ばしい気持ちでいっぱいです。

20周年おめでとうございます。

寺西 和男(1995 年入学 DM)

ゼミ論集 20 周年記念号の発行おめでとうございます。北欧文学の研究に熱心に取り組まれた田辺先生のゼミの卒業生の 1 人として大変うれしく思います。

私は 1998 年度の大阪外国語大学デンマーク語科の卒業生ですので、我々の卒業直後にゼミ論集が発刊されたということになります。大学時代の研究成果がこうした形に残るのは大変うらやましいことです。研究成果を広く伝えることにもなりますし、学生にとってもモチベーションにもなると思います。ぜひ今後も長く続けて頂きたいと思います。

98 年度の田辺先生のゼミには私を含め学生は 4 人でした。先生を囲んでカーレン・ブリクセンや H・C・アンデルセンの作品を読み、少人数で議論を交わし、社会背景などを読み解くゼミは非常に楽しかったです。ただ、先生が与えるテーマには難しいものも多く、ゼミが終わった後は普段使っていない頭を使いすぎて、いつも疲れていたような記憶があります。

私が論文で取り上げたのは、第二次世界大戦後に活躍したデンマークの哲学者、ヴィリー・セーアンセンの実存思想というものでした。先生から与えられた、セーアンセンを通じてデンマークの福祉国家を思想的に読み解くというテーマはとても興味深く、やりがいがありました。今でも、もし時間があるならもっと調べてみたいテーマです。私は大学卒業後に新聞社に就職し、今も新聞記者として様々なニュースを追いかけていますが、セーアンセンは、社会のあり方を考えるひとつのヒントを与えてくれたと思っています。

大東 万須美(1997 年入学 DM)

論集 20 周年おめでとうございます。

私は二十年前、ちょうど文学ゼミで冊子を出し始めた 99 年のゼミ生でした。論文集は今でも実家に保管してあります。先日パソコンのデータを探してみたところ、99 年に論集用に提出したレポートが出てきました。自分の拙く偉そうな文章に苦笑いしながら約二十年ぶりに読み返しました。

思い起こすと、このような機会がなければ知り得なかった詩人やその作品を知ることができました。拙いなりにも一生懸命作品に向き合い、言葉の意味を調べるだけではなく複数形だ単数形だと文法からも意味を汲み出し、さらにゼミでも先生方をも巻き込んであでもないこうでもない意見交換できたことは非常に貴重な体験だったと思います。こうしてゼミで学んだ詩人の名前を話に出すとデンマーク人にも驚かれることがあるほどです。

現在は短編などにも範囲を広げられているとのこと、そしてスウェーデン語科の方と共同で発行なさっているとのこと、当時とはずいぶん内容も充実し質の高いものとなっていることでしょう。

今後のますますのご発展をお祈りいたします。

永野(佐藤) 香織(1998 年入学 DM)

論集 20 周年おめでとうございます。文章を書くことが得意でない上に、とても久しぶりで先生に見て頂くことが恥ずかしいです。

私は十年以上専業主婦をしていましたが、今年の三月から週 3 回のパート事務を始めました。子育てだけしている自分が嫌になったからです。忙しく働いていると逆に気持ちに余裕が持てるというのは不思議ですね。見過ぎていたものを見なくてよくなったからでしょうね。

小学五年生の男の子と小学二年生の女の子を育てています。楽しいことももちろんたくさんありますが、思い悩むことがたくさんあります。子供にいくら注意しても伝わりきらないことばかりなので、この本を読んでねと伝記や物語など、子供に抱いてほしい気持ちを、本を通して学んでもらうために薦めています。偉人の名言やすばらしい作品が子供たちの人生に良い影響を与えてくれるといいなと願っています。

先生にはこれからも素晴らしい作品を紹介してほしいと思います。

20 周年おめでとうございます

藤村 勇貴(1998 年入学 DM)

20 周年論集おめでとうございます。

二十年前といえば、私が大阪外国語大学へ入学したのが 1998 年でしたので、ちょうど同じだけ時間が経ったことになります。

世の中も大きく変わりましたが、いま、おなかに肉が多少つき、明らかに中年に差し掛かった自分を顧みれば、その長い時間が親しくイメージされます。私自身はお世辞にも良い学生だったとは言えませんので、せめて近況報告だけさせていただきます。

卒業して以来、デンマークと関わることはほとんどなくなりましたが、それでも二度訪問しましたし、テレビ等(最近では hygge が広まりつつあるますね)で取り上げられれば、自然と目が向きます。

それに不思議な縁ですが、同学年で、しかも田辺教授の元と一緒に学んだ萬屋さんと、学び舎からは遠く離れた山口県で再会し交流があるのは、これもデンマークと教授が結んでくれたものです。

私は現在、山口県柳井市にて石窯パン「アップルミント」という店を営んでおります。ご縁があれば、ぜひお立ち寄りいただければ幸いです。

山内 麻衣子(1998 年入学 DM)

田辺先生ゼミの論集が発刊から 20 周年を迎えられたとのこと、おめでとうございます。

私は 2002 年に大学を卒業しました。田辺先生のゼミでお世話になってから十五年以上の年月が経ったことになりますが、今回の寄稿にあたって久しぶりに同期の仲間から連絡をもらったとき、大学時代の風景がよみがえり(もちろんその中には田辺先生のご自宅にお邪魔した幸せな夜も!), 懐かしいような、つい最近のことのよう、とにかく温かい気持ちになりました。

簡単に近況報告をさせていただくと、大学を卒業してから本日に至るまで、静岡県の会社に勤めています。何年かおきに異動がありその時々で担当職種は異なりますが、今は人事に関係するスタッフ部門で勤務しています。

どの職種においても一貫して感じるのは、コミュニケーションツールとしての「言葉」の大切さと、それらを紡ぐことの難しさです。いかに相手の時間を奪うことなくニュアンスまで正確に伝えるか、それによって相手にどのような感情を持ってもらいたいのか、またどのように行動してもらいたいのか。相手はお客様であったり同じ会社のスタッフであったり様々ですが、「言葉」が人に与える影響の大きさを日々感じています(また、「伝えるための言葉」という観点に立つと、例えば、文法や言葉の使い方が少し間違っていたとしても、むしろそのほうがより伝わる場面もあり、「言葉」については難しさと同じくらい面白さも感じています)。

社会人になり十五年以上が経った今、仕事や日々の生活において、できることも増えましたが、まだまだできないことや答えの分からない課題も多く、その多くが自分ひとりで完結できるものではなく、「言葉」を使って人と関わりながら、より適切なゴールを模索していく類のものです。

そういった意味においては、今も、恐らくこれからも、自分は学びの途上にあり、ここへきてようやく学ぶべきことの輪郭が見えてきたと言えるのかもしれません。大学時代までは教養や娯楽の側面からしか見られていなかった「言葉」を、別の側面からも見られるようになったのかなとも思います。

私個人としてはデンマーク語や文学から少し距離を置いた生活を送っていますが、ゼミで学んだことは今も、自身の根底にあると感じています。田辺先生、田辺先生のゼミに在籍されている皆様・卒業された皆様、それぞれの生活や学びが充実されたものであることを心から願っています。

デンマーク文学ゼミ 20 周年記念論集に寄せて

萬屋 健司(1998 年入学 DM)

デンマーク文学ゼミの論集が 20 周年の節目を迎えるというご連絡をいただき、箕面キャンパスの先生のお部屋で過ごしたゼミの時間を懐かしく思い出すとともに、あれからいつの間にか十五年もの歳月が流れたことに、しみじみと感じ入っております。振り返れば、同級生や先輩方、あるいは後輩たちと比べても際立っていた私の出来の悪さは、大辺先生、青木先生と同学年ということで、さらに強調されてしまったという不運はあるものの、それに輪をかけて遅刻、無断欠席の常習犯であり、要するにダメな学生だったことが、お世話になった先生方への申し訳ない気持ちとともに改めて思い起こされます。

そしてゼミの選択希望を出す時期がやってきた、とある日の午後。「えー！！よ、萬屋くん、、、文学ゼミなの！？！？！(ヤメテー！！)」という悲痛な叫び声が、田辺先生の部屋から聞こえてきたとか、聞こえなかったとか……

小説を読むのが好きという単純な理由で選択した文学ゼミでしたが、それまで日本語を含めて詩を読んだ経験がほとんどなく、目の前のデンマーク語の詩をどういう風に読み、そしてどう理解したらいいのか、とくにはじめのうちは戸惑ったことを覚えています。もちろん今も、詩の読み方がわかったなどとは、到底言えはしないのですが、それでも、大学三回生、四回生のゼミの時間を通じて、「デンマーク語を読む」ということの楽しさと難しさを教えていただきました。一つ一つの言葉の意味を掘り下げ、その背後に広がる空間を漂いながら、作家の生涯を追い、デンマークと日本の文化、歴史の違いを意識しつつ的確な訳語を探していく。詩の翻訳は、長いテキストを読むのとはまったく違って、デンマーク語、日本語とじっくり向き合う、ある意味とても贅沢な時間だったように思います。そしてそこには常に、作品と作者に対する先生の愛情があることも、文学ゼミが楽しい学びの場であった大きな要因の一つなのではないでしょうか。ゼミを通じて教えていただいた、言葉に対して敬意をはらうという基本的な姿勢は、かつて誰かが紡いだ言葉を辿り、そして自ら文章を綴ることが仕事の一部となった今の自分の出発点であると同時に、しばしば傲慢さの罠に落ちてしまいがちな私にとって、折に触れて立ち返るべきところとなっています。

三回生になって、文学ゼミの仲間に加えていただいた時は、まさかそこまで先生に嫌がられているとはつゆ知らず、といいますのも慈悲深い先生が寛大な対応をしてくださったからなのですが、これから少しずつでも、デンマーク文化の普及という形で、研究室に貢献できれば、先生にもあるいはお許しいただけるかと念じている次第です。

デンマーク語科卒業後は、文学とは少し違う道に進みましたが、20 号を迎えた論集が、今後ますます充実したものになりますよう、またこれからも多くの学生さんたちが、デンマーク語の詩を読む楽しさを感じ、それらを通じて自分の人生を豊かなものにできるよう、OB の一人として心より願っております。

市原(金子) 裕子(1999 年入学 DM)

この度は、ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。

私事ですが、2002 年度に大学を卒業した後は、就職、二度の転職を経て結婚、その後、母親となってから早十年の月日が過ぎようとしています。

学生時代に勤しんだこととはかけ離れた日常、子育てがはじまり目の前のことにただ追われる日々、そんな中でも、時折、学生時代を思い出し、遙か遠い国の言語や文学の世界に浸る、なんとも贅沢な時間を過ごしていたのだと、ふり返ることもありました。

出産後は大阪から広島へと生活の拠点が変わりましたが、山陰地方の日本海付近にそびえるデンマーク製の風力発電機、デンマーク発祥と言われる“森のようちえん”，他にもいくつかの北欧やデンマークとの再会に、懐く、同時に誇らしくもありました。これまで歩んできた道を顧みたとき、その後の人生にかかわりが無いと感じていたことに、予想外のつながりを見いだせることがあります。

生きていくと、迷うこと、選択を迫られることは往々にしてあり、都度、自分の“答え”を示さなければならず、大人になるにつれ責任は重くなります。失敗や後悔もありますが、自分でよく悩んで出した“答え”にはそれなりに納得がいくものです。

育児が始まると、様々な子育て論や情報を見聞きしてきましたが、信念持って進むべき方向はいつも、我が子とじっくり向き合いながら探り出し、自らの“答え”を示す、その連続でした。

こうして“答え”は大抵、考えを重ね、考え抜いた先に見つけ出せた、と手応えを感じることも多く、熟慮することは面倒で労力の要る作業、しかしこの作業が大切なのだと痛感します。

思えば、外大生時代にデンマーク語文学ゼミで、文学作品を読み解き、考察を深めるという課題に若い頭と時間を費やしました。気がつかないうちに、思考する習慣を身につける練習となっていたのではと、ゼミで過ごした時間に心から感謝しています。

文学ゼミの授業中に、田辺先生が話されていた“コウノトリの話”，それは、人生の出来事を点とみなし、後々、その点を線でつなぐと“コウノトリ”の形を形成する、という話だったように思いますが、人生で起こることに意味のないことはないと思います。

小学生である息子は、小学校という環境への適応に難しさを抱え、親である私がまず、固まった価値観を崩さなければならない時期がありました。この崩す作業は、多くのエネルギーと時間を要するもので、そのほとんどが思考する作業でしたが、書物や他人から新しく教えられることにも随分と支えられ、我が子という存在に育ててもらっているということにも気がつくことができました。息子は、私が学ぶこと、変わることを怠らないように贈られてきた存在なのかもしれません。

学生時代、ゼミの卒論では、H.C.ブラナーの小説をいくつか読み、主要な登場人物である子どもたち、彼らの心理に焦点をあて分析していく、という課題に取り組みました。当時、将来、私がこれほどまで、子どもの心と日々向き合うことになるとは思いませんでした。

未来につながっているとは到底思えないこと、自分の人生に意味があると思えないことでも、後にふり返れば今につながり、それなりに意味があったと思えるときがきっと来る、そんな話を、いつか息子と語り合うことができたらと思います。

手島 杏子(1999 年入学 DM)

田辺ゼミ論集が 20 周年を迎えるとのこと、心よりお祝い申し上げます。

私が旧大阪外大に入学したのは 1999 年、田辺ゼミに入ったのは 2001 年です。大学から大学院まで合計四年間ゼミに出席しましたが、毎年、楽しいクラスでした。皆で取り組んだ Sommerfugledalen のことや日本の詩歌の発表のこと、ゼミ論集の製本作業が面白かったこと、毎日重たい辞書を手に通学していたことなど、当時のことが懐かしく思い出されます。

二十年が経ってデンマーク語に触れる機会は減ってしまいました。今はただのデンマークファン・北欧ファンです。ですが田辺ゼミの一員であるという気持ちは変わりません。今後も、ゼミ論集を通して長くゼミ生が繋がっていき、田辺ゼミがますます賑わい発展していくことを祈念しています。

西 由香利(1999 年入学 DM)

この度ゼミ論集が二十周年を迎えられたとのこと、心よりお慶び申し上げます。

美しいタイトルに魅かれ取り組んだ作品の難解さに度肝を抜かれ格闘した日々を思い出し、とても懐かしく、またうれしい気持ちになりました。

今後ともより一層のご発展とご躍進をお祈り申し上げます。

田辺ゼミ論集 20 周年記念号への寄稿文と致しまして

石井(市毛) 麻子(2001 年入学 DM)

田辺ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。ゼミ生時、皆で楽しくデンマーク詩の鑑賞を行い、それをまとめた手作りの冊子を手にした時の嬉しかった気持ちを懐かしく思い出しました。文学は如何なる国の、如何なる時代の作品であっても、読み手の私たちに常に新しい発見を与えてくれると思います。私が学生時にデンマーク文学の独特の世界観にわくわくしながら触れたように、これからも多くの学生が田辺ゼミで北欧文学の魅力を掘り下げ、発信していくことと期待申し上げます。

今、私はこの文章を夫の赴任先の米国で、1 か月前に生まれたばかりの娘を見ながら書いています。現在のはじめての子育てに奮闘する毎日ですが、一息つきましたら、またデンマークの文学作品を手にとってみたいと思います。そしていつか娘が大きくなりましたら、私が学んだデンマークのこと、娘が生まれた米国のことを話して聞かせ、異なる文化に飛び込む楽しさを伝えられたらと思います。大学を離れて何年も時が経ちましたが、外国語学部で培ったものは一生抜けるものではなく、これからもこうして私の人生に彩りを与え続けてくれることでしょう。そしてそれはきっと、多くの田辺ゼミ卒業生の皆さま、今後ゼミで学ぶ皆さまにも同じであると思います。

村嶋(西本) 美穂(2001 年入学 DM)

ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。温かい雰囲気和田辺先生の授業を時々思い出しては懐かしく思っております。

現在、東京で家族と暮らしており、2 歳 10 ヶ月になる娘の子育てに奮闘しております。

娘に絵本の読み聞かせをする中で最近、イブ・スバング・オルセンの「つきのぼうや」に出会いました。娘はまだ内容の理解は難しいようですが、縦長の珍しい形態と美しい色彩に興味を持ち、気に入っているようです。

お月様が池に映るもう一人のお月様と友達になりたいとその月を連れてきてくれるように「つきのぼうや」をお願いし、空から降りてきた「つきのぼうや」がその月を探すという内容です。ほっこりする内容と可愛らしい絵がデンマークの絵本らしく温かい気持ちになりました。

慌ただしい毎日の中でふとデンマークの絵本に触れる機会があり、文学ゼミでの思い出も蘇り、娘が少し大きくなればデンマークを訪れ、アンデルセンの物語も色々読んであげたいな、とデンマークへの思いを膨らませている今日この頃です。

また何かの機会に皆様にお会いできることを楽しみにしております。

稲垣 和哉(2002 年入学 DM)

田辺ゼミ 20 周年おめでとうございます。

原稿募集のお話は、久保田さんからの電話でお聞きしました。そう、田辺ゼミのゼミ生なら誰もが知るあの久保田さんです。

私がゼミに参加していた頃、久保田さんはまだ“フレッシュな”現役院生でした。

共におじさん院生としてお互いに近しく感じ、お昼にはグラウンドを走り回る若者たちを目映く眺めつつ、スタンドで一緒におにぎりを食べていたものです。もちろん学識も人生経験も久保田さんにはとても及ばない私なので、いつも教えを受けるばかりでした。

私の今の住まいは岐阜の山あいであり、久保田さんから電話をいただいた時は畑で里芋を掘っているところでした。大学院をドロップアウトした私はデンマーク文学から遠く離れた毎日を送っており、論集に寄稿するなんておこがましいと尻込みしていたら、後日久保田さんから二度目の電話。「ちょっと待ってよ。代わるから」といきなり田辺先生に電話を渡したようで、先生もさぞ困った事でしょう。でもお蔭様で十年ぶりぐらいに先生のお声をお聞きすることができました。先生のお声は当時と少しも変わらず、「早く論文の途中経過を出しなさい」と指導を受けていたあの頃にたちまち戻ったようで、すっかり恐縮してしまいました。でももちろんそれはとても嬉しいことでした。

二十年という長きに渡り先生が論集の指導を続けて来られたこと、歴代の数多くの優秀なゼミ生が研究に励み、論集として成果を積み重ねてきたこと、久保田さんが寄り添ってずっとその様子を見守って来られたこと、それらたゆみない努力のすべてが大変尊いことだと思います。これからもますます田辺ゼミが発展していくよう陰ながら応援しております。

稲田 博子(2003 年入学 DM)

ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。記念号に寄稿させていただきますこと、大変うれしく思います。

卒業から数年、デンマーク語からは遠ざかっていましたが、四年ほど前、思いがけずデンマーク語翻訳のチェックのお仕事をする機会を得ました。ありがたいことに、現在も継続してお仕事をいただいています。

ゼミ論集の詩を訳した時はデンマーク語から日本語、現在は英語からデンマーク語と、入り口と出口は異なりますが、詩を訳した時の言葉の選び方は今のお仕事にも通じるところがあると感じます。

微力ではありますが、日々精進し、今後もデンマーク語に関わっていければと思います。

榎波(鈴木) 由梨(2003 年入学 DM)

ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。

2005、2006 年度の論集では、稚拙ながら表紙・裏表紙絵を描かせていただきました。栄えある田辺ゼミの論集 20 年の歴史の一部を彩らせていただけたと思うと、とても光栄です。

卒業から十数年、デンマークに関することや国際的交流とは残念ながら縁遠く、1 歳の子供を育てるのに必死な日々を送っております。

しかし、田辺ゼミで得た田辺先生や研究仲間たちとの絆は今もなお続き、私にとって得難い大切な宝となっています。

これからの学生さんたちにとっても田辺ゼミが、田辺先生の細やかなご指導のもと学生同士が励まし研鑽し合えるあたたかな場でありますように。

ますますのご発展をお祈り申し上げます。

江見(水野) 麻理子(2004 年入学 DM)

論集 20 周年、誠におめでとうございます。その大切な歴史の 1 コマにささやかながら携われたのだと思うと、誇らしくもあり、学生時代の楽しかったゼミが改めて思い起こされます。卒業後少しでもデンマークに関われたらと、海運大手のマースクライン社と深い取引のある物流企業に就職しました。ずいぶんと昔の話ですが、マースクの役員が訪日した折、幸運にもデンマーク語で多少やりとりをする機会がありました。また同社の貨物船に関わる中でしばしばデンマーク語を目にすることもあり、勉強した甲斐があったと嬉しく思っています。

卒論では Karen Blixen の作品をテーマにしました。卒業前にコペンハーゲン近郊の彼女の博物館へ赴き、念願だったお墓参りをしました。鳥のさえずりだけが聞こえる、ひっそりとした優しい森。その静謐さの中、大きな樹の下に眠る彼女らしい凜とした墓の佇まいに、私は胸をうたれました。作品を読む以上に、彼女がどのような人であったのか、少し触れられたような気がしたのです。今は育児でてんやわんやですが、久しぶりに彼女の本を手にとってみようと思います。

寄稿をさせていただく御礼を申し上げますと共に、田辺先生とゼミに関わるすべての皆様の、ご健勝とますますのご活躍を陰ながらお祈りしております。

後藤(木村) 美帆(2004 年入学 DM)

ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。分厚い辞書を片手に頭をフル回転させながら、難解な北欧詩や短編と奮闘した日々が今ではとても懐かしいです。最近は一歳の息子と公園に通う毎日で文学とは縁遠い生活ですが、文学ゼミでの会話や印象的な作品は今でもよく覚えていて、自分の中に当時の経験が生きているのを嬉しく感じます。最後になりますが、これからの北欧文学ゼミの益々の発展をお祈りしております。

中村(小薮) 麻生(2004 年入学 DM)

ゼミ論集発刊 20 周年、おめでとうございます。今日まで続く論集にゼミ生の一員として参加できたことを大変嬉しく思っています。赤い辞書を片手に作品の翻訳や解釈に頭を抱えながら誤訳を頻発させていた時間が昨日のことのようです。田辺先生のもとゼミの皆様方とデンマーク文学について考える貴重な機会を持てたことに改めて感謝いたします。また、今後も論集が皆様にとって多くを学ぶ場であり続けるよう願っております。

田辺ゼミへの感謝を込めて

藤光 慎悟(2004 年入学 DM)

「学びとは何か」。いつも自問自答を繰り返しながらも、私が最も大切にしたいと考えるテーマです。

近年叫ばれる「アクティブ・ラーニング」の風潮とそれに対するニーズは、私が身を置く兵庫県西宮市の教育現場にも押し寄せています。特に私の担当する英語教育に関しては、教員の英語使用頻度やペア・グループワークを用いた授業形態、英語 4 技能の育成のあり方、外部検定試験への対応、大学入試制度の大変革など、現実的な課題がしきりに議論されています。様々な情報が渦巻く中で、日々の生活に追われる中で、ふと立ち止まって考えることがあるのです。自分は子どもたちに何を伝えたいのだろう、と。しかし、そんな時に必ずヒントを与えてくれるのは、大学時代の経験であり続けています。

元来私は受動的な人間であると思います。学生時代も、チャンスがすぐそこに転がっていても、確実に成功すると確信を持つことができたり、誰かが背中を押してくれたりしないと、なかなか重い腰を上げることができませんでした。積極的だったのは大好きな野球に対してだけ(今でもクラブ顧問という形で携わっています)。旧大阪外国語大学への入学後も所属する野球部のリーグ戦に追われ出席日数はギリギリ、最低限の勉強量で成績も鳴かず飛ばす。向上心に乏しく情けない学生生活を送っていました。

しかし、そんな私にもこれまでの人生で唯一他人に誇れるものがあると自負しています。それは「人との出会いや環境に恵まれる強運」です。中でも、私の人生観や学びの姿勢を最も大きく変えていただいたのが、田辺文学ゼミとの出会いであったのです。外国語教員になりたい、北欧の教育事情を学びたい、という目的をもって入学した私は、当初社会ゼミを選択しようと考えていました。しかし、ゼミ選択に向けた田辺先生のオリエンテーションに参加させていただき、考えを改めることとなります。短い時間の中でも外国語を通した文学の学びの奥深さに触れる機会をいただき、知的好奇心が大きく膨らみました。初めての感覚に戸惑いながらも、その強いインスピレーションに従い(私はこの手の感覚を尊重するようにしています)、文学ゼミに進むことを決めました。田辺先生が「藤光君が希望してるって聞いて驚いたのよ!」と仰る顔を今でも鮮明に記憶しています。

ずっと重く煩わしく感じていたあの赤い辞書も、それからは私の親友になってくれました。ひとつの言葉がその文学作品の中でどのように使われ、どのような役割を果たしているのか、それが分かってくると更なる世界が待っています。ひとつの文学作品を取り巻く時代背景や思想、宗教、作者の生い立ち、国民性。そして一つの文学作品を通して生まれる様々な思考や更なる探求心。未熟な私にとっては、学びの奥深さ、面白さに気づかせていただき、初めて「主体的な学び」を実践する機会をいただきました。さらにはこの経験が、教育に携わる上での私の信念を構築してくれたのです。

その背景にある田辺ゼミの最大の魅力、それは田辺先生のお人柄に他なりません。私にとって文学ゼミはいつもアットホームな雰囲気居心地がよく、安心して学べる場でした。田

辺先生はただ知識を与えてくださるだけではなく、私たち学生の学びの目的や方法、考え、そして人柄までを尊重し、一人一人に丁寧にご指導くださいました。その温かい眼差しがあったからこそ私たちは高い意欲をもって伸び伸びと学びを追求することができ、学ぶ喜びと姿勢を体得できたのだと考えます。

「知」は「力」です。その後の人生を豊かにする「知」を獲得するための「主体的な探求の姿勢」を体得する過程が「学び」であるのではないのでしょうか。敬愛する田辺先生にそうしていただいたように、私も、生徒の個性に寄り添い、知的好奇心をくすぐり、主体的に学ぶ喜びを見出すきっかけを与えることができるような教育者でありたいと考えます。そのために、ホームルームを、ひいては自分の勤める学校を、田辺文学ゼミのように深い学びの機会と安心感を提供できるような環境にしたいと強く思うのです。

最後になりましたが、私たちが愛する田辺文学ゼミの益々の発展をお祈り申し上げます。このような素晴らしい場で育てていただいたという感謝と誇りを胸に、微力ながら私自身も高校教育という形で恩返しをしていくことができれば幸いです。いつかは自分が学びに携わった生徒たちが、田辺文学ゼミの門をたたき、そんな夢を思い描かずにはいられません。

片岡(竹内) 沙知(2005 年入学 DM)

20 周年おめでとうございます。文学ゼミで毎週、北欧文学を読み解き、発表していたことを懐かしく感じます。先生のゼミで文学を読み解く面白さ、他の人と意見を交換する楽しさを学ばせて頂きました。

現在は母親となり、なかなか本を読む時間はとれないのですが、どんなに忙しくても子供たちに絵本を読むことだけは欠かさないようにしています。子供たちにも物語から様々なことを学んでもらえたらと感じていますし、私の楽しみでもあります。時に北欧の絵本を読み聞かせる際は、文学ゼミでのことを懐かしく思い出しています。

工藤 麻理子(2005 年入学 DM)

あらためまして、20 周年おめでとうございます。わたしはゼミ生の頃から見た目も中身も特に変わらず、未だにお給料をレゴブロックに費やしています。欧先生も長いこと会っていませんがそんなにお変わりないんじゃないかなと勝手に想像しています(笑)いい意味で好き放題、のびのびとさせていただいて、大学時代を思い出すとゼミでの楽しかったエピソードがいろいろと思い出されます。先生、お身体に気をつけて、いつまでもかわいらしくて素敵な女性でいてくださいね！（目上の方には失礼かもしれませんが… 私にはいちばんしっくりくる表現なのであえてかわいいと言わせてください）

これからも文学ゼミが楽しいメンバーでいっぱいになることをお祈りしています。

熊澤(櫻井) 朋子(2005 年入学 DM)

20 周年おめでとうございます。

学生時代、ゼミで学んだこと、みんなで考察し、意見交換をしたことなどとても楽しかった記憶が蘇ります。温かい雰囲気和田辺ゼミが大好きでした。

田辺ゼミの益々のご発展と、卒業生皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

森本(阪田) 紗世(2005 年入学 DM)

ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。

文学ゼミを通して数々の作品を読み皆で考察することで、表面的に作品を読むだけでなく、言葉の奥に込められた意味を読み解き理解することの楽しさを知ると共に、北欧文学の独特の光と闇をより深く感じ楽しむことができました。

毎年論集を作成するにあたり題材を決め、それに関する文献を読んだり調べることに沢山の時間を費やしました。社会に出るとなかなか持てない、貴重な時間だったなと思います。

欧先生の美味しい手料理で一年を締めくくって頂けるアットホームなゼミに所属することができ、充実した時間を過ごすことができました。

これからも沢山の方が欧先生の下、北欧文学の素晴らしさに触れて頂けることをお祈りしております。

太田 絵美(2005 年入学 SW)

田辺先生、文学ゼミの皆様、20 周年記念号発行おめでとうございます。

私が田辺ゼミに参加させていただいたのは、スウェーデン語科生が加わった年、2007 年度の後期からでした。スウェーデン留学を終え、復学時にはゼミが新しい体制ということで、不安もありました。しかしいざ参加してみると、とてもアットホームな雰囲気、そんな不安も吹き飛んだことを覚えています。

今回 20 周年記念号発行のお知らせを頂き、改めて当時を振り返ってみると、たくさんの素敵な思い出が蘇ってきました。田辺先生の研究室で Edith Södergran の詩を読んだこと、自分たちで選んだ写真が表紙になった論集を手にとった時のこと、ゼミ全体での忘年会等です。論集制作というのは、日々取り組んできたことが形になる、とても有意義なことだと思います。私は卒業後スウェーデンに引っ越し、9 年が経ちました。遠くからではありますが、田辺ゼミの益々のご発展をお祈り申し上げます。

奥村(中尾) 佳子(2006 年入学 DM)

ゼミ論集 20 周年、誠におめでとうございます。毎年様々に環境が変化中、いつも温かくご指導くださいました田辺先生に感謝申し上げます。私は 2011 年に学部から大学院に上がり、ゼミ論集の編集にも携わらせていただきました。少しでもお手伝いできたことを光栄に思います。毎年どんな表紙になるのか楽しみにしておりました。

大学院卒業後は、日本語教師として学生の文章やレポートを添削する側になりました。ある年に担当学生数が大幅に増え、根気のいるレポート添削の日々が始まりました。その時、文学ゼミの人数が例年になく増えた年のことを思い出しました。その当時、大変な状況でありながらも丁寧に添削指導してくださった田辺先生始め、ご尽力いただきました先生方のことを思い出し、私も頑張らなくては！とパワーを出して乗り切ることができました。添削は想像以上に大変な作業なのだと初めて思い知り、改めて感謝の念を抱きました。本当にありがとうございました。

近況報告ですが、2018 年夏に東京に引越し、こちらの生活にも慣れてきました。関西に戻った際にはまた先生方にお目にかかれることを楽しみにしております。末筆ながら、文学ゼミの皆様の今後一層のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

北垣 佳代(2006 年入学 DM)

この度は田辺ゼミ論集の発刊 20 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

さて、私は 2008 年から 2010 年の 2 年間田辺ゼミに在籍しておりました。卒業論文では Morten Nielsen の詩を取り上げ、その死生観について論じました。

現在は外国の特許関係の仕事をしており、残念ながらデンマーク語に触れる機会はほとんどありません。ごく稀にデンマーク語の特許文献を目にすると、昔の記憶を辿りつつ読もうとしますが、デンマーク語の知識も薄れ、特許関係の難しい用語ばかりのために、音を楽しむぐらいしかできないのが非常に残念に思います。

デンマークは小さな国であり、日本でも研究できる機関が限られています。二年間という短い期間でしたが、田辺ゼミでその小さな国の文学を学べたことは、私にとって今でも思い出深い経験です。

拙い文章ではございますが、この度の記念号に寄稿させていただける機会を作ってくださいました皆様に心より感謝申し上げます。末筆ながら、田辺ゼミの一層のご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

三谷 功生(2006 年入学 SW)

この度は田辺ゼミ論集が発刊から 20 周年を迎えられたとのこと、お慶び申し上げます。このニュースを聞き、私自身とてもうれしい気持ちになり、欧先生の研究室でゼミの授業をとっていた日々がとても懐かしく感じられます。思い返せば、研究室で過ごした時間はとても穏やかなものであり、同時に、そこで北欧文学を学べたことは大変貴重な体験でした。欧先生におかれましては、これからも引き続き、私たちの世代と同様、いやそれ以上に、ゼミ生たちを優しく丁寧にご指導されていかれることと存じ上げます。これからも田辺ゼミのますますの発展を祈っております。

少しばかり近況報告を。私は現在スウェーデンの首都ストックホルムで生活をしています。2013 年から 2016 年まで在スウェーデン日本大使館で在外公館派遣員というプログラムで働き、2017 年の終わりから再びストックホルムに戻り、働きながら再び学生をしています。卒業後は北欧文学からは少し離れていましたが、この寄稿文できっかけを頂けたので、私の好きなスウェーデン作家の一人、バルブロ・リンドグレン(Barbro Lindgren)の詩を紹介したいと思います。

バルブロ・リンドグレンは 1937 年生まれのスウェーデン人作家で、1965 年に *MattiasSommar*(マティアスの夏)で作家デビューし、デビュー以来 100 作を超える作品を書いています。その作品は約 30 言語に訳されており、日本語に訳されている作品も複数あります。2014 年にはアストリッド・リンドグレン記念文学賞を受賞するなど、様々な賞を受賞しています。作品は主に児童文学ですが、大人向けの作品も複数発行されています。

私の一番好きな彼女の作品は、*Loranga, Masarin och Dartajang*(ロランガ、マサリンとダタヤング、1969 年)という児童文学なのですが、今回は彼女の作品、1974 年に発行された詩集 *Gröngölingen är på väg*(拙訳：ヨーロッパアオゲラがやって来る)の中から“Havet låter på ett särskilt sätt”という詩を紹介して、締めくくりたいと思います。彼女のことを知らなかった方が、彼女の作品に興味を持つきっかけになれば幸いです。

Havet låter på ett särskilt sätt

海は特別な音がする

Havet låter

海の音は

på ett särskilt sätt

特別だ

Himlen tiger stilla

空は沈黙してる

Älska nån

誰かを愛することは

är både svårt och lätt

難しくて簡単

tusen gånger

1000 回

har jag gjort dej illa

私は君を傷つけた

Havet låter

海の音は

på ett särskilt sätt

特別だ

Himlen tiger stilla

空は沈黙してる

Säg mej du
vad som är fel och rätt
för ögonen
vill inte öppna sej
och mina öron
hör så illa

私に教えて
何が正解で間違いなのか
だって目は
開こうとしない
そして私の耳は
よく聞こえないのだから

出典：Barbro Lindgren, *Gröngölingen är på väg* (Rabén & Sjögren 1974, s. 10)

安田 祐子(2006 年入学 SW)

この度は、田辺ゼミの論集が発刊 20 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。さて、私は 2011 年にスウェーデン語科を卒業後、富士通株式会社に入社し、大阪でシステムエンジニアとして企業の会計システムの構築に取り組んで来ました。その後、拠点を東京に移し、現在は富士フイルム株式会社にて、IT の知識を活かして、スマホアプリの商品企画およびマーケティング活動を行っています。

今回この寄稿文を書くにあたり、スウェーデンに留学したこと、箕面キャンパスでスウェーデン文学を学んでいたことを思い出し、非常に懐かしい気持ちになりました。現在スウェーデンやスウェーデン文学との繋がりをあまり持つことが出来ておらず寂しいですが、いつの日か、スウェーデンと仕事で関わることであればと日々を過ごしております。

今回は私の好きなスウェーデンのミステリー作家、Camilla Läckberg(1974-)の *Mord och mandeldoft*(『殺人とアーモンドの香り』)の冒頭部分 Förord の第一パラグラフを翻訳しました。Camilla Läckberg の作品であるエリカ&パトリック事件簿シリーズは、菅原先生によって『氷姫』『説教師』が翻訳され、日本でも人気シリーズとなっています。 *Mord och mandeldoft* は短編集で、Förord では Camilla が作家を目指すことになった背景が綴られています。

末筆になりますが、田辺先生、現役ゼミ生、OB・OG の皆さまのこれからのご活躍と健康を祈念しております。

Jag föddes med en dröm.

En dröm om att bli författare, att få skriva böcker.

Den har funnits med mig så länge jag kan minnas.

Jag hade turen att ha en pappa som älskade böcker.

När jag tänker tillbaka ser jag honom alltid med en bok i handen.

Han läste jämt.

Vi började tidigt prata om böcker och bokhyllan är välfylld.

När jag var sju år plockade jag fram en bok som skulle lägga grunden för min kärlek till deckargenren,

Döden på Nilen av Agatha Christie.

Mitt morbida intresse för ond bråd död fanns där sedan tidigare.

- min barndom är fylld av hemska små berättelser om mördade tomtar och annat men när jag läste den boken visste jag att det var deckarförfattare jag ville bli.

私は夢を持って生まれた

作家となり、本を書けるようになる夢を

物心が付くころから、ずっと夢見てきた

幸運にも私の父は読書家だった

思い返すと、父はいつも本を手にし、

ずっと読んでいた

幼いころから父とは本について語り合ったし、本棚には十分な本があった

私は7歳のとき、1冊の本と出会った

この本によって私の推理小説への愛は深まっていくことになる

アガサ・クリスティの『ナイル川に死す』であった

邪悪な死に対する私の病的な興味はそれよりも前からあったが

(子供の頃、殺された妖精の恐ろしい話などよく聞いていた)

この本と出会ったとき、私は推理小説家になりたいと悟ったのだ

参考文献

Läckberg, Camilla. 2013. *Mord och mandeldoft*. Stockholm: Bokörlaget Forum

井上(宮原) みゆき(2008 年入学 DM)

田辺ゼミ論集 20 周年、おめでとうございます。

今回記念号のお話を伺って、大好きな文学をみんなで話し合い考察し、観賞したあの時間を懐かしく思い出しました。当時私が論文の題材に選んだ「バベットの晩餐会」は今も変わらず私にとって名作です。とにかく「バベットの晩餐会」で自分が得た感動を表現したくて無謀なテーマを掲げた私を、欧先生は最後まで見守ってくださいました。私が卒業してもう七年になろうとしています。きっと田辺ゼミの優しい空気はそのままなんだろうと思います。これからも先生のご指導のもと、様々な作品の翻訳・鑑賞が行われていくであろうことを嬉しく思います。田辺ゼミの今後益々のご発展を心よりお祈りしております。

櫻木 絢子(2008 年入学 DM)

ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。

久しぶりに論集を開き、自分が書いたものを読み返してみました。拙い文章と論考でしたが、作品を読み込んで翻訳し、授業で指摘された箇所を考え直し、作品の解釈に挑んだ跡がうかがえました。

現在デンマークの伝統刺繍を使ったアクセサリーを制作しており、その歴史を学ぶためにデンマーク語の文献を読むことがあります。辞書の助けを必要としながらも、楽しく読むことができるのは、学生時代にデンマーク語の文章にたくさん触れたおかげだと思います。

とても和気あいあいとした雰囲気です。でも作品に対しては真摯に向き合う田辺ゼミが大好きでした。これからも様々な作品をそれぞれの視点で選び、翻訳・鑑賞されていくことでしょう。田辺ゼミの今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

橋本 詩織(2008 年入学 DM)

デンマーク文学ゼミ 20 周年おめでとうございます。

もともと「本好き」というほどではない私でしたが、田辺先生が紹介してくださる作品がどれも大変面白く、文学ゼミを選択させていただきました。その選択は大正解で、これまで全く知らなかった文学の深さを知ることができました。また、田辺先生が一人一人に話す機会を与えてくださるおかげで、友人たちの多様な意見を知ることができ、一つの作品にもいろいろな捉え方があるのだと学ぶことができました。

私はデンマークの映画学校に留学するほど映画好きで、卒論でも映画と原作小説の比較をテーマとさせていただきます。当時、就職活動でどの業界に進むか悩む時期がありましたが、卒論を進めるにつれやはり映像業界に進みたいと考えるようになりました。卒業後は

東京の映画制作会社に就職し、自分の大好きな映像の業界で様々な経験を積むことができました。実はこの秋に退職し、現在は転職という人生の転機を迎えています。箕面キャンパスもまた、移転という転機を控えていると聞いておりますが、移転後もあの温かい文学ゼミの雰囲気はそのままに、更なる発展をされていかれることを期待しております。

末筆ながらますますのご活躍をお祈り申し上げます。

西村(矢田) 侑子(2008 年入学 DM)

田辺ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。

大学卒業から間もなく六年、私事です。先日長女も生まれました。里帰り出産だったため、しばらく実家で過ごしていました。ある日部屋を片付けていると、棚に懐かしいものを発見しました。それは卒業論文執筆のための資料やアイデア、構想などをまとめた殴り書きのメモ帳で、ふっと当時の卒論への熱意、そして完成までの焦りや苦悩が蘇ってきました。私の卒論のテーマはドーテ・カーアベクというデンマーク人絵本作家の作品研究でした。彼女の描くブラックユーモア溢れる絵本は、当時の私にとってとても新鮮で強烈なものでした。

そんな当時の思い出に浸っていると、ふと我が子は彼女の絵本にどんな感想を持つのだろうと興味が湧いてきました。毒気のあるイラストを不気味がるのか怖がるのか、はたまた面白がるのか・・・どんな反応を示すのか、読んであげたくなりました。当時作品研究のために和訳したデンマークの絵本を自分の娘に読んであげようと思う日が来るとは、時が経つのは本当に早いものです。そんな時にゼミ論集発刊 20 周年というおめでたいお知らせをいただき、なんだか不思議な縁を感じています。

ここで改めて田辺ゼミで学べたこと、様々な文学に触れる機会を得られたことに感謝したいと思います。北欧文学ゼミの今後益々のご発展を心よりお祈りしています。

北欧文学ゼミ論集 20 周年記念によせて

鹿倉 麻未(2009 年入学 DM)

ゼミ論集が 20 周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。

院生として在籍した期間を含め、田辺先生には六年間にわたってお世話になりました。文学ゼミの四年間では、H.C.Andersen, Søren Kierkegaard, Karen Blixen などのデンマークを代表する作家をはじめとして、Klaus Rifbjerg, Pia Juul, Henrik Nordbrandt などの現代作家や、Helle Helle, Naja Marie Aidt, Kim Fupz Aakeson などデンマークで今読まれている作家まで幅広く学びました。

学び始めた当初、多くの作家が詩人としての顔も持っていることを知り、驚いた記憶があります。デンマーク・スウェーデン文学の文脈に詩という土壌があることへの興味とともに、デンマーク語に限らず日本語の詩にもあまり触れてこなかったため、詩という存在そのものを新鮮に感じたことを覚えています。ゼミの発表で最初に翻訳した詩は、Pia Tafdrup の“TRANSPARENTS”でしたが、“stilhed”を「静けさ」と訳すのか「静寂」と訳した方がいいのか、“rosa”は「バラ」と書いた方がいいか「薔薇」なのかなど、口語的か文語的かということ以上に、細かな組み合わせによるニュアンスの違いに翻訳の難しさを感じました。十行程度の短い詩でしたが、想定よりも時間がかかったのを覚えています。四年間のうち、考察が進まなくて頭を抱えたり難しすぎる詩を選んでしまったと弱気になったりするのは毎回のことでしたが、それを乗り越えてゼミの発表に持っていくと思ってもよらなかった切り口の読み方に会ったりと、ゼミで読むことの楽しさと感じていました。時には、詩の一節ついてゼミの全員で時間切れになるまで悩み続けることもあり、論集に収録された 90 詩人 240 にのぼる詩の一つ一つに、そのような詩との対話のすべての時間が込められているのだと思います。

ゼミ発表がきっかけで、デンマークにおける詩文学の存在に好奇心をかきたてられ、修論でも現代詩人の Pia Tafdrup をテーマに選びました。身体を比喻に取り入れた詩をどうにか身体論的に分析できないかと、読み慣れない文学理論や哲学の本にかじりついて試行錯誤した日々は思い出深い経験です。完成が期限ギリギリになり先生をハラハラさせてばかりでしたが、最後まで温かくご指導いただきました。また、文法が苦手な私を久保田さんには根気強く助けてくださいました。

就職してからは、IT 関連の仕事で企業の IT 活用のお手伝いをしてきましたが、IT の発展スピードの加速を実感する日々でした。入社した頃には夢物語だった AI がたった 3,4 年で実用段階に到達し、電子決済、ビットコインなどついこの間まで存在すらしていなかったものが身近になるなど、IT による生活環境への影響も大きくなってきました。IT 以外にも、イギリスの EU 離脱をはじめとして世界情勢が激しく変化するなかで、日本においても労働、移民、ジェンダーなど従来の課題が新たな局面に入っているように感じます。多くの課題について、先んじて社会での対話を深めてきたデンマーク・スウェーデンに対する研究の重要性が増していることは言うに及ばず、社会の変化によって生まれる軋みや歪みを拾い上げて暗黙の領域に言葉を与えてきた文学の存在に対する注目も高まっていると思います。

今後、デンマーク・スウェーデンにおいてどのような文学が生まれるのか楽しみであるとともに、過去の作品が今日の社会によってどのように再解釈されていくのかについても興味尽きません。文学作品とは、書かれたときに完結するのではなく読み手に読まれることで存在すると言われることもあります。まさしく文学ゼミはデンマーク・スウェーデン文学を読み日本における北欧文学の存在を形成してきました。

末筆ながら、その成果の結実である論集が 20 周年を迎えたことをお祝いするとともに、田辺先生と文学ゼミの今後のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

川原 知己(2009 年入学 DM)

論集発刊 20 周年おめでとうございます。寄稿に際し、六年ぶりに懐かしいゼミでの日々を振り返りました。皆で北欧文学や映画、詩を鑑賞する際には、ひとりでは思いもよらなかった解釈に驚きつつ文学の深さとおもしろさを実感する毎日でした。

いつも真剣で多角的な考えを持った皆さんに刺激を受けつつ、どこかほのぼのとしたアットホームな日々は私の財産になっていると改めて感じています。

今後の北欧文学ゼミのさらなる発展を心よりお祈りいたします。

中川 真麻(2009 年入学 DM)

ゼミ論集 発刊 20 周年おめでとうございます。

今ではデンマーク語や北欧文学に触れる機会もなかなか無いまま社会人生活を過ごしており、日々辞書や文献、資料と格闘していた学生時代を懐かしく思い出します。

しかしそんな今でも、日常の中でふとデンマーク語の単語を見つけたり、北欧のニュースに触れたり、卒業論文のテーマで扱ったアンデルセンの絵本を目にしたときなどに、友人や先生の顔、箕面キャンパス、学生当時の様々な思い出がよみがえりとてもノスタルジックで暖かい気持ちとなります。

今後とも、北欧文学ゼミが一人ひとりの心に素敵な出会いや学び、思い出を積み重ねていく素晴らしい場でありますように。20 周年本当におめでとうございます。

藤岡 愛実(2009 年入学 DM)

初めまして。2013 年に大阪大学外国語学部デンマーク語専攻を卒業しました。藤岡愛実

です。この度は田辺ゼミ論集 20 周年記念号を刊行する旨を聞き、大変喜ばしいことと思っております。私は現在海外在住でして、日々沢山の刺激を受けながら、時には荒波に揉まれるようなこともありつつ、異国の地ならではの学びが多い生活をおくっております。

私が田辺ゼミにいました頃を回顧したところ、真っ先に頭に浮かんできたのは、欧先生とゼミの仲間と過ごした和やかであたたかい時間でした。数々の北欧の文学や詩に触れ、その世界観を想像しながら作者の意図を読み解き思索に耽っていた時間が、慌ただしい社会人生活を送る現在となってみればとても贅沢な時間であったということを身をもって感じております。

卒業してからは北欧言語や北欧文学とは全くかけ離れた時空間にいますが、ときに何かのきっかけでこれらを想起する機会があります。先日は友人とムーミンの話で盛り上がり、そこから発展して北欧の幸福度や政治などにも議論を交わすこととなりました。そんなときには自分の学生時代の思い出が堰を切ったかのように溢れ出てきます。

学生だった当時はゼミの課題や卒業論文に取り組む際、日頃の勉強不足がたたって結構苦戦したほうなのですが、不思議とこれらに取り組んでいたときの苦い思い出は心に轍を残しておらず、欧先生やゼミの仲間と過ごしたほっこりした団欒の思い出が、私の脳内にある「北欧文学ゼミの思い出ファイル」の中身を埋めつくしているのです。

これからの北欧文学ゼミも私がいた頃のような、穏やかでゆったりとした、それでいて各々が学びの意欲を持って仲間と共に切磋琢磨しあう、そんな有意義な時間を卒業時の手土産として持たせてくれるようなゼミであり続けることを願っております。

権田(谷口) 奈津美(2010 年入学 DM)

ゼミ論集が 20 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。卒業して早五年の月日が流れました。結婚を機に地元大阪を離れ、現在は茨城に住んでいます。卒業後は語学を活かす仕事には就けなかったもので、デンマーク語を使う機会はないだろうなと思っていましたが、つい最近久しぶりに使う機会がありました。レストランで食事していると偶然隣にデンマーク人御一行が入ってきたのです。彼らは注文方法に困っている様子だったので、思い切ってデンマーク語で声をかけてみると、驚いていると同時にとても喜んでいました。勉強してきたことがいつ役に立つかわからないものですね。これからも忘れないよう細々と語学の勉強を続け、いつか家族で再びデンマークを訪れることができればと思います。

高畠 知里(2010 年入学 DM)

ゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。和気あいあいと、時には熱く議論を交わしながら過ごした文学ゼミを懐かしく思います。就職した現在は学生時代ほどデンマークに触れ合える機会は多くありませんが、今でも旅行で訪れたり、雑貨を集めたり、北欧好きは変わりません。また文学ゼミの皆様とお会いできる日を楽しみにしております。最後になりますが、文学ゼミの益々のご発展をお祈り申し上げます。

北欧文学ゼミ論集 20 周年記念号に寄せて

菊地 灯(2010 年入学 SW)

関原 瞳(2010 年入学 SW)

中谷内 なつみ(2010 年入学 SW)

弓場 麻妃(2010 年入学 SW)

菊地 灯

ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。田辺先生、大辺先生、久保田さん、お変わりなくお元気でいらっしゃるでしょうか。こちらは在学時から今も変わらず合唱を続けています。来年はついにスウェーデン語の合唱曲が全日本合唱コンクールの課題曲に選ばれ、文学ゼミでの詩の解釈、背景やメタファーの推察が活かせる場が増えそうです。文学ゼミと論集の益々の充実、ご発展をお祈りしています。

関原 瞳

この度は、ゼミ論集 20 周年、誠におめでとうございます。

今回記念論集に寄稿させていただくにあたり、自身の卒業論文を読み返してみました。論文であつかったセルマ・ラーゲルルーヴの“Luftballongen”「軽気球」では、主人公の兄弟が、恵まれない家庭環境下にある中、空を飛ぶという夢を「希望」に懸命に生きていましたが、ラストにはふたりにとって憧れの対象である「軽気球」に導かれるようにして、深い氷の隙間に落ち、「死」を迎えます。論文は、当時の自分の言葉でこうしめくくられていました。

ラーゲルルーヴが『軽気球』における兄弟の死を通して伝えようとしたことを、現代を生きる者の一人としてしっかりと受け止めたい。

兄弟の「死」はつらい現実からの「救い」であつたのか、「生きた」意味はなんだったのか。兄弟は「生」をまっとうできたのか、「幸せ」であつたのか。今でも、ラーゲルルーヴの描いた「死」の意味を深く考えてしまいます。

卒業後は児童書に携わるようになり、日本の子どもたちにどんなことを伝えたいかと考える日々を送っています。そんな今は、当時よりもふたりの「死」を悲しいものとして捉えています。どんな子どもたちも兄弟が空を追い求めたように「夢」を追い、「生」をまっとうできるような時代が訪れるよう尽くすことが、今の自分にとって、ラーゲルルーヴが描いた兄弟の「死」を「受け止める」ことなのかもしれないと、感じています。

あらためて、田辺先生、久保田さん、同期をはじめゼミ生の皆さんと文学ゼミで過ごした時間は、私の根っことなり、今もこれからも支えてくれると感じています。ひとつの作品に皆で向き合ったこと、卒論の中間発表後に久保田先生のケーキで皆でお祝いしたこと、田辺先生のご自宅でのパーティー、仲間たちと夜遅くまで励まし合いながら卒業論文を書いたこと、すべてが宝物です。本当にありがとうございました。

今後も北欧文学ゼミのご発展をお祈りしています。

20 周年のお祝いと心よりの感謝を込めて。

中谷内 なつみ

田辺ゼミのみなさま、ゼミ論集 20 周年おめでとうございます。あれだけお世話になっておきながら、卒業後ご無沙汰しておりすみません。

こちらは最近ようやく社会人の感覚がつかめてきたのか、ややこしい案件にヒーヒー言いながらも達成感を感じることがあったり、学生の頃には買えなかったものを買ってみたり、業務が重なって所属部署が全部爆発したり、同期や上司と呑みに行つて愚痴で盛り上がりたり、現実的な日々を結構楽しく過ごしています。

そのせいか、学問的なことに関する衰えっぷりは激しく、この寄稿のために残しておいたゼミの資料を見返してみたところ、何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。さらに翻訳中、動詞に för-a がくつつくとうどういう意味になるのかが全く思い出せず大焦りました。

そんなへっぽこな卒業後を送っていますが、それでも、良い小説や映画、音楽などに会おう

と、文学ゼミ生の血が騒ぐことがあります。メタファーを考察してみたり、セオリーに当てはめてみたり、些細な単語にこだわってみたり、そうやって好きな物語をじっくり味わう贅沢な楽しみ方は、間違いなく文学ゼミで教えていただきました。

今振り返ってみれば、文学を真剣に議論することができる場があり、一つの単語や1行の文章に何時間も時間をかけることが許され、熟練でありながら若気の至りにも寛容な指導者がいて、付き合ってくれる友人がいたことは、本当に幸せなことだったと思います。この素晴らしい学びの場が長く、賑やかに続いてゆくよう、北欧文学ゼミの益々の充実と先生方の健康をお祈りするとともに、30周年記念号に向けてネタを温めておきます。

弓場 麻妃

ゼミ論集20周年おめでとうございます。先生方をはじめ、久保田様、同じ研究室で意見を交わしたゼミ生の皆さま、在学中は大変お世話になりました。

私事ではございますが、現在最寄りのコンビニまで車で一時間以上かかる僻地にて暮らしております。在学中に、田辺先生の紹介により挿絵画家ヨン・パウエル作品に出会い、森の奥へ奥へと吸い込まれていきそうな彼の絵に惹かれました。私が暮らすこの山奥では、地形をも変えてしまう自然の力、霧が立ちこめる風景の神秘性、暗闇の木々から聞こえる動物の声などに畏怖を感じることも多々あります。画集を眺めながら、彼の描く絵の世界から自然への畏敬、繊細な美しさ、不思議な生き物への魅力を感じては、今私がこの地で暮らしていきたいと願ったのは、彼の絵に出会った影響なのだろうと沁々と思うところです。

素敵な出会いをくださった文学ゼミの皆さまに感謝を申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。益々の発展とご清栄をお祈り申し上げます。

Sommarpsalm

夏の讃美歌

詩 D.C.af Wirsén (1842-1912)

曲 Waldemar Åhlén (1894-1982)

En vänlig grönskas rika dräkt
har smyckat dal och ängar.
Nu smeker vindens ljumma fläkt
de fagra örtesängar;
Och solens ljus
och lundens sus
och vågens sorl bland viden
förkunna sommartiden.

馴染み深い緑の豊かな装いが
谷や草地を彩っている
今や暖かなそよ風が
美しいハーブの褥を優しく撫でている
そして陽光が
木々の葉擦れの音が
風に波立つせせらぎのさざめきが
夏の訪れを高らかに謳いあげる

(Sommarpsalm 1934) (菊地 灯)

解説

スウェーデン賛美歌 201 番としてよく知られている一篇。同じ詩に異なる作曲家が旋律を付けたものもあるが、今回採り上げるのはストックホルムのオルガニストであったヴァルデマル・オレーンの作曲による混声四部合唱版。柔らかな暖かさと陽光の感じられるホ長調、軽やかな足取りの¾拍子が、この詩自体の持つ初夏の爽やかさを存分に引き出している。

この曲は 2010 年 6 月、スウェーデンのヴィクトリア王女の結婚式でも歌われた。また、スウェーデン国内で愛されている世界的合唱指揮者エリック・エリクソンと、スウェーデンの誇る声楽アンサンブルグループ「ザ・リアル・グループ」のコラボレーションによる、スウェーデン民謡や愛唱歌を集めたアルバムでは、第一曲目に収録されている。この演奏では少人数アンサンブルならではの精緻な音楽運びと発語が楽しめる。「夏の賛美歌」以外にも有名曲が揃っているので、スウェーデンの合唱曲、愛唱歌を知りたい方に是非お勧めしたい。

テキスト

D.C.af Wirsén, Waldemar Åhlén , Sommarpsalm,Gehrmans Musikförlaget,1934.

参考文献・CD・サイト

The Real Group, Eric Ericson, STÄMNING, Spice IF Life, 2007.

Sveriges radio

<https://sverigesradio.se/sida/artikel.aspx?programid=83&artikel=3796104>

Emigrantvisa

(Vi sålde våra hemman)

Vi sålde våra hemman och gav oss sedan ut,
som fågelen bortflyger när sommaren tar slut.
Han kommer en gång åter när våren skrider fram,
men vi få aldrig skåda vårt kära fosterland.
Vi tänkte att förljuva det sista livets slut
liksom att komma längre än Herren stakat ut.
Vi reste ifrån Sverige med något övermod,
vi kände ej det öde oss därute förestod.

移民の歌 (わが家を売って)

わが家を売って　そして旅にでた
夏が終わり　鳥たちが渡るように
春の足音が聞こえれば鳥たちは戻るのだろうが
この愛する祖国を　私たちが再び目にすることはない
人生の終わりにはより多くの喜びをと
主が示した境界を越えていくように
このスウェーデンを向う見ずに旅立って
外の世界に何がまっているかはわからない

Trad., efter Maria Røjås, på Malungs folkhögskola, Darlana
トラディショナル、マリア・ロイオスから耳伝え

(中谷内　なつみ)

補　足

2012 年にフォルクの伝統音楽コースに留学していた時、授業で初歩として習ったスウェーデンのトラディショナル(フォルク)ソングです。スウェーデンから北アメリカへ渡った移民について歌ったもので、作者は不詳ですが、1800 年代の作と考えられています。なお、ロイオス講師によると、彼らの船は新天地に着くことなく沈んだそうです。

Jan Johansson によるジャズアレンジで有名になったためか、Youtube 等で聞ける演奏には気だるげな曲調のものが多くありますが、私が独唱、あるいは合唱を前提として習ったのは、ただただ鋭い悲壮感が漂うシンプルなメロディーでした。

スウェーデンの伝統音楽は、単純な構成ながらハーモニーの美しさを重視する傾向があり、親しみやすい曲も多いので、ぜひ一度触れてみてください。日本では Kraja, GöranMånsson の作品なら比較的手に入りやすく、Youtube 等で試してみるのであれば、DansenUngdom(別名：Dansa Flickor / Dansa lilla system)という曲が、いかにもスウェーデン的な構成と旋律、かつ、今でも様々なアレンジで演奏されていて面白いのでお勧めです。

参　考

<http://www.folkwiki.se/Musik/944>

岡本 知子(2011 年入学 DM)

論集発刊 20 周年、おめでとうございます。

卒業後も、こうしてゼミの一員として寄稿できることをとてもうれしく思います。北欧文学に携われた日々は、私の中でとても有意義でかけがえのない時間です。そして、とても hygge な時間でした。

実のところ、私の一番好きなデンマーク語は hygge です。大好きなデンマークの文化、人情、雰囲気を感じることでできる言葉だと思うからです。卒業してからも、私の人生のあらゆる局面で大切に、実践していきたいと思っています。

私事ですが、現在デンマークと関係のあるパンメーカーに縁があり、日夜懸命に働いています。デンマークと日本を微力ながらもつなげるお仕事ができたらと思います。

最後に、ゼミの編纂に携われている方々、北欧文学のすばらしさについて教えていただいた田辺先生に心から感謝申し上げます。

田中 優衣(2011 年入学 DM)

この度はゼミ論集発刊 20 周年おめでとうございます。在学中、論集には、私が訳した詩は二回、訳に関わった短編小説も二回載せていただきましたが、特に詩の翻訳については当番が回ってくる度に訳す難しさに打ちひしがれ、他のゼミ生のみなさんが上手に訳されているのを羨ましく思っていました。私は翻訳が得意ではありませんでしたが、翻訳の作業自体は好きでした。時折、原文を見るやいなや「これしかない」と思えるようなぴったりの訳語がひらめく瞬間があり、この爽快感は何にも代えられないものだったのです。

そんな私ですが、現在は産業翻訳の世界に身を置き、学生時代と同じように日本語訳に頭を悩ませる毎日を送っています。まだまだ精進を続けていかなければなりませんが、好きなことを仕事にできたことを幸せに思います。この今があるのは、田辺ゼミでじっくり翻訳と向き合えたからに他なりません。翻訳の道を志すきっかけを与えていただき本当に感謝しています。今後のゼミ論集のますますの発展を心よりお祈りしております。

田辺ゼミ 20 周年記念号に寄せて

小林 紗季(2011 年入学 SW)

田辺欧先生、文学ゼミ 20 周年おめでとうございます。

私は、2011 年より、まずは科目等履修生として阪大でスウェーデン語を学び始めた変わった種の学生で、3 年次編入学を視野に入れて、北欧文学概説の授業を受けさせていただいた頃から、田辺先生にお世話になってまいりました。

もともとデンマーク・スウェーデン語両専攻の文学ゼミを兼任していらっしゃる田辺先生にとって、スウェーデン語専攻の学生であるばかりでなく、イングマル・ベルイマン=映画≠文学を専門にしたかった私は、輪をかけて厄介な学生だったことと、今更ながらご心中をお察しいたします・笑。

「私は映画は分からないから！でも小林さんなら自分でちゃんとできるはずだから」という田辺先生のお言葉は、未熟だった私にはプレッシャーでもありましたが、スウェーデン映画研究の道に進んだ今、独立独歩というのは研究だけでなく人生全てにおいて不可欠な姿勢であることを改めて感じます。

根が情熱的で(!?), 物言いもキツイ私ゆえ、田辺ゼミ在籍中は他の和やかなゼミ生の皆さんを恐れさせていたのではないのでしょうか・笑。とはいえ、一見和やかな面持ちの田辺ゼミ生の皆さんが、それぞれに譲れない文学愛を持っていらっしゃるって、表面には柔和ながら骨のあるゼミだったなぁと面白く振り返っています。

ちょうどこの寄稿文を書いている一昨日、ストックホルム大学博士課程への受入通知を頂きました。2016年から修士として留学していた第二の母校に、doktorand として戻れることに期待を膨らませつつ、修士留学の際には何度も推薦状のことで田辺先生のお手を煩わせたなぁと思い返して、改めまして感謝申し上げたいばかりです。

二十年目の節目を迎えられたこと、かつてのゼミ生として大変喜ばしく、これまでの田辺ゼミの歴史に想いを馳せています。まだまだこれからも田辺ゼミがご発展を続けられることをお祈りしつつ、30周年をお祝いする日を今から楽しみにしております。それまで、田辺先生らしいアットホームな文学ゼミを続けていらしてくださいね。

高橋 いずみ(2011年入学 SW)

北欧文学ゼミ 20周年記念号の発刊、誠におめでとうございます。

卒業から4年が経ち、現在は読書に没頭することもありないような日々ですが、記念号発刊の連絡を受け、文学ゼミで過ごした当時のことを思い出しました。詩の一文を、長い時間をかけて丁寧に翻訳し、そこに秘められた作者の心境を読み解く作業は、今となってはとても貴重な時間だったように思います。

現在学ばれている皆様にとっても、今後様々な道を歩むなかで、北欧文学の世界観にゆっくりと浸った時間は大切な思い出となるはずです。

最後に、北欧文学ゼミのますますの充実・発展と皆様のご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

北欧文学ゼミ 20 周年記念号に寄せて

中村　みのり(2011 年入学 SW)

北欧文学ゼミ 20 周年おめでとうございます。

お久しぶりです。スウェーデン語専攻 28 年度卒業生の中村みのりです。田辺先生に多大なご迷惑をおかけしながらどうにか卒業させていただいてから、あっという間に二年近くたってしまいました。今ではスウェーデン語を使う機会はめったになく、殺伐とした職場で、情緒のかけらもない仕事に追われています。自分が北欧ゼミで過ごした静かで穏やかな時間はまるで夢の中の出来事だったかのように感じられます。

20 周年という記念すべき年の論集に寄せて書かせていただく機会をいただけたことに感謝申し上げます。ゼミでの楽しいひと時を振り返る機会にもなりました。北欧文学ゼミは文学作品について意見交換する場を与えてくれるだけでなく、自分の好きな作品に没頭できる貴重な場でした。これからも北欧文学ゼミがますます発展し、ゼミ生の皆様がご活躍されることを願っております。

沖垣　みのり(2012 年入学 SW)

文学ゼミ論集 20 周年、おめでとうございます。また我々卒業生にもこのような寄稿の機会をくださった田辺先生と編集部の皆様、誠にありがとうございます。

先日「長くつ下のピッピの世界展」を見に行ってきました。ピッピをはじめとするアストリッド・リンドグレンの代表作たちの初版や原稿、挿絵原画などを見ることができました。久しぶりに北欧文学に触れて、文学ゼミでの日々を思い出しました。様々な作品について先生を囲み語り合えたゼミは、本当に幸せで貴重な時間だったのだと改めて感じました。

これからも、そんな時間や研究成果を形として残せるこの論集が、より素晴らしく発展していくことを心よりお祈りいたしております。Stort grattis!

鳥羽 明里(2013 年入学 DM)

中川 歩果(2013 年入学 DM)

増田 歩実(2013 年入学 DM)

吉永 梨紗(2013 年入学 DM)

このたび、田辺ゼミ論集発刊 20 周年を迎えられますこと、ならびに 20 周年記念号を刊されますことを心よりお祝い申し上げます。

チャーミングな田辺先生率いる文学ゼミで、ときに活発に議論をし、ときにお茶会を開き他にはない和やかでアットホームで自由な雰囲気の中過ごした時間は、私たちの宝物です。卒業から 1～2 年、社会の荒波にもまれている私たちですが、今回このお知らせをいただき、ふとそんな思い出の数々が懐かしく愛おしく思い起こされました。節目の年にこうして卒業生として携えることができ大変嬉しく思います。

これからの田辺ゼミのますますのご発展と、末永くこの素敵な場所が続いていくことを祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

伊勢田 如奈(2014 年入学 DM)

この度は、田辺先生ゼミ論集 20 周年記念号の発刊、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

寄稿のお話をいただいた時、一瞬にして箕面キャンパスで過ごした時間が私の中で蘇ってきました。色鮮やかな木々、静かな図書館、田辺先生の繊細で朗らかな授業。授業内で扱った作品、ブリクセンの「空白のページ」の息をのむような静寂さ、その中にある女性の強さや、イエッセンの「Vibeke」の虚無感、人生観などもはっきりと心に残っています。落ち着いて、登場人物の気持ちやその背景と向き合える、大好きな空間でした。

卒業論文では、幼少期から好きだったアンデルセンの『人魚姫』に関して執筆しました。実際にデンマークに行き情報収集したことや、展開に行き詰まり悩んだ日々が懐かしく思い出されます。あの時先生から頂いた「物事を素直に受け止めすぎる」「もう少し批判の目や多角的なものの見方を」というお言葉は今でもずっと私の意識するところにあります。

私は現在東京で、まだ慣れない仕事に毎日奮闘しています。忙しい雑多な日々の中で時々、先生方や仲間と共に受けた授業を思い出し、懐かしさに浸り、明日からまた頑張ろうと自分を鼓舞しています。結びとなりましたが、北欧文学ゼミの益々のご発展をお祈りすると共に、改めて心よりお祝い申し上げます。

柚木 慧帆(2014 年入学 DM)

わたしの文学ゼミでのいちばんの思い出のうちの一つは、Karen Blixen の「空白の 1 ページ」を同期の四人で分析したことでした。

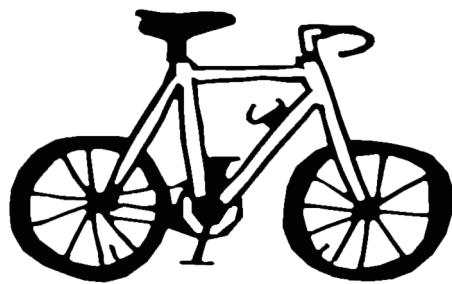
Blixen の作品は、短い言葉に無限の解釈の可能性を秘めていました。ああでもないこうでもない毎週いろいろな方向に考えを巡らせ、Blixen の思うつぼとなって言葉のひとつひとつに魅せられ、翻弄されました。「空白の 1 ページ」では何よりも多くの想いを語っていたのは唯一のまっさらなシートでしたが（気になった方はぜひ読んでみてほしいです）、文学ゼミで過ごした時間、Blixen の語りの世界に潜り込んでいる時間は、びっしり書き込まれたページさながらに充実したものでした。

現在は仕事で、お客様の目に触れる商品原稿を書くようになりました。ストーリーテラーというと大仰ですが、心に響く文章の大切さを改めて感じる日々です。仕事もプライベートも、毎日が「充実の 1 ページ」となるように毎日を大切に過ごしていきたいと思います。

最後になりましたが、文学ゼミ 20 周年本当におめでとうございます。今後もますますのご発展をお祈りしております。

第三部

特別寄稿



キェルケゴールの詩

久保田 勝己

はじめに — アマーガー平原 —

詩集『世界の構造』などで知られる粕谷栄市に、こんな詩がある。

啓示

アマーガー平原に、私は、一度も行ったことがない。
一生、行けることはあるまい。亡くなった方の書きのこ
したもので、知るだけだが、私にはとても懐かしいところ
だ。

典雅な白雲の丘がつづき、そこには、見渡すかぎり、
沢山の豚小屋がある。その全ての丸太の柵は破れ、天か
ら降ったように、数知れぬ豚たちが遊んでいるのだ。

.....

ただ、おそろしく、汚い服の男が、ひとり、そこに寝
ている。そう呼ぶならば、おそらく、彼は、豚の番人で
あろう。しかし、彼は眠っている、帽子を顔に乗せて一。

.....

生きることが苦しい時、よく私は、自らに呟く。「ア
マーガー平原」と。

私は、何も知らない。が、いみじくも、今から百二十
年前、確かに同じことを、呟かれた方がいる。無学な私
は、時々、その名を間違えるが、たしか、キェルケゴール
氏と言われる。

(『世界の構造』1971)

粕谷栄市(1934-)には、怪異な世界に題材をとった物語詩も多いが、この詩はごく平易な抒情詩に属するだろう。私はこの詩を月刊誌『群像』(2013.8号)に見つけて興味を抱いた。最後の2行がなんとも微笑ましかったからだ。粕谷は、その『粕谷栄市詩集』(「現代詩文庫 67」1998)の「散漫なおぼえ書」に書いている。「私は詩人となり、人々の共感と讃辞に囲まれて生きるよりは、アマーガーの平原で、豚の番人となり、豚たちの友愛と共感をかち得たい」いまはうろおぼえの文章だが、それは確かアンデルセンの自伝に出てくるキェルケゴールのことばである」と。粕谷は、このことばがひどく気に入ったこと、それに養豚家の知己から豚の綺麗好きと利口さを聞かされたことが相俟って、この「啓示」という詩を書いたと綴っている。それでいよいよ興味が膨らんだ。ところが、芥川賞作家の諏訪哲史がこれに関して異見を述べていたのだ。諏訪は、さきの『群像』の特集「個人的な詩集」という企画において、6人の作家・詩人の一人として「遠い場所の詩」と題した6篇の詩を編んで

いるが、その中の1篇にこの「啓示」を選んでおり、その「編者解説」においてこう書いていたのだ。「哲学を学んでいた大学時代、奇しくもアマーガー平原について書かれた本を僕も読んだ。しかし僕の記憶ではキェルケゴールではなく、シレジウスだった。…」豚番の昼寝する平原は永遠の午(ひる)」と脚注に載っていた」と。粕谷と諏訪、どちらの言が正しいのだろうか。シレジウス(Angelus Silesius 1624-1677)は、ドイツバロック時代を代表する神秘主義的宗教詩人らしい。彼の主著『瞑想詩集』を瞥見しただけで確たることは言えないが、彼なら「豚番の昼寝する平原は永遠の午」とは言いそうだが、17世紀半ばのドイツに生きた宗教詩人がデンマーク・コペンハーゲンのアマーガー平原の豚に心を寄せるとは思えない。それに、「今から百二十年前に呟いた」という粕谷の言が正しければ、シレジウス説は端から成り立たない。コペンハーゲンの、と書いたが、これは間違いなく Amager と綴って「アマー」と読ませるコペンハーゲンの南部に位置する島のことであり、粕谷の「啓示」に詠まれるアマーガー平原はこれであろう。では、粕谷が「おぼえ書」に言う「アンデルセンの自伝に出てくるキェルケゴールのことば」とは？ アンデルセンは、何回も自伝を著しているが、少なくとも岩波文庫に収められた『アンデルセン自伝』(大畑末吉訳)には見つからない。自伝をすべて徹底的に調べたわけではないので断言は出来ないが、キェルケゴールが必ずしもそれほど親密ではなかったアンデルセンに、何の前提もなしに、このような個人的な感懷を漏らすとはどうしても思えない。しかし、アンデルセンの伝聞あるいはキェルケゴールの著作からの引用による記録だとしたら、自伝のどこかにあってもおかしくはない。アンデルセンとの関わりを別にすれば、粕谷のキェルケゴール説には紛れもない真実がある。何故なら、キェルケゴールの事実上のデビュー作『あれか、これか』(1843年)第一部の第1論文であるアフォリズム集「ディアプルサルマータ」の第1節に、粕谷の言うキェルケゴールが発した感懷とほぼ同じ文章が存在するからだ。即ち、"See derfor vil jeg hellere være Svinehyrde paa Amagerbro og være forstaaet af Svinene, end være Digter og være misforstaaet af Menneskene." (「だから私は、詩人となって人々に誤解されるよりは、アマーブローの豚飼いになって豚たちに理解される方を望む」(拙訳))。 (ここで Amager は梶田啓三郎訳では「アマーヤー」、大谷愛人訳では「アマガ」、浅井真男訳は「アマーゲル」、太田早苗訳は「アマウア」、芳賀檀訳や飯島宗享訳では抜け落ちている。「啓示」の呟きに相応しい謎の呪文というべきか)。SKS (SKS はキェルケゴール新版全集 Søren Kierkegaards Skrifter 全55巻のこと、以下同じ)の Kommentarer (SKS K2-3)によると、「キェルケゴール時代の Amager は、コペンハーゲン向けに食糧品特に野菜類を生産する多くの小規模農業を営む農村地区で、そこの人々はコペンハーゲン市民からは素朴で荒っぽくて面白いと思われていた。Amagerbro は、Amager のとっかかり部分でコペンハーゲンに最も近い地区である」(拙訳)。現在の Amager はカストロプ空港やコペンハーゲン大学の人文科学部を擁して、大コペンハーゲンの一部となっているが、大きな公有放牧地 fælled も残している。「アマーガー平原」の「平原」とは、この fælled を言うのだろうか。

長々と横道に逸れた感があるが、Amager 平原が粕谷の言うアンデルセン自伝のキェルケゴールの言葉であろうが(もしかしてアンデルセンのデビュー作『ホルメン運河から

Amager 島東端までの徒歩旅行』が記憶を混乱させた?), 諏訪の言うシレジウスのアフォリズムに出てくる言葉であろうが、実はどうでもよいことなのだ。更には、厳密に言えば、粕谷のうろおぼえ「私は詩人となり…」と「ディアプルサルマータ」のそれとでは、見て分かるように少なからざる異同があるのも事実だ。それにもこだわることはない。チェコスロヴァキアの作家ミラン・クンデラ(1929-)の自伝的小説で主人公の詩人ヤロミールが語る「詩とは、あらゆる断言が真実となる領域のことだ。…詩人は何事も証明する必要はない。唯一の証明が感情の強さのなかにあるからだ」(西永良成訳『生は彼方に』ハヤカワ epi 文庫)を思い出せば済むことだ。そして、詩の読者にも一斑の解釈の権利があるとするならば、私は「啓示」の「アマーガー平原」をキェルケゴールの「ディアプルサルマータ」第1節に出てくる Amagerbro の fælled だと推定し、上述の異同も無視した上で、大事な主題をつけ加えたい。それは、上記のキェルケゴールの感懐「私は、詩人となって…」の前段、即ち「ディアプルサルマータ」冒頭の文章である。

詩人とは何か、その心には人知れぬ深い苦悩を秘めていながら、その嘆息と悲鳴とが美しい音楽を奏でつつ流れ出してくるように出来た唇を持つ不幸な人間である。…」(梶田啓三郎訳)。

これがキェルケゴールの何度も書いた「詩人とは…」という文章の最初のものとなる。ダントネが詠い、太宰治が『ヴィヨンの妻』に引いた「おもてには快樂をよそおい、心には悩みわずらう」にも似たこの文章は、良くも悪くも彼の詩人哲学者人生の通底音となる。

1. 詩・詩人とは？

キェルケゴールは、上にも書いたように「詩人哲学者」と呼ばれることが多いが、一般通念的に言えば彼は詩人でもないし、哲学者でもない。キェルケゴールは、1篇の「詩」も詠んでいないし、世界に関する統一の見解や体系化を志向してもいないからである。この点、「南欧のキェルケゴール」とも呼ばれるスペインのウナムーノ(Miguel de Unamuno 1864-1936)に近似するが、こと詩人に関してはキェルケゴールの態度に屈折したものがあるのに対してウナムーノには、40歳を超えて初めて詩集を著したときに、誰かの「詩人でもあったのか!？」との問いに憤然として「詩人でもあるのではなく、まず何よりも詩人なのだ」と答える(ホアン・マシア『ドン・キホーテの死生観』)確固たる矜持があり、実際に多数の詩篇、詩集をものしているのだから大いに異なる。

キェルケゴールの生きたデンマークのロマン主義時代は、のちに黄金時代と言われるほど芸術文化の花が開き、多くの作家・詩人が活躍した。S. H.ラーセン編『デンマーク文学史』の「ロマン主義時代」には22人の有名作家が登場するが、このうち詩を書かなかったのはキェルケゴールただひとりである。では、キェルケゴールは詩人ではなかったのか？詩人とは一義的には「詩」を書く人ではないか。では、詩とは？かつて田辺先生にそれを尋ねたことがある。先生の答えは「詩人とは、いわゆる詩を書く人ではない。詩人とはイメージ

ラリーや多義的な言葉を駆使して読者に様々な感情を喚起させる人である。したがって、詩は形式から見た詩に限られない」というものであった。この見解には、おそらく先生が鍾愛されるモダニズム詩人エーディット・スーデルグランが詩集『九月の豎琴』(1918)の序文に書いた次の文章と響き合っていると思われる。

私の創作が「詩」であることは誰も否定できないでしょう。これを、「韻文」だと言うつもりはありません。私はいくつかの意に染まぬ詩に、あるリズムをつけようと試みましたが、結局はリズムに囚われずに、完全な自由韻律にすることによってのみ、言葉とイメージの力を維持できることが分かりました。(田辺欧訳、田辺欧『待ちのぞむ魂』より)

私は、それを機会に「詩」「詩人」に関する定義や言説を調べてみた。古今東西の詩人や作家や文学者が百家争鳴よろしく発言していて興味深いが、その発言態様には三つの型があった。

一は、「詩とは?」のタイトルのもとに詳しく何ページも、ときには1冊を費やして詩の歴史などを論ずるが、タイトルに相応しい具体的な結論が見当たらないというタイプ。

嶋岡晨『詩とは何か』(1998)／星野徹『詩とは何か』(2003)／川田靖子『詩とは何か』(2014)／長田 弘『詩人であること』(1997)等々 (順不同、以下同じ)

二は、体系的原理的に詩論を展開して詩の何たるかを説くタイプ。詩を詩で定義するような短い警句的アフォリズム風の説明もここに含める。

ワーズワース「詩とは、力強い感情の自然な氾濫である」／コールリッジ「詩とは、最良の順序におかれた最良のことばである」／マラルメ「詩とは、危機の状態の言語である」／T.S.エリオット「感情の意味と総合された、形式の完璧さ」(以上、中桐雅夫『詩の読みかた 詩の作りかた』1980より)／リルケ「詩を書く人が詩人になるのではなく、詩人が詩を書くのです」(川田靖子『詩とは何か』より)／C.サンダーバーグ「詩とは、ヒヤシンスとビスケットの総合の成就である」(河野一郎訳『おはよう、アメリカ』「詩の暫定的定義」38のうちの一つ)／エミリー・ディキンソン「この人こそ詩人だった…」(岩田典子訳『エミリー・ディキンソン』詩 no.448)／J.L.ボルヘス「詩は、巧みに織りなされた言葉を媒体とする、美なるものの表現である。…もっと大事な何かがあるはずで、その何かに励まされて、われわれは詩を書く…」(鼓 直訳『詩という仕事について』2011)／オクタヴィオ・パス「ポエジーは認識、救済、力、放棄である。世界を変え得る作用としての詩的行為は、本質的に革命的なものであり、また、精神的運動なるがゆえに内的解放の一方法でもある。…詩的なものが、まだ形を持たない状態におけるポエジーであるのに対し、詩は創作であり、頭をもたげたポエジーである」(牛島信明訳『弓と豎琴』2011)／H.ブルーム「強い詩人が生き延びるのは、彼が打ち消しの反復、隔離の反復という非連続を生きているからなのだが、もし彼が”前方に向かって想起する”という連続

を生き続けなければ、彼は詩人ではなくなるだろう」(小谷野・アルヴィ宮本訳『影響の不安』2004)／**中原中也**「パンセのないものは詩人ではない。…パンセは詩ではないが詩はパンセする人から生れる！而してパンセとは現象に対する忠実さの過剰と言へる。誠実のほかに詩の秘訣なし」(『新編中原中也全集 第四巻』2003)／**萩原朔太郎**「詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である。…詩は人間の言葉で説明することの出来ないものまで説明する。詩は言葉以上の言葉である。…詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである」(三好達治選『萩原朔太郎詩集』「月に吠える 序」2009)／**吉本隆明**「詩とは、現実の社会で口に出せば全世界を凍らせるかもしれないほんとのことを、書くという行為で口に出すことである」(『詩とはなにか』2006)／**大岡信**「むかうからたえず/ぶつかってくるが/わたしはいくらでも/よけてとほっているもの」(『詩とはなにか』1985, 「詩とはなにか」24 のうちの一つ)／**中桐雅夫**(『詩の読みかた 詩の作りかた』1980)／**荒川洋治**(「詩とことば」2004)／**K.ブリクセン**「恵まれぬ恋は詩心をかきたてるものだ」(横山貞子訳「詩人」1981)／**James Reeves, *Understanding Poetry***(1965)等々

三は、詩は定義できないものと主張し、あるいはむしろ多くの良い詩を読めと勧めるタイプ。

ヴァレリイ「詩の定義にとっては、定義できないということが重要なのである」(『詩の読みかた…』より)／**S.U.トムスン**「詩人であるということは、表現しがたいことに書く価値があるということを認めることだ」(Niels Kofoed, *Grundtræk af en europæisk poetik* 1994 より拙訳)／**谷川俊太郎**「詩は、くだらないものなんですよ。詩からは、学ぶものはほとんど無いんです。好きなものは好きっていうのと同じで、要はその詩を好きになればいいんですよ」(インタビュー2015.10.06)／**山之口獏**「詩とはなにかと問われても、…そういうぼくにとって、出来ることはただ一つ、詩を読んでもらいたいと、答えの代りにおすすめするより外にはないのである」(『山之口獏詩文集』1999)／**三好達治**「“詩とは何ぞや” そういう抽象的なないしは哲学的な問題には回避して…詩を理解することは、さまざまな詩をさまざまに読みとり受け容れることからまず始める必要…」(『詩を読む人のために』1991)等々

こう見てくると、田辺先生の定義がいかに正攻法なものかということが分かるだろう。もう一つオーソドックスなのがテリー・イーグルトンの定義である。彼は『詩をどう読むか』(川本皓嗣訳 2011)において、「詩とは、フィクション(虚構)で、言語上の創意に富む、倫理的な発言であり、各行をどこで切るかは、プリンターやワープロではなく、作者自身が決めるものである」と定義して、詩の定義としては「せいぜいこのあたりが関の山」と言うが、よく理解出来る。特に、改行について記しているのが注目される。ただ、「倫理的(モラル)」には多少ひっかかるものがある。イーグルトンは、これについて「倫理というのは、善・悪や正・邪ばかりでなく、人間の行ないや経験を質的、あるいは評価的な観点から見ることを

指している」などと縷々説明しているが、特に日本人には誤解を生む言葉ではないだろうか。私は、この部分を「とりわけ真・善・美に思いを致す発言」（「真・善・美」は、そのうちのどれか一つでもよい）と変え、「（例外もあるが）比較的短い文」ということを加えて、田辺定義と合体させて詩の定義とするのがよいと思っている。また、詩を散文の対立概念とするのも、特に現今では正しくないであろう。散文の反対は韻文である。では、韻文ならすべて詩と言えるのか。そうではなかろう。韻文の意味を田辺定義の「イメージリーや多義的な言語」を含むイーグルトンの「言語上の創意」で代表させることが出来れば、「詩とは韻文である」と言えるであろうか。良き詩であるためには韻文であることに加えて「魔術的」としか言えない要素が必要であると説くのがジェイムズ・リーヴスである（武子和幸訳『詩がわかる本』）。散文（詩）も含めて、「詩」と「非詩」の境界線とは何か？それが「改行」の有無であるとは言えないだろう。それが「魔術的なもの」なら、凡人にはお手上げである。ともあれ、詩・詩人をその形式と内容にわたって十全に定義することは不可能に近いことが分かった。その上で、あらためて問う。キェルケゴールは詩を書かなかったか、キェルケゴールは詩人ではなかったか？「キェルケゴールの詩」というとき、助詞「の」の意味・機能から三つのことが考えられる。（1）キェルケゴールが書いた詩（2）キェルケゴールにとっての詩（3）キェルケゴールを詠った詩である。

2. キェルケゴールの詩(1) — キェルケゴールが書いた詩

上述した定義論議を踏まえると、とりわけ詩と散文の垣根が消えた現今においてはいいよ、キェルケゴールの詩、詩人性が妥当性を帯びてくる。但し、キェルケゴールの場合、一つの作品を捉えてそれが丸々「詩」とであると言うことは難しい。第一、それほど短くはないからだ。文学をそのまま詩と呼ぶ考え方もあるが、今はそれを採らない。この点、同じく「哲学者」と呼ばれるグロントヴィ、マルクス、ニーチェ、ウナムーノ、ハイデガーたちとは違うところだ。詩や詩人を語りながら、いわゆる詩を書いていないキェルケゴールと似ているのはサルトルだろうか。ここでは、そんなキェルケゴールの書いた「詩」について見ていく。

1835年夏の北シェランへの旅では、北シェラン日誌を残しており、8月1日の長文の「ギレライエ日記」における「私にとって真理であるような真理を見出すことであり、私があるために生きそのために死んでもよいイデーを見出すことである」といういわゆる主体性宣言は有名であるが、未だ「詩」を論ずるには至っておらず、詩的な文章というよりむしろ22歳の青年の客気に溢れた決意が伝わってくる告白文である。

レギーネに出会うのは、この時から二年後である。1837年の5月に出会い、1840年の9月に婚約するが、翌年10月にそれを正式に破棄する。この一年余の婚約期間に交わした手紙のうち、キェルケゴールが送った手紙32通が残っている。多くは、愛情のこもったラブレターであるが、婚約の翌日にそれを後悔し、明瞭な理由なしに破棄したキェルケゴールの苦悩がほの見える手紙もある。他人のラブレターを詩文として紹介するのはいささか気がひけるが、キェルケゴールの初めて書いた詩文でもあるので省くわけにはいかない。ここに

紹介するのは、SKS28 Brev Regine Olsen の 151 番である。(ほとんどの手紙に日付が無いので、多くの研究者たちがそれぞれに順番を決めている。SKS では、この手紙を 25 番目に置いている)。

私のレギーネ!

この瞬間は、私たちに味方してくれない。だったら、じゃあ追憶しようじゃないか。追憶は私の真骨頂だ。私の追憶は、永遠に瑞々しく、私の人生の荒野を流れる川のようにうねりながら進み、いつも同じことを口ずさんでは語り、語ってはくちずさみ、悲しみを癒し、私に目配せして誘い、子供時代のほの暗い思い出から迸り出ているその源まで連れ出してくれる。……………

だから私は、これらすべてのことを遠く過ぎ去ったこととして追憶するのだ、それでこそ痛みの寄せ波が消え、憂いの甘美が残るのだよ。

おまえの S. K. (拙訳)

Henning Fenger(1921-85)も、この手紙文を壮麗な散文讃美歌・美しい散文詩(en pragtfuld prosahymne・det skønne prosadigt)と称賛するのだが、甘ったるい手紙も多い中で、この手紙には婚約の先行きに不吉なものを予想させるものがあるのも事実だ。Fenger は、キェルケゴールの特にレギーネとのいきさつを後付けの神話として否定し、この手紙等からもキェルケゴールの不誠実・残酷を弾劾する(*Kierkegaard – Myter og Kierkegaard – Kilder*1976)のだが、全面的には受け入れ難い。敷衍すれば、かの脱構築批評論者のクリストファー・ノリスが『脱構築的転回』(野家啓一ほか訳 1995)において Fenger の所論をキェルケゴールの見事な脱構築だと評して、「フェンガーにとってキェルケゴールの婚約破棄は、— 正統的研究者ならこう考えたであろうが — すでにより高次の宗教的英知を弁証法的に追求していた冷静な意識から生まれた行為ではない。彼が論じているように、むしろ危機はレギーネが他の男と婚約したこと(彼女はその後この男と結婚した)をキェルケゴールが知ったことによって突然荒々しく到来したのである」などと、Fenger も言っていないことを書いており、二重の事実誤認に呆れてものが言えない。

さて、キェルケゴールの著作は、よく審美的と倫理・宗教的とに二(乃至三)分類されることが多い。これがそれぞれ作家活動の前期と中・後期とに振り分けられることも多いが、『あれか、これか』(1843)から『反復』(1843)、『おそれとおのき』(1843)を経て『哲学的断片』(1844)、『不安の概念』(1844)へと仮名で書かれた審美的とされる前期の作品が続く期間に、これらとほぼ時を同じくして実名で書かれた六つの倫理・宗教的な『建徳的講話』が出版されている。キェルケゴールは、宗教的な作品を神聖な右の手で差し出し、審美的な作品を左の手で差し出したが、読者は右の手で後者だけを受け取ったと嘆いている。私は、そのどちらにもキェルケゴールの詩人としての天分が豊かに溢れていると思う。『あれか、これか』の3カ月後に出された最初の宗教的著作『**二つの建徳的講話**』(1843)の序文にはこうある。

この書は、出版されて、比喩的に言えば、いわばさすらいの旅路につくのであるから、わたくしはしばしの間、わたくしの目でその行く手を追っていた。すると、寂しい道を歩いて行くのが見えた、また寂しげに国道に行く姿が見えた。…ついにこの書は、わたくしが喜びと感謝をもってわたくしの読者と呼ぶあのひとりの人に…出会ったのであった。…わたくしはしばしの間、わたくしの目をこの書の上にそそいでいた。すると、この書は、大きい森の人知れぬところに咲いた一輪の名もない小さな花のように、その華麗さで人の目を引くこともなく、その芳香で人を誘うこともなく、またその栄養分のゆえに人に探し求められることもなく、そこに立っていた。しかしわたくしはまた、わたくしがわたくしの読者と呼ぶ小鳥が、突然その小さい花を見つけ、翼にのって舞いおり、摘み取り、運び去って行くのを見た。そして、それを見てしまった後は、わたくしにはもう何も見えなかった。

(梶田啓三郎訳)

初めての宗教的な講話書の行く手を案じるキェルケゴールの心情が美しく詩的に綴られていて、私にはとても好ましい文章である。喜びと感謝をもって「わたくしの読者と呼ぶあのひとりの人」がキェルケゴールの永遠の恋人と言われるレギーネ・オルセンであることは間違いない。しかし、婚約は破棄され、キェルケゴール自ら「レギーネを突き放すために書いた」と言う「誘惑者の日記」を含む『あれか、これか』を出版して3カ月後、そして『反復』『おそれとおのき』を出版する5カ月前の、レギーネの新しい婚約を知らずにいた時期にこの講話書は書かれ出版された。この『二つの建徳的講話』をはじめとした六つの講話書および上記の前期著作には、とりわけレギーネ事件の余韻が色濃く漂っている。その詩的叙述の数々は、レギーネとの恋によって一段と大きく花開いたキェルケゴールの詩才のなせるわざであっただろう。本来似つかわしくないとされる講話書にもそれが及んでいることを批判されたのに対して、キェルケゴールは『哲学的断片後書』(1846)において、聴聞者の心を捉えるためには「詩人の視点からする描写を取り入れることはそれなりに意味のあることだ」という判断をして、決して誤っているとは思えない(杉山好・小川圭治訳)と反論している。

そしてその『あれか、これか』(1843)。先にも挙げた第一部の第一論文「ディアプルサルマータ」などは、機知とイロニーに富んだアフォリズム集で、優に散文詩と称してよいものである。また、第二論文以下第一部の五つの論文では、音楽・歌劇・悲劇・喜劇や恋愛や誘惑が審美的、エロスの的に描かれ、キェルケゴール自身が「一篇の詩」と呼んだ小説「誘惑者の日記」へと流れ込む。そこには、コペンハーゲン大学の神学部に入りながら、文学や演劇にのめり込んでいた時期に得られた経験・知見とレギーネとの恋の次第が強く影響している。いま論文と書いた一つひとつは、詩の定義からは詩とは言にくいし、また「文学イコール詩」という立場はとらないけれど、一つの詩文とでも呼ぶことは許されるのではないか。次に、先ほどから出ている『反復』(1843)。聖母教会で、別れたレギーネの顔を受けて

ベルリンで書き、彼女の新しい婚約を知って書き改めたというこの作品の経緯を含めて、キェルケゴールの著作中私が最も愛する作品である。哲学的小説とも言える作品で、「詩」と呼んでおかしくない描写は随所にあるが、その一つを引用しておきたい。

わが沈黙の共謀者よ！

彼女は結婚しました。誰と結婚したのか、わたくしは知りません。……

わたくしはふたたびわたくし自身です。…これが反復なのではないでしょうか？…

わたくしはふたたびわたくし自身です。…嵐は過ぎ去りました、わたくしの小舟は浮かびあがりました、…わたくしはイデーに属します、…陶酔の杯がふたたびわたくしに差し出されました。…女性の寛大は讃むべきかな！— 思想の飛翔よ、万歳！イデーに仕える生命の危険よ、万歳！闘いの苦難よ、万歳！勝利の歓呼の宴よ、万歳！無限なものの渦巻のなかの舞踏よ、万歳！深淵の底にわたくしをかくまう逆まく波よ、万歳！星の上へとわたくしを投げ上げる逆まく波よ、万歳！（梶田啓三郎訳）

これは、愛する娘と結婚出来ずに逼塞しているうちに、その娘が他の男と結婚したことを知った詩人氣質の青年が冷静な観察者である先輩「沈黙の共謀者」（語り手としての仮名著者コンスタンティン・コンスタンティウス）に、思いのたけをぶつける手紙の一通で、「ちくま哲学の森」選集の第一巻『恋の歌』（1989）にもこの全文が収められている。手紙は全部で八通あり、これは最後のものだが、「ぼく的生活はぎりぎりまで押しつめられました」で始まる三通目の手紙も青年の実存的苦悩を詩的に告白する忘れがたい名文である。ほかにも、青年と語り手が知り合って間もなく、密約を交わすために朝露に濡れた草を踏んで城壁沿いの濠へ魚釣りに出かけて行く場面、ベルリンへ「反復」を探しに行った語り手が帝都劇場の柙席で笑劇の合い間に味わう没我の白昼夢的な独白場面、等々心に残る詩文が多くあり、また本文中には Poul Martin Møller(1794-1838)の詩“Den gamle Elsker”をはじめ、デンマーク、ドイツの詩がいくつも引用されている。

『おそれとおののき』（1843 年）も、サブタイトルに「弁証法的抒情詩」とあるだけに、思想的で詩的要素の濃い作品である。旧約聖書のアブラハムとイサクの物語から始まるが、「序言」に続く冒頭でこの物語のあらましをいずれも Det var en aarle Morgen で始まる四つのヴァリエーションで描き分けて「調律」と題しているのが印象的である。それに続く「アブラハムをたたえることば」の冒頭には「もし人間のなかに永遠なる意識がないとしたら、…そのとき人生とは絶望でなくて何であろう？…」という長い文章群が置かれるが、このような意識から良い宗教的な詩が生まれるのだ、と詩人中桐雅夫も言っている（『詩の読みかた 詩の作りかた』1980）のは特筆される。アブラハム物語をめぐる倫理の議論に関連して、アブラハムの「沈黙」を巡って取り上げられる四つの伝説・挿話、特にバゲスンの物語詩“Agnete fra Holmegaard”(1808)およびアンデルセンの劇詩 *Agnete og Havmanden* (1833. 1843.4 に上演)を踏まえた「アグネーテと水の精」伝説論は、レギーネとキェルケゴールの関係を暗示していて印象に残る。

前期の著作ながら、『**哲学的断片**』（1844 年）、『**不安の概念**』（1844 年）などは、より哲学的要素の濃い作品であるが、その中にもそれら哲学的概念が詩的に描かれている場面が多くある。

さて、そこで瞬間。このような瞬間は、独自の性質を持っている。それは、一瞬のごとく短く束の間であり、一瞬のごとく過ぎ去るものであり、一瞬のごとく次の一瞬には過去のものとなる。それにもかかわらず、それは決定的な意味を持ち、永遠的なものによって満たされている。このような瞬間にはやはり特別な名前が与えられなければならない。それを「時の充実」と呼ぼうと思う。（大谷愛人訳『哲学的断片』）

このように、瞬間は元来時間のアトムではなくて、永遠のアトムなのである。瞬間は、永遠の時間における最初の反映であり、あたかも時間を静止させようとする永遠の最初の試みである。…瞬間は、そこで時間と永遠が触れ合うという両義的なものであり、それによって時間性という概念、時間が不断に永遠を切断し、永遠が不断に時間に浸透するという概念が措定される。ここで初めて前述した「現在する時間(現在)」、「過ぎ去った時間(過去)」、「来たるべき時間(未来)」という区分が意味を持つのだ。（氷上英廣訳『不安の概念』筆者一部改訳）

1846 年に、いくつかの紙切れに残されたメモから起こされた「**秋礼讃**」（SKS27 Løse papirer Lovtale over Efteraaret）と題された詩文がある。秋は雲のとき、音のとき、色のとき、追憶のとき、の四つの見出しのもとに書かれて未完に終わっているが、キェルケゴールの独立した散文詩として珍しいものだ。

冬は、雲を見るには寒すぎる…夏の雲は、だるそうで眠たげだ…だが秋の雲は、夢見るようだ。…雲は静かで退屈している…秋、雲は束の間の夢を見る人のように急いで行く。夏、雲は空にぶら下がっていたくないように見える。秋には、雲が官能的な浮遊に身を任せているのがはっきりと分かる。夏には、一方の雲が他方の雲に道を譲ろうとはしない。秋には、雲たちが楽しげな気晴らしをしながら互いに戯れ合い、互いに急いで行き交い、出会い、別れて、互いにまたの逢瀬を願い、互いに色を混ぜ合って友達が血を混ぜ合うように二つの特性を最後まで輝かせながらも一つになる。（拙訳）

『哲学的断片後書』（1846）を挟んで後期に入ると、例外的な仮名であるアンティ・クリマクスによる二書を除いて、俄然実名の著作が増えてくる。『文芸批評』（1846）、『愛のわざ』（1847）、『野の百合と空の鳥』（1849）等々。特に『**野の百合と空の鳥**』は、キェルケゴールの書いたものの中で、詩的に最も美しく、最もきらびやかな作品と言われている。この『野

の百合と空の鳥』について、Billeskov Jansen(1907-2002)はこれを「抒情詩的散文」(den lyriske Prosa)と称し、その美しさを「主導的な言葉が繰り返し巻き返し出てきて、文章は、前後左右に振動する韻律をとりながら前進してゆき、遂には、われわれは、それらシンプルな三つの思想を、波の上下のうねりのなかで、考えるようになる。このリズムの中には、単純で、原始的で、魔術的なものがある」と語っている(Billeskov Jansen, *Studier i Søren Kierkegaards litterære Kunst* 1951 大谷愛人訳)。「三つの思想」とは、人間が百合と鳥に教えられるとする「沈黙」「服従」「歓喜」を指す。なお、先立つ1847年の『種々の精神における三つの建徳的講話』の中の二番目「野の百合と空の鳥から何を学ぶか」においても、哀れな百合や山鳩の挿話を配して、人間の思い煩いの虚しさを詩的に説いている。

鳥は黙って待っている。…百合もまた同様である。百合は黙って待っている。…単純なものは欺きもしなければ、欺かれもしない。このようにしてやがてその瞬間が訪れる。…人は語ることによって…その瞬間を失うのである。ただ沈黙の中にのみ瞬間は存在する。(久山 康訳『野の百合と空の鳥』)

だが、こうした一方で、キェルケゴールの詩・詩人に対する否定的な態度表明は最高潮に達しつつあった。仮名アンティ・クリマクス著『死に至る病』(1849)。キェルケゴール思想の頂点とも言われるこの哲学書にも極めて印象的な詩的表現が鏤められている。その第一は、人間をひとえに精神と規定する冒頭の文章群であろう。「人間は精神である。しかし、精神とは何であるか？ 精神とは自己である」に始まる文章群は、ややくどいが哲学ならぬ哲学、詩ならぬ詩といった趣きを持つ。この他にも、自己と神の関係を説く箇所でも繰り返される「透明に」(gennemsigtig)という語。その四回目の使用箇所では、次のように言われる。

信仰とは、自己が、自己自身であり、また自己自身であろうと欲するに当たって、神のうちに透明に基礎をおいている、ということである。(梶田啓三郎訳)

この文章自体は詩ではないかもしれないが、「透明に」が置かれることによって、「魔術的」に詩に変わるように私は思う。詩人の北村太郎は、「神のスパイ」というエッセーで、キェルケゴールと『死に至る病』に共感し、この引用文を挙げて「かくも詩的なことばによってでしか、信仰の定義が書かれえなかったことに、わたくしは驚く」と肯定的に語っている(『詩を読む喜び』1978)。実際、キェルケゴールは1849年の日記で1848年に書き終えていた『死に至る病』について、「あれは確かにわたしの書いたもので最も完全で最も真実なものだ。…あれは詩(Digt)なのだ」と振り返っている(SKS22 JournalenNB12 拙訳)。

最後に、1854年の日記に挿入された「雁 一つの寓喩」(SKS25 Vildgaasen. Et Billede.)。雁と鷺鳥を引き合いに出したキリスト教的な寓話であるが、その末尾はこうなっている。

だから、彼ら鷺鳥たちのもとに留まれ、彼らを変容へと説得するという一つ事に没

頭して彼らのもとに留まれ。だが、天の神のために、一つのことだけには留意せよ。
鷺鳥が君の上手に出ようとし始めたことに気づいたら、惨めなままに大事にされてぬくぬくとする鷺鳥になってお仕舞いということにならないように、即別れよ、
別れて渡りとともに去れ。(拙訳)

今となつてはアンデルセンの「みにくいアヒルの子」(1844)やポントピダンの「鷺の飛翔」(1899)との間テキスト性も感じられる(久保田「鳥たちの変容」ゼミ論集 2009/3 の第 10 号) この印象深い詩文を、W. Lowrie(1869-1959)は *A short life of Kierkegaard* (1946) において「キェルケゴール最後の言葉」と書き留めている。

以上、私がキェルケゴールの「詩」として引用した文章からも分かることだが、「キェルケゴールの詩」にはいくつかの特徴が見られる。最大のものは、初めに抽象的で不可解とも思える表現を置き、それを徐々に解きほぐして行くという手法である。『反復』の「反復と追憶とは同一の運動である。ただ方向が反対であるというだけの違いである」も『不安の概念』の「不安は自由の眩暈である」も『死に至る病』の「死に至る病とは絶望のことである」等もこの手法の典型例である。もう一つの目立つ特徴は、文・句・語レベルでの「反復」(「繰り返し」)であろう。不思議なことにこの同時期アメリカに生きた詩人にして作家エドガー・アラン・ポオ(1809-49)の詩法と酷似するのだ。ポオは、有名な詩「大鴉」で 18 連の末尾に nevermore (ほかにはない、もはやない) を反復している。ポオ自ら、「快感は専ら同じことの反復という感じから引き出される」として「畳句」の効用を語っている(篠田一士訳「構成の原理」『ポオ 詩と詩論』1979) が、飯野友幸は、それを「繰り返しの詩学」と呼んでいる(『エドガー・アラン・ポオの世紀』2009)。キェルケゴールも「反復」は得意技である。この反復が詩にリズムを生むことは明らかで、キェルケゴールが自らの文章を黙読よりも朗読してほしいと願ったのも、理由はこのあたりにあった。そして、この反復リズムが継続するうちに、次の抽象的で不可解な文が飛び込んでくる。そこに「飛躍」や「逆説」の妙が感じられ、イロニーやユーモアの気分が醸成されるとともに、「魔術的」なものも醸し出されてくるとというのがキェルケゴールの詩文の特徴なのだと私は思う。

詩人の中の詩人と呼んだシェークスピアへの傾倒とともに、キェルケゴールが『あれか、これか』の第二部で A 氏(作家即ちキェルケゴール)に「自分は人生の一切を負っている」とまで言わせているモーツァルトがキェルケゴールの文章に強い音楽性をもたらししていると説く研究者もいる(高藤直樹『キェルケゴール思想へのいざない』1996)。たしかに、詩と音楽との関係にも興味深いものがある。キェルケゴールとの親縁性が高いウナムーノは多くの詩を書いたが、音楽がしばしば人間の悲劇的感情を偽って抽象的な諧調の中にその苦悩を揚棄することがあるとの理由で詩から音楽を排除しようとした(佐々木孝『情熱の哲学 ウナムーノと「生」の闘い』2018)。この音楽排除の理由が、キェルケゴールの詩人嫌悪の理由に酷似しているところが実に興味深いのである。

ところで、キェルケゴールの使った「詩」という語には Digt と Poesi の二つがある。キェルケゴール研究所(Søren Kierkegaard Forskningscenteret)の SKS の資料ファイルの

Ordkonkordans で検索すると、Digt(e)が使われているのが 169 文に対して Poesi(er)は 33 文であった(Digtning(er)は 74 文)。また形容詞では、digterisk(e)が 298 文、poetisk(e)は 322 文であった。これらは勿論出現回数の全てを示すものではないが、傾向として名詞では圧倒的に Digt、形容詞では逆にわずかながら poetisk が多く使われていることが分かる。これに関して、フェミニストにしてキェルケゴール研究者の Sylvia Walsh(1937-)はその著 *Living Poetically* (1994)において、キェルケゴールは Poesi を「詩を書くわざ」(the art of writing a poem)に限定して使用し、Digtning(=det digteriske)は創造的な書き物・作文(creative writing or composition)を指す用語として使っていると説明しているが、私はむしろ逆とまでは言わないが、Walsh 自身も認めているように、決定的な違いはないと思う。この点に関して Niels Kofoed(1930-2016)は、Paul la Cour(1902-56)の”Fragmenter af en Dagbog”(1948)から「彼(la Cour)は Poesi を Digt と同等には語らない。Poesi は、人間の全存在を浸透する力である。…Poesi は Digt に先立つ状態である。…Digt は本質的に Poesi 以下のものであるという考えを固持するならば、…」(拙訳)と引用してきて、次のように言う。

詩作品(digterværk)は、Digt が Poesi の犠牲にならなければならないのと同様に、詩人との関係においては全く無視されるものである。重要なのは人間としての姿勢である。Poesi が人間の精神状態の変化を実現するならば、Poesi はまさにそのことによって宗教に等しい。Poesi が人間と世界を救うことが出来るならば、私(la Cour)の Digt など何の意味があろう。(Niels Kofoed *Grundtræk af en europæisk poetik* 1994 拙訳)

キェルケゴールにあっても、こちらの方が近いのではないかと、私は思う。Digt は、一篇の詩そのもの、Poesi はそうした詩を創り出す源泉ではないか、と。キェルケゴールにおいて、Digt が Poesi に比して圧倒的に多いのは意外な感じがするが、これはキェルケゴールの詩人(Digter)の詩作(Digtning)に対する過剰な反発が多用を結果しているのではないか。poetisk が digterisk と拮抗しながらもわずかに超えていることで辻褄が合うような気がする。Digt を創る源泉を、彼は det poetiske で表現しているのではないだろうか。

もう一つ気になっていることがある。デンマーク語の digt を辞書で引くと、「作りごと」「作り話」「でっち上げ」という語釈があることである。「詩」が空想・想像・夢想・フィクションなどと無関係ではないことを思うと不思議はないのだが、世界各国語の「詩」にも、このようなネガティブな意味があるのだろうか。もし北欧語に際立つ特徴だとすると、キェルケゴールの愛憎相半ばする対詩・詩人観を考える上でも留意しておく必要があるのではないか。「詩と真実」などと言う時の、「真実」の対極にあるネガティブな意味でのフィクション・嘘としての「詩」。そういう詩を吐く詩人をキェルケゴールは嫌ったのではないか。そのことは、次章に引く数々の彼の発言からも容易に窺えるのである。

キェルケゴールの詩(1)をほぼ時系列的に見てきたが、はじめに立てた問い、キェルケゴ

ールは詩を書かなかったか、キェルケゴールは詩人ではなかったか？の答えは明らかであろう。キェルケゴール研究者 Loius Mackey(1926-2004)がその著 *Kierkegaard: A kind of Poet*(1971)において、詩人でしかなかったというニュアンスのある文章を書いている。

要するにキェルケゴールは、自分の著作のために詩的な広告を出すような哲学者でも神学者でもない。トマス・アクィナスというよりもはるかにダンテに近く、基本的な指向が哲学的で神学的な詩人なのだ。彼の著作は、最も理論的なものでも三段論法ではなく比喩である。彼の思想の統一性と一貫性は、論理的に曖昧さのある暗喩的なものである。(拙訳)

3. キェルケゴールの詩(2) — キェルケゴールにとっての詩

いわゆる詩は一篇も書かず、多くの詩文・詩句・詩語を随所に鏤めた作品を生み、最晩年まで詩人と呼ばれることを嫌い、詩人を排撃しながら自らを「ただの詩人」と言い、後世「詩人哲学者」などと書かれたキェルケゴールという人は、「詩人」ではなく、やはり「変人」かもしれない。この章では、そんな彼の詩に対する考え方の変遷について考察する。

ただ、キェルケゴールには「詩」そのものに対する明確な態度表明は極めて少なく、その対象はもっぱら「詩人」に向けられる。詩をその作者から切り離して批評するのではなく、作者の詩に対する主体性を重んじる 19 世紀ロマン主義時代の傾向が反映しているようにも思われる。したがって、ここでも主として「キェルケゴールにとっての詩人」という観点からの考察となろう。

キェルケゴールの詩に対する考え方、いわば詩人観の変遷には複雑なものがある。時期により、作品により、変化しているようでもあり、一貫しているようでもある。ここでは便宜上、(i)最初期(～1842 年)、(ii)前期(1843～44 年)、(iii)中期(1845～48 年)、(iv)後期(1849～52 年)、(v)最終期(1853～55 年)に区分して考察したい。なお、Sylvia Walsh は、キェルケゴールの著作活動期間を 3 期に分けて、詩概念の発展を「宗教的な領域での軽やかなダンス」→「詩的なものからの離脱?」→「宗教的詩人」として叙述している (*Living poetically*) が、私は期間区分でも詩観の解釈でも、かなり見解を異にする。

(i)最初期 — 『今なお生ける者の手記より』(1838)～『イロニーの概念について』(1841)～『ヨハネス・クリマクス』(1842)

『今なお生ける者の手記より』(1838)は、キェルケゴールの処女作であり、最初のアンデルセン批評となった作品である。アンデルセンの『ただのヴァイオリン弾き』(1837)を批評しながら、自己内対話をしている感のある作品である。詩との関係では、詩の発展形式である抒情詩→叙事詩→劇詩について述べ、アンデルセンには叙事詩が無いと批判していること、叙事詩というものには人生観が必須であることを強調するくらいである。アンデルセンの作品を人生観や天才論の観点から批判するのだが、最後には、これはアンデルセンに対する同情のインキで書いたという不思議な言い回しで締め括る。その文体は難解で非詩的であること甚だしく、ブランデスはじめ多くの人に批判され、アンデルセン自伝によると「当

時人々は、この著作をはじめからしまいまで読んだ者は、キェルケゴールとアンデルセンだけだろう、と言っていたらしい。Johan de Mylius(1944-)が、『今なお生きる者の手記より』を評した論文の最後で次のように書いているのは注目される。

この書評は断じてアンデルセンのこきおろしと見られるべきではなく、大部分がアンデルセンを「政治というあらゆるものを抱き込んでやまない悪魔のようにがむしゃらな貿易風」から救い出そうという試みであるということである。この書評はしたがって、この小説をもって入り込んで行くかに見えるその道を歩み続けてはいけないとのアンデルセンに対する忠告として読まれるべきである(T. Aagaard & Pia Søltoft 編 *Den udødelige Kierkegaard læst værk for værk* 2006 拙訳)。

Mylius はまた、このキェルケゴールの文学批評を、まるでのちのニュークリティシズムのようだと書いているが、キェルケゴールの批評には的外れや人格攻撃のようなところもあり、到底その名には値しないと思う。第一、上のような読みかたをすること自体、自らの主張を裏切っているように思われる。

『イロニーの概念』(1841)は、キェルケゴールの学位論文であり、「たえずソクラテスを顧みつつ」というサブタイトルが付いているように、敬愛するソクラテスをイロニーの立場と規定してその功績と限界を論じ、ドイツロマン主義の立役者たち(F. シュレーゲル、ティーク、ゾルガー)のロマン的イロニーについても一定の長所を見ながらも厳しく批判の矢を向ける。F. シュレーゲルの『ルツィンデ』を論じたところでは、こう書いている。

そのかぎりにおいて詩は一種の宥和である。しかし、それは真の宥和ではない。…この宥和では与えられた現実の変質は起こらず、むしろ詩は別の現実、より高き、より完全な現実を私に与えることによって、私を与えられた現実と宥和させるからである。…それゆえ、本来的には、宗教的なものこそが、はじめて真の宥和をもたらすことができる(飯島宗享ほか訳)。

こうして、この最初期には、キェルケゴールの詩・詩人に対する主体的な考え方、態度表明というよりは、他の作家の作品の分析、批評が主であり、自らの考え方や態度を創り上げて行く途上と見られ、詩・詩人への見方はどちらかというと共感的でポジティブである。1840年夏の『ユラン旅行中の日記』にはこう書いている。「詩的なもの(det poetiske)というのは、人間実存にある神的な横糸(islæt 基礎要素)だ。神が実存を把持するのに用いる繊維なのだ」(SKS19 NB16 拙訳)。

(ii)前期 — 『あれか、これか』(1843)～『反復』(1843)～『おそれとおののき』(1843)～『哲学的断片』(1844)～『不安の概念(1844)』

この時期のキェルケゴールの詩人に対する態度には、『あれか、これか』(1843)の「ディアップルサルマータ」冒頭の節に見たように、すでに屈折したものが感じられる。だが一

方で、『反復』(1843)における詩人である青年に対するコンスタンティン・コンスタンティウスの接し方や考え方に現われているように、共感的なところも十分にある。

…わたしが創り出したあの青年、あれは詩人なのです。…わたしが詩人になることはできません、…わたしは、純粹に美的な、そして心理学的な見地から、わたしの課題をはたしました。わたしはただ一個の善鬼にすぎず…彼に対して無関心なのではけっしてない…(梶田啓三郎訳『反復』)

これについて Villy Sørensen(1929-2001)は、「詩人はキェルケゴールの哲学では空想の中で可能性と戯れ、空想を現実のものとはしない人間である。詩作はキェルケゴールにとって審美的なものであり、倫理的な活動ではない。だがしかし詩人は一般の審美家ではなく、いわば例外なのだ」(拙訳 *Sørensen om Kierkegaard* 2007)と解説し、Mads Bunch は、*Isak Dinesen Reading Søren Kierkegaard*(2017)においてカーアン・ブリクセンの「詩人」を『反復』と比較し、両書における反復・対応する登場人物・詩人性／観の異同を論じている。Aage Henriksen(1921-2011)も、*Kierkegaards Romaner*(1969)において、青年とコンスタンティン・コンスタンティウスとのこの微妙な関係をテキストの構造から読み解こうとしている。

「弁証法的抒情詩」というサブタイトルを付す『おそれとおののき』(1843)において、次のように言っているところからも詩に対する二面性が感じられる。

詩人というものは、自分には表現できない小さな秘密を代償にして、自分以外のすべての人の重い秘密を表明することばの力をあがなうものだからである。それに、詩人は使徒ではない。彼はただ悪魔の力によってのみ悪魔を追い出すにすぎないのである。(梶田啓三郎訳『おそれとおののき』)

これら三つの作品からは、詩・詩人に対するキェルケゴールの共感的にして反感的な感情が混淆しており、その中において思想的にも審美的～倫理的～宗教的と徐々に進化してゆく様子が窺える。これらから宗教的なものへと確かな一步を進めた成果が『哲学的断片』(1844)『不安の概念』(1844)に現われているようである。だが、前者の第二章「教師および救い主としての神」には”一つの詩的な試み”との括弧書きが付されているし、後者は恩師にして詩人・哲学者の Poul Martin Møller への詩的な献辞が付されているのである。

(iii)中期 — 『人生行路の諸段階』(1845)～『哲学的断片後書』(1846)～『文学批評』(「現代の批判」を含む。1846)～『アドラーの書』(1846)～『単独者』(『視点』の付録として。1847)～『愛のわざ』(1847)～『著作家としてのわが活動に対する視点』(1848)～『危機および女優』(1848)

情熱なしには詩人はありえないし、情熱なしには詩(Poesi)はありえない。……詩

は直接性にかかわり合うものであるから、二重性を考えることはできない。(佐藤晃訳『人生行路の諸段階』)

詩人はやはり苦悩を受けとめることをしないのだ。詩人は苦悩のどん底にまで身を沈めてこれに徹しようとはしない。…詩人が詩人であるかぎり、彼は宗教的立場にうって出て苦悩の奥義を受けとめようとはしないからである。(杉山好・小川圭治訳『後書』)

詩人とは幸福と絶望の両極で無限の想像力の情熱を激情をもって受けとめ、この奔馬をみごとに乗りこなすすべをこころえ、こうしてもろもろの有限なる情熱といっさいの俗物根性とを痛快な喜劇精神をもって自由自在に翻弄することのできる人間である。」(同上)

詩人であるかぎりキリスト者ではない。…詩人とキリスト教とは、まるで正反対の関係にある二つのことを説明するものである。あるいは、さらにいっそう厳密に表現すれば、詩人というものはそもそもなにものをも説明しない。(武藤一雄・芦津丈夫訳『愛のわざ』)

美的著作はもちろん詐術には違いないが、他の意味ではそれはやむにやまれぬ排泄であった。宗教的なものはすでに最初の瞬間から確固として存在しており、決定的に優位を保っている。だが辛抱強く詩人がすっかり話し終わるのを彼は待っている。その時詩人のたぶらかしにかかって全体が詩人化してしまわないように彼はアルグスの眼をもって見張っているのだ。(田淵義三郎訳『著作家としてのわが活動に対する視点』)

この中期においては、詩・詩人に対する態度は共感よりも、キリスト教との対比において極めてネガティブな口調が目立っている。『視点』(1848)では、詩を排泄し切って詩人から脱出しようとしたことが言われているが、それは『あれか、これか』の当初からの思いであったことが告白されている。Niels Kofoed は、キェルケゴールをグロントヴィと比較して

グロントヴィは、詩的なものを刺激的な要素としてキリスト教の中へ導入する。キェルケゴールは、それを古い生活態度の痕跡だとして忌避する。このことによって彼は首尾一貫したプロテスタント神学者となった。(Grundtræk af en europæisk poetik 拙訳)

と言っている。『視点』の付録『単独者』(1847)では「彼(著者)は詩人であるにはあまりに倫理的なものとなつたところが深かった。…しかもなお彼は真理の証人であるためにはあまりにも詩人であり過ぎる」とあって、いまだ詩人から抜け出せない葛藤を告白している。

ここに言う「単独者」は、コルサール事件を経験して得た、「わたくしの読者と呼ぶあのひとりの人」の発展形であり、「すべての人々のうちのただこの一人を意味するとともに万人を意味することができる」(田淵義三郎訳『単独者』)とされる。

(iv)後期 — 『野の百合と空の鳥』(1849)～『死に至る病』(1849)～『武装せる中立』(1849)～『キリスト教の修練』(1850)～『金曜日の聖餐式における二つの講話』(1851)『自己省察のために』(1851)～『自らを裁け』(1851-52)

詩人には福音と意を通ずることがどうしてもできない。その理由は、もともと詩人の生活の根底には、願望したものになれるかどうかという点をめぐって、絶望が潜んでいるからである。…詩人は永遠性の申し子である。だが、永遠性の厳粛さが彼にはない。…きわめて厳粛なのが福音であるから、詩人のいかなる悲愁も福音を変化させうるわけがないのである。(尾崎和彦訳『野の百合と空の鳥』)

キリスト教的に見ると(美学がなんと言おうとも)、詩人の生き方はいずれも罪である、存在するかわりに詩作し、空想によって善と真とにかかわるばかりで、善や真であろうとしない、すなわち、生き方として善や真であろうと努力しない、という罪なのである。(梶田啓三郎訳『死に至る病』)

この同時性が信仰の前提である。もっと厳密に言えば信仰そのものである。…同時性こそ、詩と現実を区別するものである。詩と歴史の相違は、歴史が現実が起こったできごとであるのに対して、詩は可能性、空想、創作という世界の産物であるところにある。(杉山好訳『キリスト教の修練』)

詩人であるとは、どういうことか？ それは、自分自身の個人的生活を、自分の現実を、自分の詩的作品とはまったく違った範疇のうちにもつことである。すなわち、理想に対して想像の中でのみ関係することで、したがって、自分自身の個人的な生活は、多かれ少なかれ、作詩に対する、また自分自身に対する風刺となる。(梶田啓三郎訳 SKS21 Journalen NB9. 1849 年 1 月 2 日)

わたしは一般の詩人よりもはるかに、はるかに遠くへ乗り出した。これも、キリスト教というものを、キリスト者たることの理想を、課題とするためには、必要なことだったのだ。詩人の歌のなかには、彼自身の不幸な恋の溜め息が反響しているように、キリスト者たることの理想に関するわたしの熱狂的な講話すべてには、ああ、わたしはキリスト者の理想ではない、わたしはただキリスト教的な詩人にして思想家でしかない(jeg er kun en christelig Digter og Tænker)、という溜め息が反響していることであろう。(梶田啓三郎訳 SKS21 JournalenNB10. 1849 年 4 月 25 日)

『あれか、これか』に始まり、順々にすすんできた著作活動は、ここ祭壇のもとに、その最後の休息の場を求めている。ここに著者は、個人的にはみずからの不完全さと負い目とを誰よりも最もよく自覚しており、断じてみずからを「真理の証人」(Sandheds-Vidne)と呼ぶのではなく、ただ独自の流儀をもつ一人の詩人にして思想家(kun en egen Art Digter og Tænker)であると称するにすぎない。(小林茂訳『金曜日の聖餐式における二つの講話』SKS12)

この時期は、キェルケゴールにとって公私ともに重要な年であった。実名および自分より上位の比類なきキリスト者だとするアンティ・クリマクスの仮名で哲学的・宗教的に到達した最高峰の作品『野の百合と空の鳥』『死に至る病』『キリスト教の修練』を著し、一般的な意味での詩・詩人からは脱却するとともに、教会攻撃の準備を進めた時期であった。上に引いた日記等に見るように、この頃から何度も“jeg er kun en Digter”が繰り返される。自らが憎んで振り捨ててきた「詩人」を、また自らに用いるのかと思わされるかもしれない。だがこれは、(天性の)詩人を彫琢して成った(文学的)詩人を駆逐して行き着いた(宗教的)詩人である、と私は考える。同じ1849年の日記には、

詩的なもの(et Digterisk)が必要なのだ。詩的なものにおいて、キリスト教は人間的なものを超えた高さで正しく表現される。(SKS22 Journalen NB14. 132 拙訳)

とある。

一方では自らの詩才を開花させたレギーネとの恋を追憶し、記録に留め、清算した時期でもあった。1849年の日記には「彼女との関係」(Mit forhold til hende)や「彼女について」(Om hende)の見出しが付された記事が頻出し、8月24日の日付のある独立したノートに認められた「彼女に対する私の関係」には日付のあとに“少し詩的に”(Noget digterisk)という句が添えられてある。「建徳的講話」にも詩的な味つけが必要と考えたキェルケゴールとしては恋の記録に対してそれをするのは当然のことではあろうが、その内容の事務的正確さとの対照が印象的で、私にはいわく言い難い感慨をもたらす。レギーネとの出会いから14年、別れから8年、牧師への道も断念したキェルケゴールの戦支度であったのであろう。

(v)最終期 — 『最後の戦いのための新聞諸論文』(1854年12/18-)～『瞬間』(1855年5/24-9/24)～『これは言っておかなければ』(1855)～『国家公認のキリスト教に対して』(1855)～『神の不変性』(1855)

1855年は、キェルケゴールにとって人生最後の年、キリスト教会攻撃の年となった。この期の主著は『瞬間』第1～9号(第10号の出版は、彼の死後1906年)であるが、その間を縫っていくつかの新聞記事や講話書も出されている。この『瞬間』は極めて激しい攻撃の書である。コルサール事件を経て、キリストに倣い、キリストとの同時性を体現し、真のキリスト者となって、迫害に抗して殉教することも辞さないとする単独者の戦いは、国民教会と

なり国家の保護を受けながら、ぬくぬくと「キリスト教ごっこ」の惰眠を貪っている教会とその首領に向けられた。もうこの書には詩的な美しさは無い。詩との関連では、第7号(8/30)の第1項が「なぜ『人間』は、とりわけ『詩人』を愛するのか？そしてなぜ神的な意味では、『詩人』が最も危険なのか？」という問いかけになっているくらいである。この問いに答えて行く文章は実に激しい。人間が詩人を愛するのは、詩人が人間にとって最も危険なものだから。病人が時に有害なものを欲しがるように、妄想と自己欺瞞の中にある人間たちにとって、詩人はその状態にとどまることを許してくれるのに役立つ詐欺師だから。詩人は、想像力にのみ関係する。詩人は、人間に対して偽善者を演じることができる。そして、

詩人が神的な意味では最も危険だということは、やはり完全に真だというわけではない。詩人は実際、自分は詩人に過ぎない、と言う。はるかにもっと危険なことは、詩人にすぎない者が牧師と称されることで、詩人よりもはるかに真剣で真実な者だという外観を自らに与えているが、その実詩人に過ぎない、という点なのだ。これは二等級の偽善である。(近藤英彦ほか訳『瞬間』)

他にも、「牧師は人食い人種であり、しかもそのやり方は極悪である」などといった極言も出てくるこの書は、たとえば悪いが、その必死と激烈を太宰治の「如是我聞」と共有しているかに思えるほどである。(太宰も、これを書いて間もなく命を絶った)。

このように、「詩人」を断罪しながらも、自らをただの「詩人」と繰り返すのである。たとえば、1854年にも、Man erindre, hvad jeg atter og atter og atter har gjentager, jeg er uden Myndighed kun en Digter(SKS27 Papir)

1855年にも、jeg er det, hvad jeg atter og atter har gjentaget og atter gjentager: jeg er kun en Digter(SKS14 Bladartikler)

『国家公認のキリスト教に対して』(1855)では、キリスト教界を断罪するに至った経緯を「詩人」という言葉を使って説明している。「自分が詩人として出発したのは、教会人と仲良くして事情を探るためであった。次いで、この詩人は突然変身した。ギターを投げ棄てたのである。そして、新約聖書を持ち出して自分の名で語りだした。「キリスト教ごっこ」をしている教会の偽善を摘発するために」(大谷長訳より)。

1848年の『視点』では、教会攻撃に入る前の、まだ牧師への道を捨て切れないでいる頃の事情として、このあたりのことがより柔和な調子で書かれていた。

私の真の著作活動の開始以前に一つの事件、あるいはいっそう正確に言えば一つの事実が横たわっている。…このことがおそらく、若々しさの代償として私は詩人となった。それは第二の青春であった。私は詩人となった。…事実が私を詩人にした。…私は詩人となり、そして多分幾年か後には宗教的なものと関わりをもつようになったであろう。(田淵義三郎訳『わが著作活動の視点』)

と言いながら、キリスト教界においてより高いものや理想に奉仕するために神のスパイ(Spion)として生きることを宣言していたのであった。なお、ここに言う「一つの事件」とはもちろんレギーネ事件を指す。レギーネ事件が自分を詩人にした、という率直な発言はここが初めてで唯一のものではないか(?)と思う。

以上、キェルケゴールの生の発言を出来るだけ多く拾いながら、彼の詩・詩人観を見てきた。詩才に恵まれた生まれつきの「詩人」、レギーネとの出会いと別離を経て審美的・文学的な優れた著書(詩文)をものした通常の意味での「詩人」、それを虚偽として脱したところに見えてきた宗教的な「詩人」、だがその段階になっても自らの非宗教的な書き物に「詩的に」という言葉を付けたがる「詩人」、牧師＝詐欺師＝詩人とも呼ばれる「詩人」、Jeg er kun en Digter と反復される「詩人」。これら「詩人」たちがそれぞれどう違うのか、どのように関連し合っているのか、どのあたりで変化したのか、キェルケゴール自身には明確になっているのであろうが、私にはなかなか分かり難いところがある。例えば、Jeg er kun en Digter は、1849 年頃から、特に 1851 年頃から日誌の中で頻繁に繰り返されるのだが、「ただの詩人」と名乗るまでの彼は、自らを詩人と公言しないばかりか詩人を否定的に批判する「隠れ詩人」(神のスパイ)だったと言っているのだろうか、また kun en Digter は 1854-55 年に牧師を詐欺師・人食い人種の詩人と罵倒するときの自らの在り方まで含んでいるのかどうか。私は、これらの疑問にも確たる答えが出せないでいる。さらには、kun en Digter と繰り返しながら、一方で教会を口汚く攻(口?)撃する彼に宗教的詩人の名は相応しいのであろうか。詩人とキリスト教は真っ向から対立するものだと主張してきたのがキェルケゴールであってみれば、詩的なものをそっくり削ぎ落した姿は「詩人」と言えるのだろうか。「クリスチャン」が遠慮されるのなら「求道者」や「宗教的思想家」でもよいではないか。何故「詩人」という呼称にこだわるのか。「詩」無き「詩人」になっていた最晩年のキェルケゴールの自負(誇り)と自嘲(謙遜)の自称が kun en Digter でなかったか。ギターを投げ棄てた後もなおキリスト教のために声をあげずにはおれなかったのだ。彼の kun en Digter を Mackey のように文字通り a kind of poet と単純に解釈するのは言い過ぎであり、「真善美に思いを致す」という詩の定義の核心だけは固持した姿ではあったと確信する。

では、これまでの「キェルケゴールの詩(1)(2)」から見て、キェルケゴールは詩人哲学者だったと言っているのだろうか。それとも哲学詩人だったのか。詩と哲学が「真善美に思いを致す」点において強く共通することを思うと、にわかにはいずれとも決め難いが、やはり詩的表現を随所に交えて哲学を説いた詩人哲学者ということになるであろう。決して哲学を詩に詠った詩人ではないからだ。キェルケゴールは、自らが書いた詩文によって詩人哲学者と呼ばれることになったのは勿論であるが、それ以上に詩・詩人への対決の宣言、さらには自らの詩人性との葛藤の表白によってそう呼ばれることになったのではないかと逆説的に私は思う。kun en Digter は、その争闘の果ての未だ消えやらぬ残り火のような眩きにも聞こえるのだ。

もう一つ、私には、はっきりと分かることがある。レギーネが詩であったということである。キェルケゴールは、レギーネに恋して詩人となったが、神の怒りにふれてレギーネを捨

てた。ということは詩を捨てたということになる。だが、実際にはどちらも捨てられなかった。「男は、手に入れた乙女によって詩人になるのではない…手に入れられなかった乙女の助けで詩人になるのだ」(SKS6 *Stadier paa Livets Vei* Victor Eremita のせりふ、拙訳)からだ。神への信仰が深まるにつれても、いや、深まれば深まるほどレギーネ即ち詩への思いはついに断ち切れなかったのだ。あの頃、「もし私に信仰があったなら、レギーネのもとに留まっていただろう」(SKS18 JournalenJJ 1843 年 5 月 17 日)と書いていた彼なのだ。レギーネとのしがらみ、詩との相克がキェルケゴールの宿命だったのだ。私は、キェルケゴールを稀に見る言行一致の人と信じているが、ただ一つ、しかも大事なところで、即ちこのレギーネと詩に関しては、酷なようだが彼の言行不一致を指摘せざるを得ない。それがキェルケゴールの分かり難さであり、悩ましさであり、魅力でもあるのだ、と思う。

キェルケゴールと同じように、生や実存に関わった哲学者たちに詩人が多いのも、人間存在に主体的に関わり、したがって「真善美に思いを致す」ことを当然と考えるに違いない彼らのことを思えば頷けるところである。**グロントヴィ**は、ランゲラン島でのコンスタンス・レスへの恋で詩人となり、北欧神話や祖国愛を歌い、多くの讃美歌を書いて教育者としても大成した。**マルクス**は、若き日に恋人イエニーに贈った「歌の本」など多くの抒情詩を書いたが、一転して学問の世界さらに社会変革活動の世界へと進み、イエニーとともに激動の生涯を送って、歴史に大きな足跡を残した。**ニーチェ**は、はじめ詩を哲学の下に見る傾向があったが、「詩人の天職の自覚」の後、ルー・サロメと愛し合いながら、精神に異常をきたすまでの間に多くの抒情詩と『ツァラトゥストラ』などの思想詩的作品を著した。**ウムナーノ**は、27 歳で年来の恋人コンチャと結婚、36 歳(1900 年)の頃にブランデスの作品を通じてキェルケゴールに出会い、43 歳のとき初めて『詩集』を出版。彼にとって哲学者は詩人と重なるその部分においてのみ真に創造的哲学者であった(佐々木孝『ドン・キホーテの哲学』1976)。**ハイデガー**は、死への時間・存在とも言うべき人間存在の研究から始め、のちにはヘルダーリンに心酔して、存在の彼方にあるその故郷への帰郷へと思索を進め、「野の道」「ヘーベル」などの美しい詩文をものした。**ハンナ・アーレント**とはナチズムを挟んでの美しくも苦しい恋愛をした。また、実存哲学者といえば、アーレントの師でもあった**ヤスパー**スを忘れることは出来ない。彼には詩作はないが、運命の女性ズゼッテとの悲恋でも知られるヘルダーリンに関して「ゲーテの詩は他の詩人の作品と比較することができる。しかしヘルダーリンの詩は、他のいかなる作品とも比較することができないという言葉を残している」(川村二郎『ヘルダーリン詩集』)。そして、**サルトル**。人間の自由を何よりも重視したサルトルは、作詩こそしなかったがボードレール、マラルメ、ジュネの生き方を論じた作品を書き、詩人の自由な想像力を借りて平等な社会の実現にアンガージュしようとした。その傍らには常にボーヴォワールがあった。

このように見てくると、キェルケゴールを含めて、詩と(実存)哲学と女性に関係に改めて目を奪われる。彼らには総じて、詩や詩人を敬愛し、学び、自らも作詩して、楽しむところがあった。キェルケゴールと踵を接するように生きて、三人で 1813 年から 1923 年までの 110 年をカバーした二人の女性詩人、エミリー・ディキンソン(1830-86)とエーディット・

スーデルグラン(1892-1923)にこんな詩がある。

.....

イサクはながらえて/息子たちにその物語をした/教訓 — マスチフ犬には/態度
がきめ手になる (新倉俊一訳ディキンソン『詩集』no.1317.『エミリー・ディキン
ソン 不在の肖像』より)

.....

神は無と宇宙とのあいだの空席のブランコ/神は自由な魂すべての監獄/神は憤怒
の手が奏でる豎琴/神は憧れが地上にまで引き摺り下ろせるもの (田辺欧訳スー
デルグラン『詩集』「神」 『待ちのぞむ魂』より)

あのアブラハムの物語を詩に詠いながら、最後に神をマスチフ犬と呼んでパロディにして
しまうディキンソン。一神教の敬虔に囚われず、神を自在に彩り操るスーデルグラン。せめ
てキェルケゴールにも時にはこのような奔放な発想をしてほしかったと無いものねだりを
してみたくなる。キェルケゴールには、詩人たることを手放して喜び誇る表現が皆無である。
その根底にはキェルケゴールの神観念の特異さがあり、キェルケゴール・神・レギーネ(詩
の女神)の三角関係が大きく影を落としているからではないかと思う。このことは、12年後
の婚約記念日 1852 年 9 月 10 日に記した彼の日記記述からも窺える。

彼女が私の人生に第一の優先権を占めてなんかいないんだということがしみじみ
と真に迫って思い返された。…神が第一優先権を持っているのだ。彼女との婚約そ
して破約は、つまるところ私の神関係であり、敢えて言うならば、神的には私の神
との婚約である。(SKS25 Journalen NB27 d.10 September 拙訳)

4. キェルケゴールの詩(3) — キェルケゴールを詠った詩

つい最近まで、2013 年に粕谷の「啓示」を知るまで、キェルケゴールのことを詠った詩
のあることを知らなかった。デンマークではいつかどこかで誰かが詠っているはずだと思
いながらも、探しようもなく打ち過ぎた。ところが、あったのだ。やっと見つけた。何冊か
まとめて買ってあった本の中に。その本の名は、*Kierkegaard når han er bedst - og værst*
(redigeret af Joakim Garff 2013)。その詩人の名は、意外(?)にも Benny Andersen。デンマ
ークの国民的詩人、あの「スヴァンテの歌」の作者だ。この本は、二十九人の、作家をはじ
め多彩な文化人がキェルケゴールについて語るエッセー集である。その最後に、”Da Søren
Kierkegaard reddede mit liv” を書いていたのがベニー・アナスンだった。「キェルケゴール
に救われた」というのだから尋常ではない。エッセーは、彼の最近の詩集 *Nu og da* (2011)
からの詩”Ude af mig selv”を紹介するところから始まる。ロバート・フロストの詩の定義「詩
とは、翻訳で失われるものである」に恐れをなしつつ訳してみる。

Ude af mig selv

Af og til kan jeg blive helt ude af mig selv
ved at læse om onde, uretfærdige misgerninger
ved at høre om meningsløse mord
kynisk korruption
stening af uskyldige kvinder
mens voldtægtsmænd går fri
men når jeg omsider får hidset mig ned
er jeg nær ved at hidse mig op igen
for selv om jeg nu er mig selv igen
hvor pokker var jeg da
da jeg var ude af mig selv?
Da tyr jeg altid
til min mentor Søren Kierkegaard
Han skriver et sted, at
"Individet har sig selv uden for sig selv i sig selv"
Jeg har aldrig fattet den dybere mening
med dette uforglemmelige udsagen
men det har en beroligende virkning på mig
endelig kan jeg læne mig tilbage
og skåle med mig selv:
"Velkommen igen, du gamle!"

われを忘れる

ときに私はわれをわすれてしまうことがある
非道不正な悪事のことを読んだり
意味なき殺戮や
世を拗ねたような墮落
罪もない女性を石で撲殺、なのに犯人は
逃げおおせたなどと聞くとときだ
だが私はようやく冷静になっても
再び興奮してしまいそうになる
私はまた再び元の自分に戻るけれど
われを忘れていたそのときは
一体私はどこに行っていたのだろうか？
そんなとき私はいつも助けを求める
わが師セーアン・キェルケゴールに
師はどこかに書いている「人間は自己自身の中に
自己自身とは異なる自己自身を抱えている」と
私にはこの忘れがたいことばの持つ
深い意味はとうてい理解できないけれど
それが私を慰撫するような効果を発揮して
ついにはほっくりと寛げる
そして私自身に乾杯できる
「ようこそまた、おまえさん!」と

アナスンは続ける。キェルケゴールは、成り行きに任せた無きに等しい人生を生きることよりも、「選択すること」(at vælge)「その選択が間違っていたら、やり直せばいい」ことを教えてくれた。自分は1950年代の中頃、作家になる野心を抱いており、Hereticaに詩や短編小説を寄稿していた。Heretica時代、詩は重々しく、尊大でなくてはならず、楽しめるものではなかった。その頃、私は詩集と短編小説集をGyldendal出版へ送ったが、丁重かつきっぱりと拒否され送り返された。私は失望し絶望して奈落の底に沈んだ。そのとき、キェルケゴールの「選択」がよみがえった。私はすでに自殺するか、もうあまり多くの詩は書かないと誓うかの二者択一の選択を考えていた。かなり自殺に傾いていたが、考え考えするうちに、もしここで自殺したら、その選択が正しかったのか、間違いであったのか、分からずじまいになるではないか。こうして、あまり多くの詩は書かないことにしようという方を選択した。その選択は、ある意味で正しく、やがて間違っていたとも思えるものだった。私は、生きることの喜びを見出すようになったが、それが溢れる活力となって、詩を書くことを止められなくなったのだ。そうして書いた詩は、Heretica調とはかけ離れたアイロニーと自

己皮肉に溢れるものだった。「批判的なカエル」("Den kritiske frø"),「不確かなチョウチョ」("Den usikre sommerfugl"),「無情のトカゲ」("Det forhærdede firben"),「音楽好きのウナギ」(Den musikalske ål)。最後に挙げた詩は、1960 年に出した最初の詩集のタイトルにもなった。こう語ったアナスンは、「あれから半世紀が経過したが、私のキェルケゴール愛があせてはいないことを証明するために、詩集『この行くもの来るもの』(*Denne kommen og gåen* 1993)から次の詩をお見せする」と締め括っている。

Kierkegaard på cykel

Noget er smuttet med tiden
meget var næppe værd at huske
men jeg husker som i går
skønt det er over en uge siden
Søren Kierkegaard kommer cyklende
vent lidt så må det være cirka
150 år siden
Da var jeg vist ikke født
Men never mind
han kommer cyklende ned ad Hjortekærvej
og jeg på vej op
så vi stod af og fik en lille snak
nu vil nogen indvende
at dengang var cyklen ikke opfundet
men sligt anfægter ikke store ånder
og han kunne være noget distræt til tider
Lidt forpustet gav han sig til at illustrere
hvad han lagde i begrebet Gjentagelsen
som han stavede med J, altså Gjentagelsen:
Den stadig gentagne brug af pedalerne
fik hjulene til at dreje rundt
det var så at sige gentagelsen
der drev værket
og øgede lysten til at komme nye steder hen
eller genopleve velkendte steder
Men det mest geniale ved cyklen var
at man kunne begge dele på en gang
man sad på samme sted
og kunne ved hjælp af gentagelsen

キェルケゴールが自転車で

時間とともに過ぎ去ってしまったものがある
思い出す価値のないものは多かったが
昨日のことにように憶えている
あれから一週間以上になるのに
セーアン・キェルケゴールが自転車で
待てよ、だってずっと
150 年も前のことじゃないか
僕はまだ生まれていなかった
でも心配は無用
彼は自転車でヨーデケア通りをやって来て
僕は行くところだった
そこで二人は自転車を降りて立ち話をした
誰かが異議申し立てをするだろうか
まだ自転車は発明されていなかったと
だがそんなことでは大きな精神は動かせない
彼はときにやや放心したように見えた
ちょっと息を切らしながら話し始めた
Gjentagelsen という概念にこめた意味を
彼が j を付けて綴ったあの Gjentagelsen の:
ペダルをたえず反復して踏み込むことで
車輪の回転が生まれる
それがいわば gentagelsen(反復)だ
それが仕事を楽にして
初めての場所へ行ったり馴染みの場所を
再経験する意欲を高めたのだ
しかし自転車の最大の長所は
同時に二つのことができることだ
同じ座席に坐ったままで
反復の力を借りて

flytte stedet med sig	場所を移動することだできるということ
man kunne således cykle fra det indre København	こうしてコペンハーゲンの中心からヨーデケーア、
og helt ud til Hjortekær og Dyrehaven	デュアハウエンあたりまでサイクリングして
og opleve en masse herlige steder undervejs	途中素敵なところを沢山見ることができる
uden selv at røkke sig af stedet	自分は席を動かずに
Ja det var jo længe før man fik TV	そうさテレビまでは時間がかかった
Så smuttede han videre på cykel	だから彼は素早くどんどん自転車を走らせた
jeg så ham ikke siden	僕はそれ以来彼には会わなかった
og slet ikke før	それ以前はまったく会ったことがない
muligvis aldrig	ひょっとすると一度も会ったことがないのかも
men det med gentagelsen husker jeg	だが僕は反復とともに思い出す
og meget kan man sige om Kierkegaard	キェルケゴールについてとやかく言うことは出来るけれど
men manden vidste sgu hvad han talte om.	ほんと彼の語ったことを理解していた男がいた.

これらの二つの詩からはアナスンのキェルケゴールに対する親愛の情が伝わってくるようである。前の詩でキェルケゴールがどこかで言っていたという”Individet har sig selv uden for sig selv i sig selv”を探してみたが、見つからなかった。sig selv が頻出する『あれか、これか』、『死に至る病』を集中的に見たにとどまるので確言は出来ないが、Individet を主語にした”har sig selv”や”har—uden for sig”や”har—i sig selv”はあるのだが、この詩行のような句は無い。「アマーガー平原」探しの二の舞みたいになるが、これもアナスンの造ったフレーズではないかと思う。後の詩は、いかにもアナスンらしい機知というか頓智的な着想が面白い。「反復」のアナロジーとして自転車を持ち出したのが秀逸である。普通の自転車は、ペダルを常に反復回転させないと倒れるし、後方に向かって反復しても進まない。前方に向かって追憶することで、時空を超えたキェルケゴールとの同時性を果たし、一度に二つの場所(サドル上と瞬間ごとの地点)に存在するというアリバイ崩し(?)の妙にほくそ笑みつつ、古きを楽しみ新しきを学ぶ反復の魅力を説いているようだ。夢と現実が緋い交ぜになったような詩の雰囲気の中で、この反復が「魔術的」な効果を発揮しているように感じられる。そして、ああ、私がこの小論を書き始めた 2018 年の 8 月、アナスンは亡くなっていた!享年 88 歳。私は、SAXO に彼の SAMLEDE DIGTE を発注した。

最後に、初めてのデンマーク旅行で詠んだ我が拙き短歌もどきを「キェルケゴールの詩(3)」の一つとして追加しておきたい。(見やすいように、分かち書きにする)

デンマーク 31 日三十一首 — 2004 年キェルケゴールの足跡反復の旅 —

7 月 2 日 (関西空港)

いざ行かむ キェルケゴールが その昔 生きて愛して 逝きしコペンへ

7 月 3 日 (Assistens Kirkegaard)

霧雨の 墓前に立ちて つひにつひに 参りましたよと 手を合わせたり

7月4日 (Knippelsbro)

かの人の 住処のぞみて 彼もまた 立ち尽くししか 橋のたもとに

7月5日 (Nytorv)

哲人の 生地を刻む 銘板も 気づく人なく 広場賑はふ

7月6日 (Hellige Trinitatis Kirken)

堅信礼 受けしその日も 少年は Rundetårn を 見上げしならむ

7月7日 (Reitzel)

足しげく 友と訪ねて 馴染みにし 老舗書店に 2時間過ごす

7月8日 (Vor Frue Kirke)

かの人の 顔きなけれど なれもまた われに來たれと 招くイエスよ

7月9日 (Lis' Hjem)

デンマークの ソクラテスこと Preben かの先輩を 曰く言ひ難し

7月10日 (Vor Frelzers Kirke)

四百の 階登りつつ かの人の 拳式思ふは われのみならむ

7月11日 (Christianshavn)

Kierkegaard? 否 Grundtvig だと 説く男 救世サークルに 入れと誘ふ

7月12日 (Frederiksberg Have)

ありし日の 散策の道 辿るかな 池, 花, 小鳥 喫茶 Josty

7月13日 (Frederiksberg)

運命の 出会ひの街を さまよひて 別離を思ふ 旅人ぞわれ

7月14日 (Hillerød)

見はるかす Frederiskborg 城 かの人の 面影映す 湖の果て

7月15日 (Gilleleje)

記念碑は はたしてありや この先に ギレライエ崖上 不安の小道

7月16日 (Det Kongelige Biblioteks Have)

風渡る 庭の木陰に 本開く 詩人の眼差し もの憂く優し

7月17日 (Holmens Kirke)

かの人の 堅信礼受けし 教会に 初の説教 するも縁か

7月18日 (Københavns Bymuseum)

薄暗き 小さき部屋に あれもこれも 憂愁の心 安らふべしや

7月19日 (Kongens Nytorv)

'a Porta'の 看板かくる カフェありて お茶する人も 好みしく見ゆ

7月20日 (Gyldendal)

若き日を 通ひしラテン語 学校は 彼の本出す 今出版社

7月21日 (Skindergade)

永遠の 別離となりし 街頭は いづくにありや いづくにもなし

7月22日 (Christiansborg Slotskirke)

かの人と 同席もせし 教会に 論敵たちの 残響を聞く
7月23日 (H.C.Andersens Hus)
Andersens Husの主を 市博物館の 人と比べて 穏やかならず
7月24日 (Nyhavn)
伴侶なき 単独者として 住まむには ふさはしからずや 船乗りの町
7月25日 (Helligåndskirken)
かの人と かつて出会ひし 教会に 60 クローネ 均一古書展
7月26日 (Gad)
Strøget 通るたびごと 立ち寄りし 新版全集 出版の店
7月27日 (Vor Frue Plads)
「反復」を 夢見し同じ 教会に 葬りの式を 営まれしか
7月28日 (Kastelskirken)
人魚姫も 耳を澄ますか 教会に こもる真理の 証人の声
7月29日 (Frederiks Hospitals Bygning)
終焉の 地と記さるる 銘板に いまはの際の 思ひ聴かなむ
7月30日 (Den Sorte Diamant)
昼食は 運河を前に 'Søren k' あとコーヒーは 'Øieblikket'
7月31日 (Frederikskirken)
大理石 教会とり巻く 一角に 正装の彫像 夕日浴びをり
8月1日 (Københavns Lufthavn)
懐かしき コペンの街よ 人々よ 反復せむか Vi ses Vi ses

おわりに — 田辺ゼミにて —

拙稿の筆を擱くに当たって、ずっと気にかかっていることがある。川田靖子とその著『詩とは何か』(2014)の冒頭近くで、『若き詩人への手紙』から引いたように記して掲げているリルケの「詩を書く人が詩人になるのではなく、詩人が詩を書くのです」という文言である。(「引いたように記して」と曖昧な言い方をしたが、実際リルケの該書を繰ってみてもこの言葉通りの文章が見当たらないのだ。リルケがいかにも言いそうなことだからこれもそのまま受け取っておく)。これは詩と詩人の関係性について言っているように思われるが、その意味するところは何だろう。この言葉には「詩・詩人とは何か?」の正解が前提されていなければならないだろう。とすると、前段の句はおかしいことにならないか。(正しい意味での) 詩を書いて、詩人にならないわけがないからだ。また、(正しい意味での詩ではない) 詩を書いても詩人になれないのは理の当然であろう。後段もまた言わずもがなのことだ。では、なぜリルケはこんなことを言い、何かしら心に響いてくるものがあるのはどうしてなのか。私は、この文をこう考える。前段の「詩」は似て非なる詩であり、後段の「詩」こそが真の詩、そして「詩人」はどちらも真の詩人と解して初めて腑に落ちるのではないか、と。腑に落ちるだけでなく、心に響く理由は、前段と後段の「詩」の意味の違いを隠したこと

と同時に、詩人「になる…」／詩人「が書く」という句を使ったことで、この真の「詩人」が生来天与の才によるものだと信じるリルケの真情が伝わってくるからに違いない。彼は、「若い詩人について」(『世界の詩論』より)において「私は、詩が単なる人為の産物だとは、さらさら思わない。むしろ、既に私たちのあいだに(眼に見えぬ星座のように)かかっていたある精神的な要因が、詩的靈感に打たれた者の魂の中に顕現するのではないか」(『リルケ全集 9』川村二郎訳 1960)と言っていることからそれが分かる。

詩人が生まれつきの才能によるものかどうかについては議論もあろう。しかし、天与の才が大きなウエイトを占めていることは明らかであろう。だが、真の詩人になるためには、天与の才を成熟させる努力が必要である。その最たる努力の対象は、「読者に様々な感情を喚起させる」(田辺先生)に足る言語能力と言葉の使用能力であろう。リルケがその作品を読むためにデンマーク語を独習したと伝えられるほど傾倒したキェルケゴールには、これらの条件がすべて備わっていた。したがってキェルケゴールは真の「詩人」といえる。「詩人が詩を書くのだ」と言うリルケに従えば、キェルケゴールの優れた詩文を「詩」と呼んで不足はないであろう。だが彼は、いわゆる「詩」を書かず、自らの「詩人性」を拒否しながらついには自らを“kun en Digter”と名乗った。「詩人哲学者」と呼ばれるようになったキェルケゴールが体現した、これが詩の逆説的弁証法ということなのかもしれない。

さて、はるか昔二十歳の誕生日に、『反復』を読み終わって以来、キェルケゴールに対する関心は続いている。思えば、和歌(短歌)に対する興味もこれとほぼ並行して続いてきた。和歌は、日本の代表的な韻文であり、詩である。これが田辺ゼミで学んだ北欧詩への興味に繋がった。「ゼミ論集」の第5号(2004/3)、6号(2005/3)に、それぞれ「富嶽百景」、「百蝶乱舞」と銘打って富士山短歌 100 首、蝶短歌 100 首を編んで紹介したことも懐かしく思い出される。私のキェルケゴール理解は、詩的要素の強い『反復』と和歌・北欧詩が重なったところにその原点があるように思う。以来、キェルケゴールの詩・詩人観および和歌・北欧詩に心を寄せるとともに、「詩・詩人とは何か」にも関心を持ち続けてきた。詩人哲学者と言われながら、キェルケゴールの「詩・詩人観」に焦点を合わせた研究は世界的にも殆ど見当たらないし、明治末期に日本に紹介されたキェルケゴールも一貫して哲学者・宗教思想家だった。今回の拙稿は、そのキェルケゴールの「詩」と「詩・詩人観」を彼の生涯の著作を辿って検証し、まとめておくことであった。この目的は、ほぼ達成出来たように思う。

これも念願だったデンマーク訪問(2004 年)から十四年経った。この間、2006 年 3 月にはキェルケゴールの『反復』に関する修論を提出して後期課程に進み、2011 年 3 月発行の IDUN 19 号には S. Å. Madsen の *Lad tiden gå* (1986)における「反復」を『反復』のそれに比較した研究ノートに掲載する榮に浴した。この五年間の間には、2 回目のデンマーク訪問(2008 年)とドイツのベルリン訪問(2010 年)を果たしてキェルケゴールの足跡反復を完結する一方、「ゼミ論集」には幾つかのデンマーク詩の翻訳のほか、4 編のレポート①「Karen Blixen, "De blå øjne" 解説」(2006/3 の第 7 号)②「Herman Bang, *Irene Holm* のイロニー・フモール・反復・印象主義」(2007/3 の第 8 号)③「デンマークの人魚たち」(2008/3 の第 9 号)④「鳥たちの変容」(2009/3 の第 10 号)を掲載させていただいた。そのいずれもが多

かれ少なかれキェルケゴールの「反復」に関わる勉強の成果だった。こうして今、ゼミ論集の記念すべき第 20 号に寄せる拙稿を書き上げたところである。

あらためて振り返ると、わが第二の大学生活は 2000 年の 4 月から始まった。60 歳だった。休学期間を含めて 2012 年の 3 月には院の後期課程を退学したが、その後も田辺ゼミとは何かと縁があり今日に至っている。21 世紀の私の 19 年は、田辺ゼミとともにあったと言っても過言ではない。ゼミ論集発刊(2000/3)以来の田辺ゼミ卒業生・現役生 109 人のうち、105 人までがゼミで実際に顔を合わせた仲だ。二年間一緒に学んだ人たちもあれば、年に一、二回同席しただけという人たちもあるけれど、この歳になってこんなにも多くの若い人たちと共に楽しく文学の勉強が出来たことが奇跡のように思われ、それが私の誇りと歓びになっている。だが、先生や若い人たちにしてみれば、私はさぞや扱いにくい老学生だったことだろう。今更ながら先生と 105 人の人たちに心からの感謝とお詫びの気持ちを表したい。そして、田辺ゼミの弥栄を祈ります。

あとがき — デンマークの懐かしき人々 —

初めてデンマークを訪れたのは 2004 年の 7 月だった。Nyhavn にほど近い Hotel City にきっちり一ヶ月滞在して、主としてキェルケゴールの足跡を反復する一人旅だった。Gilleleje の海も Hillerød の湖も Frederiksberg の森も感慨深かったが、やはり一番気に入ったのはキェルケゴールが生まれ暮らし恋をして本を書いたコペンハーゲンの街だった。毎日朝から晩まで飽くことなく歩き回ったコペンハーゲンにはいつも風が吹いていて、その頃読んだ詩人長田弘の言葉「アンデルセンが好きなのは、物語のなかにいつも風が吹いているからだ」が思い出された。今、B・アナスンの詩を読んで、あのときも何人もの自転車か風の中を疾走していたのを思い出した。あの中に、キェルケゴールもいたのかもしれない。どうして声をかけてくれなかったのだろう。

自転車のキェルケゴールには会えなかったが、Christianshavn へ行ったとき、駅前広場のベンチで救世サークルのリーダーだという、どこかマーチン先生に似た青年に声をかけられた。Grundtvig が素晴らしいと説く彼にキェルケゴールの方が優れていると主張して議論になった。私は、何を話したのだろう。言語音痴の私は、今もってデンマーク語が聴けないし話せない。十四年も前のあの頃、デンマーク語が喋れたはずがない。だが、喋る勇氣だけは持ち合わせていたように思う。サークルに入れと誘う彼に、神の前ではサークルなど要らないのではというようなことを言ったと思う。彼は、私の意見よりもデンマーク語に辟易したのだろう、メールアドレスを残して去って行った。

「レストラン東京」でピア先生、ヤーヌス先生と再会して食事を共にできたのも嬉しかった。留学中の稲垣くん・萬屋くんとは一夕の歓を尽くすことも出来た。田辺先生とも旧知で、コペンハーゲンに日本料理の元祖「レストラン東京」を開いたご主人中沢氏も印象に残る。私のキアゲゴの発音がまずいのか、キェルケゴールのモニュメントの在り処を尋ねて、行ってみたら墓地だったということが一再ならずあった。Gilleleje の海岸通りで記念碑の場所を教えてくれた乳母車の若い母親の美しさと親切を今も忘れない。Århus までの電車で同席

した女性とはいろいろ話した。古きユランの農婦の面影漂うおばさんだった。「Århus では、カトリック教会へ行きンさい」という言葉が耳に残っている。改札口を出たあと、私の行方を懸念してか、駅前ですっと見送ってくれていた姿が忘れがたい。

滞在中の後見人になってくださった田辺先生の留学時代のデンマーク・ペアレント Preben と Lis には大変お世話になった。一日、田辺先生のお友達で長くコペンハーゲンに住む結花さんの案内で Rødovre にあるその親日家のお宅を訪問した。庭の柿の木にカタツムリが這っていた。一寸法師が蓋に乗った南部鉄製の香炉をお土産に持って行ったのだが、食事どきその一寸法師の話をお聞かせしてくれと言われて大いに困惑した。その日、同家には私のほかに三人のお客もいて、聴衆は六人。私は、うろ覚えもいいところの「一寸法師」を話し出したが頓挫また頓挫、その絶望の極みに結花さんの日本語の声が響いた。「久保田さん、悪いけどゼンゼン分かりません!」。文字通りとどめの一声であった。物語はまだ京にも遠く、姫も鬼も登場していなかったが、それは早々と現われて窮地を救ってくれた打出の小槌だった、と今では思える。Lis は、そのときも優しげな笑顔で穏やかに頷いてくれていた。その手作り(エスニック?)料理も美味しくておかわりしたくらいだった。Preben は、どこか自足したようなところのある人で、悠揚迫らぬ態度・風貌は絵や写真で見るソクラテスまたは乃木大将そっくりだった。彼は、「キェルケゴールは難しくて毛嫌いする者が多いけれど、頻繁に出版されるキェルケゴール本はみな不思議によく売れる」と言っていた。その Preben も Lis も今はこの世にない。

かれこれ大小七つのトラブルにも巻き込まれたが、すべての所持金品をショルダーバッグごと盗まれたときは動転した。部屋の鞆に入れていたパスポートとポケットの携帯が難を逃れたのが不幸中の幸いだった。Preben 夫妻をはじめ結花さん、田辺先生にも大いにご心配をかけたし、田辺先生から聞かれたのか、オーゼンセに出張してきておられた新谷先生からもローマ字のお見舞い携帯メールを頂いた。このトラブルは、予定していなかった警察や大使館訪問を実現させた。「知りたくないのか?」と逆に私が言うまで盗難品目を訊こうともしなかったコペンハーゲン警察の長身イケメン警官、直ちに帰国することを勧めると言い放った冷淡な大使館員の遠藤君、そのとき知り合って Thorvaldsen's Hus でランチを共にした大東さんのお友達の外交官佐藤嬢、みんなどうしているだろう。このときの泥棒はデンマーク人ではないと信じたし、空港でチケットを再発行してくれたレギーネに似た SAS ブースの女性担当者はデンマーク人だと信じた。キェルケゴールのデンマークに悪人はいないと思おうとしていた。そんな馬鹿なことをと、のちに笑い飛ばしたのはベンテ先生だった。だが、このレギーネは、私が(Preben に借りた)1000kr.しか持ち合わせていないので日本からの送金があるまでチケットを預かってほしいと頼むと、「それがあなたの命のお金なのね、手数料は要らないわ、私の気持ちよ」と言って、750kr.をタダにしてくれたのだ。私は感激して思わず彼女の手を握りしめていた。この災難では、外国での無一文が心細かったのに、ホテルも大使館も警察も JTB も極めて冷たかったからだ。帰国の際、日本から持って行っていた一對の扇子をお礼にプレゼントしようと空港内を走り回ったが、ついに彼女を見つけることが出来なかった。この扇子は、帰りの飛行機で隣り合わせた、博多での国際

会議に向かう，ルンド大学でマイクロエレクトロニクスの研究をしているというスウェーデン青年 Thomas Olsson 君の手に渡った。

レギーネを かの人と呼びし あの頃を 反復すれば よみがへる詩

2018 年 11 月 11 日 SAK 忌に

本文で引用して挙げた以外の参考文献(順不同)

萩原朔太郎『詩の原理』(新潮文庫 1954)／市倉宏祐『ハイデガーとサルトルと詩人たち』(1997)／谷川俊太郎・長谷川宏『魂のみなもとへ 詩と哲学のデュオ』(2001)／小嶋謙四郎『哲学と詩』(1999)／大谷愛人『キルケゴール教会闘争の研究』(2007)／K. マルクス，井上正蔵ほか訳『マルクス全詩集』(1983)／F.W. ニーチェ，秋山英夫・富岡近雄訳『ニーチェ全詩集』(2011)／M. ハイデッガー，高坂正顕・辻村公一訳『ハイデッガー選集 8』(1960)／D. バックバインダー，菅野弘久訳『いま詩をどう読むか』(1994)／ハル・コック，小池直人訳『グルントヴィ』／『ウナムーノ著作集』／キェルケゴールの SKS および邦訳 4 全集

第四部

田辺ゼミ論集

目次一覧



1999 年度

1. Abildgaard, Ove	-----	1
"Valmue"		(大東万寿美)
2. Bjørnvig, Thorkild	-----	3
"Lykkestrejf"		(新田活子)
3. Desnos, Robert	-----	5
"Sidste digt"		(与村知子)
4. Ditlevsen, Tove	-----	7
"Sommernat"		(新田活子)
5. Hein, Piet	-----	10
"Gruk"		(川崎知里)
6. Jæger, Frank	-----	21
"Ud af en vinter"		(大東万寿美)
7. La Cour, Poul	-----	23
"Fuldmaane"		(川崎知里)
8. Nordbrandt, Henrik	-----	25
"Paa højsletten"		(茨木香保里)
9. Sarvig, Ole	-----	27
"Violiner"		(茨木香保里)
"Sen eftermiddag"		(与村知子)
10. Wivel, Ole	-----	31
"Skabelse"		(川崎知里)

2000 年度

はしがき -----	田辺欧
1. Brandt, Jørgen Gustava -----	1
	萬屋健司
2. Holstein, Ludvig -----	4
	山内麻衣子
3. Jæger, Frank -----	7
	藤村勇貴
4. La Cour, Paul -----	9
	茨木香保里
5. Meyer, Tove -----	14
	永野香織
6. Munch-Petersen, Gustaf -----	16
	藤村勇貴
	永野香織
7. Nordbrandt, Hentil -----	23
	山内麻衣子
8. Rifbjerg, Klaus -----	25
	茨木香保里
9. Sarvig, Ole -----	28
	山内麻衣子
10. Schade, Jens August -----	30
	萬屋健司
11, Thomsen, Grethe Risbjerg -----	34
	藤村勇貴

2001 年度

I. デンマークの詩

Bukdahl, Lars	山内麻衣子
“FILM”-----	1
Bødker, Cecil	手島杏子
“Afspænding”-----	3
Ditlevsen, Tove	永野香織
“De evige tre”-----	5
”Selvportræt”-----	8
Højholt, Per	福田敦史
”Korrespondance”-----	16
Nielsen, Morten	藤村勇貴
”Døden”-----	19
Nordbrandt, Henrik	大東万須美
”Landgang”-----	22

II. 日本の詩

茨木のり子	山内麻衣子
自分の感受性くらい -----	1
金子みすゞ	手島杏子
大漁 -----	4
立原道造	市原裕子
うたふやうにゆつくりと -----	6
萩原朔太郎	市原裕子
春夜 -----	6
谷川俊太郎	福田敦史
きみ -----	9
大東万須美	
くりかえす -----	11
中原中也	藤村勇貴
憔悴 II -----	13
死別の翌日 -----	15
西脇順三郎	福田敦史
雨 -----	16
萩原朔太郎	新田活子
風船乗りの夢 -----	17
まど・みちお	市原裕子
ゴキブリ -----	19
うさぎ -----	19
虹 -----	20
宮沢賢治	手島杏子
肺炎 -----	22
吉田一穂	手島杏子
母 -----	24
吉野弘	手島杏子
I was born -----	26

2002 年度

I. デンマークの詩

Hein, Piet	市原裕子
“Skabelse” -----	2
Jørgensen, Johannes	萬屋健司
”Høstdrøm” -----	5
”Sankt Hans Nat” -----	9
Kristensen, Tom	久保田勝己
”Henrettelsen” -----	12
Nielsen, Morten	久保田勝己
”Foraarets Horisont” -----	15
O’Hara, Frank	枇谷玲子
”Hvorfor jeg ikke er maler” -----	16
Rasmussen, Halfdan	西由香利
”Regnen” -----	20
Steen, Vagn	福田敦史
”Ojne” -----	23
Tafdrup, Pia	枇谷玲子
”Frosrbrev” -----	26
Thomsen, Søren Ulrik	福田敦史
”Levende” -----	29

II. 日本の詩

竹内てるよ	市原裕子
海のオルゴール -----	1
室生犀星	西由香利
めぐみを受ける -----	5
八木重吉	久保田勝己
妻に与う -----	7
吉野秀雄	久保田勝己
「晴陰集」より -----	7

2003 年度

I. デンマークの詩・小説

Andersen, Benny	稲垣和哉	
"Ordet fred" -----		1
Borum, Poul	西由香利	
"EN SENSOMMERDAG" -----		7
Christensen, Inger	村嶋美穂	
"Under en by" -----		11
Drachmann, Holger	大東万須美	
"Jeg hører i Natten" -----		14
Heinesen, William	西由香利	
"Pigan og Maanen" -----		17
Larsen, Thøger	石井麻子	
"Lærkens Morgensang" -----		21
Munch-Petersen, Gustaf	石井麻子	
"Skæret" -----		24
Nordbrandt, Henrik	久保田勝己	
"Lille morgenbøn" -----		26
"At sove i dine arme" -----		27
"Løgne" -----		29
Stuckenberg, Viggo	村嶋美穂	
"Foraarsnat" -----		32
Turéli, Dan	手島杏子	
"DEN DAG KIRSEB ÆRTR ÆERNE BLOMSTREDE" -----		36
"PAS PÅ PENGENE!" -----		42
Vizki, Morti	福田敦史	
"ANSIGTET" -----		47
"Forår" -----		49
 HENRIK PONTOPPIDAN: ØRNEFLUGT	 石井麻子, 村嶋美穂	
-----		52

II. 日本の詩

石垣りん	福田敦史
用意 -----	2
表札 -----	4
井上靖	西由香利
雪 -----	6
川崎洋	石井麻子
純白の -----	9
海で -----	9
新川和江	手島杏子
わたしを束ねないで -----	11
谷川俊太郎	村嶋美穂
明日 -----	14
草野心平	久保田勝己
富士山 作品第参 -----	16
マグノリア富士 -----	16
金子光晴	久保田勝己
富士 -----	18
富嶽百景——富士山短歌百人一首—— -----	20

2004 年度

Christensen, Inger	
Sommerfugledalen -----	1
(訳：久保田勝己, 手島杏子, 石井麻子, 枇谷玲子, 西田祐三, 濱田さやか)	
Oehlenschläger, Adam	
Yduns Frelse (訳：久保田勝己) -----	7
Aarestrup, Emil	
Sommerfugle jeg elsker at fange et eneste Misgreb (訳：久保田勝己) -----	14
Larsen, Thøger	
Middag (訳：久保田勝己 & 手島杏子) -----	17
La Cour, Poul	
Aurorasommerfuglen (訳：久保田勝己) -----	21
Hein, Piet	
Sommerfuglen (訳：久保田勝己 & 手島杏子) -----	24
Rasmussen, Halfdan	
Sommerfuglen (訳：久保田勝己 & 手島杏子) -----	26
濱田さやか -----	32
西田祐三 -----	42
枇谷玲子 -----	47
手島杏子 -----	52
久保田勝己 -----	52
日本の蝶詩四篇	久保田勝己編
北村透谷「蝶のゆくへ」 -----	2
安西冬衛「春」 -----	2
三好達治「喪服の蝶」 -----	3
尾崎喜八「山荘の蝶」 -----	3
百蝶乱舞一蝶短歌百人一首	久保田勝己編
-----	5

2005 年度

はしがき ----- 田邊 欧 1

第 1 部：小説を読み解く

Mogens J.P.Jacobsen の場合

『モーンズ』の影を追って ----- 奥山裕介 5

『モーンズ』研究（前編） ----- 西田祐三 12

De blå øjne Karen Blixen の場合

De blå øjne 分析 ----- 石井麻子 22

De blå øjne における小説技法と分析 ----- 稲田博子 26

『青い目』におけるフェミニズム批評 ----- 榎波由梨 31

De blå øjne 解説 - 廣野由美子『批評理論入門』に依拠しつつ - ----- 久保田勝己 35

De blå øjne について ----- 濱田さやか 43

Hva' for en hånd vil du ha' Vita Andersen の場合

Hva' for en hånd vil du ha' の批評 ----- 関口曜子 49

Hva' for en hånd vil du ha' の分析 ----- 村嶋美穂 53

3 作品の総合批評

3 つの物語考 ----- 手島杏子 57

第 2 部：ロマン主義時代の詩を読む

Steen Steensen Blicher ----- 西田祐三 65

Hiemvee (1814) (訳) ----- 稲田博子 66

Bernhard Severin Ingemann ----- 石井麻子 67

Aftensang (1823) (訳) ----- 奥山裕介 68

Emil Aarstrup 濱田さやか 70

Du! Du! Du Søde (1838) (訳) ----- 関口曜子 71

Christian Winther ----- 村嶋美穂 72

Min Skat (1840) (訳) ----- 榎波由梨 73

2006 年度

はしがき ----- 田邊 欧 1

第 1 部 : *Irene Holm* をテキストとして小説を読み解く

<i>Irene Holm</i> 分析 その二面性から -----	江見麻理子 5
<i>Irene Holm</i> における描写分析 -----	後藤美帆 9
<i>Irene Holm</i> における創作特性分析 -----	中村麻生 13
<i>Irene Holm</i> の世界を分析するーリアリズムと想像力ー -----	藤光慎悟 17
<i>Irene Holm</i> の登場人物から見た小説の分析 -----	稲田博子 21
<i>Irene Holm</i> の魅力 -----	榎波由梨 27
『イレーネ・ホルム』のために -----	奥山裕介 31
<i>Irene Holm</i> を読み終えて -----	関口曜子 39
イロニー/フモール、反復、印象主義ー <i>Irene Holm</i> を読んで -----	久保田勝己 43

第 2 部 : 近・現代デンマーク詩を読む

Ole Sarvig : Vild Angst (1944) -----	江見麻理子 55
B. S. Ingemann : Giv Tid (1831) -----	後藤美帆 57
Schack Staffeldt : Ved Søen (1894) -----	中村麻生 59
Halfdan Rasmussen : Den store jord (1963) -----	藤光慎悟 61
Marianne Larsen : Vent (1975) -----	稲田博子 63
Ove Abildgaard : Solhjul (1964) -----	榎波由梨 66
Folkevisen : Den forskudte pige -----	奥山裕介 68
Piet Hein : Du skal plante et træ (1960) -----	関口曜子 72
Kaj Munk : Min unge Elskede kaster op (1946) -----	久保田勝己 74

2007 年度

はしがき ----- 田邊 欧 1

第1部・その1：デンマーク編 H.C.Andersen "Den lille Havfrue" を読み解く

ふたりの著者と作品の比較 -----	片岡沙知 5
"Den lille Havfrue"・ <i>Undine</i> の2作品における分析 -----	工藤麻理子 10
アンデルセンの人生経験や時代背景からとらえる人魚姫 -----	熊澤朋子 14
自然で神聖な道とは——ひとつの解釈の試み -----	林田裕紀子 18
アンデルセンの「人魚姫」とフーケーの『水妖記』 -----	森本紗世 27
揺れる人魚姫 -----	江見麻理子 30
「人魚姫」と「リトルマーメイド」 -----	中村麻生 36
Andersen "Den lille Havfrue" 分析 -----	藤光慎悟 40
近代ゲルマン文学における分裂者の問題 -----	奥山裕介 45
デンマークの人魚たち -----	久保田勝己 60

第1部・その2：スウェーデン編 Edith Södergran *Dikter* を読み解く

Edith Södergran の考える死について -----	筏津靖子 77
Edith Södergran の中にある女性像の探求 -----	若林洋子 82
<i>Sommarboken</i> の3篇の考察 -----	鈴木郁子 86
Edith Södergran の詩にみる苦しみ以外のもの -----	肥田順子 90

第2部・その1：デンマーク編 Karen Blixen "Peter og Rosa" をめぐって

"Peter og Rosa"——愛という観点から -----	江見・片岡・鈴木・森本 97
「ペーターとローサ」——「裏切り」をめぐって -----	工藤・中村・林田・藤光 109

第2部・その2：スウェーデン編 Selma Lagerlöf "Luftballogen" をめぐって

セルマ・ラーゲルレーヴの"Luftballogen"にみる死 --	筏津・太田・鈴木・肥田・若林 123
-----------------------------------	--------------------

第3部：デンマークの詩を読む

クロウタドリの詩 — Blicher から Riffbjerg まで -----	久保田勝己 135
--	-----------

2008 年度

はしがき ----- 田辺欧 1

第1部・その1：スウェーデン編（第1期レポート）

Edith Södergran と“神”-----	穴見すばる 5
“Kärlek och spannmål”をめぐる一考察-----	三谷功生 10
Edith Södergran の詩に見られる悲しみについて-----	安田祐子 14
Johan August Strindberg の作品を考える-----	筏津靖子 18
ストリンドベリー女性・結婚-----	太田絵美 23
“Kärlek och spannmål”「愛と糧」をめぐる考察-----	若林洋子 27

第1部・その2：デンマーク編（第1期レポート）

鷺の死についての一考察-----	今井仁美 33
「みにくいアヒルの子」と「鷺の飛翔」における二人の作家の比較-----	奥村佳子 37
間テキスト性によるテキスト研究－“Den grimme Ælling”-----	北垣佳代 41
「みにくいアヒルの子」と「鷺の飛翔」の間テキスト性をめぐる一考察-----	田中沙知 46
「みにくい小むすめ」に教訓はあるか－自我同一性の確立に関する一考察--	野々山貴美子 51
二つの物語の間テキスト性について-----	福本菜帆 58
Andersen と Pontoppidan－両作家の作品における分析-----	工藤麻理子 62
“Den grimme kælling”の持つ morale-----	後藤美帆 65
「みにくいアヒルの子」と、「鷺の飛翔」、「みにくい小娘」から読み解く-----	前田靖子 70
Pia Tafdrup の詩-----	林田裕紀子 73
Henrik Nordbrandt の詩-----	久保田勝己 80

第2部・その1：スウェーデン編（第2期レポート）

Edith Södergran の詩訳 Två vägar-----	筏津靖子 85
Avsked-----	太田絵美 86
Kärlek-----	若林洋子 88
ラーゲルクヴィストの二編の短編から考察する-----	筏津・太田・若林 89

第2部・その2：デンマーク編（第2期レポート）

Steen Steensen Blicher の詩-----	今井仁美 101
Morten Nielsen の詩-----	北垣佳代 105
Inger Christensen の詩-----	田中沙知 109
Tove Ditlevsen の詩-----	野々山貴美子 116
Jens August Schade の詩-----	熊澤朋子 125
間テキスト性 “Den foruroligende ælling” から見る-----	後藤美帆 129
Gåsefabel を読み解く-----	前田靖子 133
間テキスト性と“tradition”について-----	奥山裕介 137
鳥たちの変容-----	久保田勝己 142

2009 年度

はしがき ----- 田辺 欧 1

第 1 部・その 1：デンマーク編（第 1 期レポート）

影と民話の関係についての一考察-----	萩坂・佃・今井 5
シャミッソーと「影」をめぐる一考察 -----	片岡・吉田 13
アンデルセンの「影法師」の考察-----	北垣・田中・宮城 20
“Ringen”における女性の自我を巡る考察-----	熊澤・森本 27
「指輪」における光と影について—Lise の無意識との対決 -----	野々山貴美子 36

第 2 部・その 1：デンマーク編（第 2 期レポート）

Pia Tafdrup の詩-----	萩坂菜々子 43
Tom Kristensen の詩 -----	佃典子 48
Jens August Schade の詩 -----	吉田成志 54
Johan Ottosen の詩 -----	奥村佳代 72
Peter Laugesen の詩-----	福本菜帆 64
Christian Winther の詩-----	今井仁美 68
Morten Nielsen の詩-----	北垣佳代 72
Inger Christensen の詩 -----	田中沙知 75
Henrik Nordbrandt の詩 -----	片岡沙知 84
Benny Andersen の詩-----	工藤麻里子 90
Ole Wiwel の詩 -----	熊澤朋子 94
Tove Ditlevsen の詩 -----	森本紗世 100

第 2 部・その 2：スウェーデン編（第 2 期レポート）

August Strindberg Sagor から”Sjusovare”の翻訳-----	穴見・三谷・安田 107
トーベ・ヤンソン『誠実な詐欺師』の考察 -----	穴見すばる・三谷功生・安田祐子 112

2010 年度

はしがき ----- 田辺欧 1

第 1 部：スウェーデン編

August Strindberg の詩-----	徳原佳子 5
Barbro Lindgren の詩 -----	三谷功生 7
Harry Martinson の詩 -----	安田祐子 9
Maria Gripe <i>Tre trappor upp med hiss</i> の作品紹介-----	赤木愛実 11
Elsa Beskow <i>Årets saga</i> の作品紹介 -----	佐藤佳奈 13
<i>Årets saga</i> の全訳 -----	赤木・佐藤・徳原・三谷・安田 15

第 2 部：デンマーク編

バベットの晩餐会—この物語がもつ魅力-----	井上みゆき 45
Klaus Rifbjerg “Såret”の考察-----	櫻木絢子 51
Dorte Karrebæk 作品研究—大人をひきつける絵本の魅力—-----	西村侑子 57
Helle Helle の描いた悲劇—多様な解釈の一つとしての考察-----	宮城悠旗 69
Tove Ditlevsen の詩 -----	荻阪菜々子 75
“マッチ”が象徴するものについての一考察-----	佃典子 79
“Historien om en Moder”と、『ある母親の物語』、『母親』 -----	吉田成志 87
Bent Haller 作品研究—リアリズムからファンタジーへ-----	奥村佳子 95
“Patienten”にこめられた訴え -----	福本菜帆 101

2011 年度

はしがき ----- 田辺欧 1

第1部・その1：デンマーク編（第1期レポート）

Lise Sørensen の詩今 -----	川陽介 5
Pia Tafdruf の詩 -----	鹿倉麻未 9
Friedrich Hölderlin の詩 -----	川原知己 13
Carsten René Nielsen の詩 -----	中川真麻 16
Jens Peter Jacobsen の詩 -----	藤岡愛実 20

第1部・その2：デンマーク編（第2期レポート）

Den blomstrende have における Mette の人物像と役割についての一考察 -----	今川陽介 27
Kim Fupz Aakeson <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> の考察 -----	鹿倉麻未 31
Den blomstrende have に関する考察 -----	川原知己 38
書籍から映像へ～ <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> と Rene Hjerter～ -----	中川真麻 42
<i>Alting og Ulla Vilstrup</i> 作品中の映画 Hjerterfri の原作と映画での描かれ方の比較 -----	藤岡愛実 45
Den blomstrende have に対する様々な見方 -----	橋本詩織 48
Ungdomsroman <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> -----	板倉亮平 52
<i>Alting og Ulla Vilstrup</i> 分析——省略箇所に見る原作と映画の違い -----	宮城悠旗 56
“Den blomstrende have”の自然、風景描写における考察 -----	奥村佳子 61

第2部・その1：スウェーデン編（第1期レポート）

Erik Blomberg の詩 -----	早田有里 69
Harry Martinson の詩 -----	丹羽美咲 72
Pär Fabian Lagerkvist の詩 -----	弘瀬祐也 75
Edith-södergran の詩 -----	渡邊友里 78

第2部・その2：スウェーデン編（第2期レポート）

絵本『どうぶつそうぎやさん』（Alla döda små djur） -----	北田、小廣、徳原、早田、丹羽、弘瀬、渡邊 83
---	-------------------------

2012 年度

はしがき ----- 田辺 欧 1

第 1 部・その 1：スウェーデン編（第 1 期レポート）

Edith Södergran の詩	-----	菊地 灯 5
Gunnar Ekelöf の詩	-----	関原 瞳 9
Birger Sjöberg の詩	-----	徳原 佳子 13
Pär Lagerkvist の詩	-----	中谷内 なつみ 16
Viktor Rydberg の詩	-----	丹羽 美咲 21
Thomas Tranströmer の詩	-----	弘瀬 祐也 29
Edith Södergran の詩	-----	弓場 麻妃 32
Harry Martinson の詩	-----	渡邊 友里 35

第 1 部・その 2：デンマーク編（第 1 期レポート）

Orla Brudgård Povlsen の詩	-----	板倉 絵理 41
Tove Ditlevsen の詩	-----	板倉 亮平 45
Sensommervise の詩	-----	井上 みゆき 51
Pia Tafdrup の詩	-----	鹿倉 麻未 55
Jens Peter Jacobsen の詩	-----	川原 知巳 60
Per Højholt の詩	-----	権田 奈津美 64
Benny Andersen の詩	-----	櫻木 絢子 67
Jens Fink-Jensen の詩	高尾 久美子 71	
Halfdan Rasmussen の詩	高畠 知里 75	
Tove Ditlevsen の詩	中川 真麻 79	
Uffe Harder の詩	-----	中川 麻琴 83
Ole Sarvig の詩	-----	西村 侑子 86
Naja Marie Aidt の詩	-----	橋本 詩織 90
Piet Hein の詩	-----	藤岡 愛実 95

第2部・その1：スウェーデン編（第2期レポート）

Astrid Lindgren : *I Skymningslandet*

『夕暮れの国で』 ----- （訳者：菊地・徳原・丹羽・弘瀬・渡邊） 101

スウェーデン国教会讃美歌集の変遷 ----- 菊地灯 106

第2部・その2：デンマーク編（第2期レポート）

Henrik Pontoppidan : *Ørneflugt*

『ワシの飛翔』 ----- （訳者：板倉絵理・権田・高畠） 123

編集あとがき ----- 久保田勝己・奥村佳子 126

2013 年度

はしがきーゼミ論集 15 号ー 田辺欧 2

第 1 部 北欧の詩

Kirsten Thorup の詩	板倉絵理 4
Tove Ditlevsen の詩	岡崎瑛里香 8
Pär Lagerkvist の詩.....	岡本知子 12
Harry Martinson の詩.....	君嶋美佳 21
Klaus Rifbjerg の詩	畔柳祥子 25
Gunnar Ekelöf の詩	小林紗季 24
Piet Hein の詩	権田奈津美 35
Søren Ulrik Thomsen の詩	高尾久美子 39
Josef Julius Wecksell の詩.....	高橋いずみ 41
Grethe Risbjerg Thomsen の詩	田中優衣 45
Fredrika Runeberg の詩.....	中村みのり 49
Pär Lagerkvist の詩.....	早田有里 53
Tomas Tranströmer の詩	平井千裕 57

第 2 部

デンマーク編

Globryllup.....	監訳 鹿倉麻未 62
“En stor dag” Henrik Pontoppidan.....	板倉絵理・権田奈津美 68
絵本が秘める大人への影響力とは	岡崎瑛里香 73
“Irene Holm”とバレエの関係性をひもとく	畔柳祥子 76
デンマーク文学における「人魚」の変遷を巡って.....	中川麻琴 80

スウェーデン編

Att döda ett barn.....	早田有里・菊地灯 83
Otto Benzon の詩	君嶋美佳 92
『秋のソナタ』について①	小林紗季 96
セルマ・ラーゲルレーヴ 『軽気球』	関原瞳 106
Harry Martinson の詩 “Spökskepp”における「船」のイメージについて	高橋いずみ 112
ストリンドバリ『父』から父母，男女の関係を読解く	中村みのり 117
“Vårvisan” における名付けの働き	中谷内なつみ 122
John Bauer の描く童話.....	弓場麻妃 132

2014 年度

はしがき	田辺欧 1
------------	-------

第一部 北欧の詩

スウェーデン編

Edith Södergran の詩	沖垣みのり 5
Edith Södergran の詩	君嶋美佳 10
Edith Södelgran の詩	小島睦美 14
Edith Södergran の詩	小林紗季 17
Edith Södelgran の詩	齋藤信人 27
Edith Södergran の詩	鈴木優花 30
Edith Södergran の詩	関原瞳 34
Edith Södergran の詩	高橋いずみ 38
Edith Södergran の詩	中村みのり 42
Edith Södergran の詩	中谷内なつみ 48
Edith Södergran の詩	弓場麻妃 54

デンマーク編

Halfdan Rasmussen の詩	植田彩芽 59
Tove Ditlevsen の詩	畔柳祥子 63
Johannes V. Jensen の詩	高畠知里 66
Jens Peter Jacobsen の詩	中川麻琴 70

第二部

スウェーデン編

「自然の障害」"Naturhinder"	監訳：齋藤・鈴木・平井 75
「自然の障害」とは何か ～女性解放の盲点～	齋藤信人 82
"Naturhinder"を読んで	鈴木優花 86
"Naturhinder"における作品の分析	平井千裕 89
終わりの物語 『ムーミン谷の十一月』を読む	中谷内なつみ 93
「トロル」と「ムーミントロール」	弓場麻妃 100

デンマーク編

インゲボー "Ingeborg"	監訳：植田・岡本・田中 107
"Ingeborg"について	植田・岡本・田中 118

2015 年度

はしがき	田辺欧 1
------------	-------

第一部 北欧の詩

デンマーク・スウェーデン編

Edith Södergran の詩	岩田彩 4
Erik Knudsen の詩	岡崎瑛里香 9
YAHYA HASSAN の詩	岡本知子 14
Michael Strunge の詩	兼田実佳 20
Sophus Claussen の詩	高尾久美子 26
Jeppe Aakjær の詩	田中優衣 29
Frank Jæger の詩	鳥羽明里 33
Emil Aarestrup の詩	中川歩果 37
Piet Hein の詩	増田歩実 41
Tove Meyer の詩	吉永梨紗 45

第二部

デンマーク編

Naja Maria Aidt を読む

「憤り」"Ond i sulet"	監訳：兼田・高尾 51
"Ond i sulet" 分析 – "Den blomstrende have" と比較して – ..	鳥羽・中川・増田・吉永 55

Svend Aage Madsen を読む

「惑乱」"Ude af sit gode skind"	デンマーク文学ゼミ 訳／監訳：田中 63
「惑乱」"Ude af sit gode skind" 分析	植田・岡崎・岡本・田中 66

スウェーデン編

Hjalmar Söderberg を読む

Hjalmar Söderberg の生涯、作品と作品観について	岩田・沖垣・小島・鈴木 77
– 『毛皮』の考察を踏まえて–	
映画『ゲアトルーズ』についての一考察	小林紗季 87
– Hjalmar Söderberg の <i>Gertrud</i> との比較から–	
"Pälsen" について	平井千裕 93

2016 年度

はしがき	田辺欧 1
------------	-------

第一部 北欧の詩

デンマーク・スウェーデン編

Christian Winther の詩	伊勢田如奈 5
Svend Grundtvig の詩	今城千慧莉 6
Narcisa Vucina の詩	高瀬真倫 8
Edith Rode の詩	柚木慧帆 9
Harriet Löwenhjelm の詩	有園菜希子 10
Erik Axel Karlfeldt の詩	伊地知俊紀 11
Edith Södergran の詩	岩田彩 12
Elsa Beskow の詩	沖垣みのり 14
Lars Noren の詩	片井優花 15
Gustaf Fröding の詩	小島睦美 16
新出詩人の紹介	17

第二部

デンマーク編

Karen Blixen を読む

「空白の一枚」“Det ubeskrevne blad” 分析	伊勢田・今城・高瀬・柚木 23
---------------------------------------	-----------------

Ida Jessen を読む

「ヴィベケ」“Vibeke”	監訳：兼田・高尾 31
「ヴィベケ」“Vibeke”分析	中川・伊勢田・高瀬・柚木 36

スウェーデン編

Joakim Forsberg を読む

Joakim Forsber 人, 作品について	君嶋・中村 41
「ナチスト」“Nazisten”	監訳：君嶋・中村 45
「ナチスト」“Nazisten”分析	沖垣・小島・齋藤・岩田 52

2017 年度

はしがき田辺 欧 1

第一部 北欧の詩

デンマーク・スウェーデン編

Ove Abildgård の詩	飯村優生 5
Naja Marie Aidt の詩	浅妻夏香 6
Trine Andersen の詩	糟谷有花 8
Inger Christensen の詩	高瀬真倫 10
Sophus Claussen の詩	大島虹歩 11
Per Højholt の詩	吉永梨紗 12
Per Lange の詩	今石茉那 13
Thøger Larsen の詩	柚木慧帆 15
Harald Landt Momberg の詩	勝矢博子 17
Schack Staffeldt の詩	伊勢田如奈 19
Werner Aspenström の詩	大鋸瑞穂 20

第二部

デンマーク編

Karen Blixen を読む

“Ringene” のオープンエンディングをめぐって	浅妻・飯村・糟谷 25
物語における一粒の真珠の意義	今城・大島・勝矢 34

Tove Ditlevsen を読む

Til mit døde barn	吉永梨紗 43
Drømme	柚木慧帆 46
En kvindes frygt	高瀬真倫 50
Barndommens gade II	鳥羽明里 53
Jaousi	伊勢田如奈 56
Tiden	増田歩実 58

スウェーデン編

Maria Gripe を読む

作品 <i>Annas Blomma</i> をめぐって	有園・伊地知・片井 63
------------------------------------	--------------

第五部

詩翻訳リスト



田辺ゼミ北欧詩・翻訳リスト (1999 年度～)

詩人名(生没年)

詩タイトル(ゼミ論集掲載年)

- ・そのうしろは翻訳者
- ・詩のタイトルの字体は翻訳者に従う
- ・2009 年以降、論集掲載以外の翻訳詩(卒論・ゼミ・授業等で公に発表されたもの)も記載

anonym

Den forskudte pige (Folkevisen i det 13. årh.) (2006)奥山

Emigrantvisa (Vi sålde våra hemman)(2018)中谷内

Abildgaard, Ove (1916～1990)

Valmue (1999)大東

Solhjul (2006)榎波

TIDEN(2017)飯村

Aidt, Naja Marie (1963～)

Jeg vågnede tidligt (2012)橋本

Nu er alt orange(2017)浅妻

Almqvist, Carl Jonas Love (1793～1866)

Tintomaras sång(2018)大鋸

Var finns en sjö(2018)日野

Andersen, Benny (1929～2018)

Ordet fred (2003)稲垣

Svantes lykkelige dag (2009)工藤

Årstiderne (2012)櫻木

Ude af mig selv(2018)久保田

Kierkegaard på cykel(2018)久保田

Andersen, Hans Christian(1805～1875)

I Danmark er jeg født(2009)工藤 (卒論所収)

Da hun sang(2018)栗林

Andersen, Fritz (1829～1910)

I skovens dybe, stille ro(2018)今城

Andersen, Trine(1969～)

Hvis du var mig(2017)糟谷

Aspenström, Karl Werner(1918～1997)

Du och jag och världen(2017)大鋸

Benzon, Otto (1856～1927)

Snegl, Snegl! (2013)君嶋

Beskow, Elsa (1874～1953)

Årets saga (2010)赤木、佐藤、徳原、三谷、安田

Sommartid med lust och gamman (2016)沖垣

Bjørnvig, Thorkild (1918～2004)

Lykkestref (1999)新田

Blicher, S. Steensen (1782～1848)

Hiemvee (2005)稲田

Soelsorten (2007)久保田

Præludium (2008)今井

Blomberg, Erik (1894～1965)

Var inte rädd för mörkret (2011)早田

Borum, Poul (1934～1996)

EN SENSOMMERDAG (2003)西

Boye, Karin (1900～1941)

Trädet(2018)片井

Ja visst gör det ont(2018)片井 (論集にも収録)

Trädet under jorden(2018)片井

Bön till solen(2018)片井

Träden(2018)片井

Hur kan förtröstan leva?(2018)片井 (この6篇の詩は2018年度卒論所収)

Brandt, J. Gustava (1929～)

Åndsnævaerelse (2001)萬屋

Bukdahl, Lars (1968～)

FILM (2001)山内

Bødker, Cecil (1927～)

Afspænding (2001)手島

Christensen, Inger (1935～2009)

Under en by (2003)村嶋

Sommerfugledalen (2004)手島、石井、枇谷、浜田、西田、久保田;
田邊先生訳『現代詩手帖 2013.3 月』

ELSKOV (2008)田中

LÆNGSEL (2008)田中

Efter den første morgen (2009)田中

Teksten variabler (2009)田中

Uddrag af Handlingen(2017)高瀬

Claussen, Sophus (1865～1931)

Vilhelm Hammershøi (2013)久保田

Romance (2015)高尾

April(2017)大島

Desnos, Robert (1900～1945)

Sidste digt (1999)与村

Ditlevsen, Tove (1917～1976)

Sommernat (1999)新田

De evige tre(2001)永野

Selvportræt 5 (2001)永野

Ensomme menneske (2008)野々山

DØDENS ÅNDE (2008)野々山

RITUAL (2008)野々山

Gyldenlak- (2009)森本

Til Een (2010)荻阪

GRÆNSEN (2012)中川真

Så tag mit hjerte (2012)板倉亮

MIN NYE KJOLE (2013)岡崎

SIG JA – (2013)岡本

Forårsnat (2014)畔柳

★Ditlevsen 生誕 100 年を記念して(2017)

Til mit døde barn 吉永

Drømme 柚木

En kvindes frygt 高瀬

Barndommens gade II 鳥羽

Jalousi 伊勢田

Tiden 増田

Drachmann, Holger (1846～1908)

Jeg hører i Natten (2003)大東

Ekelund, Vilhelm(1880～1949)

Lunaria(2018)有園

Ekelöf, Gunnar (1907～1968)

Våren (2012)関原

Melancholia (2013)小林

Fink-Jensen, Jens (1956～)

I dag kom sommeren (2012)高尾

Fröding, Gustaf (1860～1911)

Träd och gren (2016)小島

Gelsted, Otto (1888～1968)

Mennesket (2001)市原

Grundtvig, Nikolaj Frederik Severin(1783～1872)

Du, som våged over barnelivet(2009)工藤 (卒論所収)

Det var en lørdag Aften (2016)今城

Harder, Uffe (1930～2002)

Disse dage (2012)中川麻

Hansen, Martin A. (1909～1955)

Kaj Munk (2013)久保田

Hassan, Yahya (1995～)

KONTAKTPERSON (2015)岡本

Hein, Piet (1905～1996)

Gruk (1999)川崎

Skabelse (2002)市原

Sommerfuglen (2004)久保田

Du skal plante et træ (2006)関口

KUNSTEN AT VÆLGE (2012)藤岡

SKAT (2013)権田

ONSDAG-OG-TORSDAGS-MYSTERIET (2015)増田

Ø (2018)堀

Heinesen, William (1900～1991)

Pigen og Maanen (2003)西

Holstein, Ludvig (1864～1943)

Efteraar (2000)山内

Solsort(2007)久保田

Æbleblomst(2018)大島

Højholt, Per (1928～2004)

Korrespondance (2001)福田

Den tydelige solsort(2007)久保田

November (2012)権田

Så og så mange lærker(2017)吉永

Hölderlin, Friedrich (1770～1843)

Halvdelen af livet (2011)川原 (詩は Thorkild Bjørnvig によるデンマーク語訳)

Ingemann, B. Severin (1789～1862)

Aftensang (2005)奥山

Giv Tid (2006)後藤

Jacobsen, J. Peter (1847～1885)

GENREBILLEDE (2011)藤岡

Landskab (2012)川原

Evig og uden Forandring (2014)中川麻

Jensen, Johannes V. (1873～1950)

Envoi (2014)高畠

Joff, Hella & Bry, Martin

En kort, en lang(2009)工藤（卒論所収）

Josephson, Ernst (1851～1906)

Violoncell(2018)山口

Jäderlund, Ann(1955～)

På en åker(2018)渡部

Jæger, Frank (1926～1977)

Ud af en vinter* (1999)大東

Ud af en vinter* (2000)藤村

HYRDINDE (2015)鳥羽

Jørgensen, Finn(1936～) & Jørgensen, Kristen D(1939～)

Sensommervise (2012)井上

Jørgensen, Johannes (1866～1956)

Høstdrøm (2002)萬屋

Sankt Hans Nat (2002)萬屋

Karlefeldt, Erik Axel (1864～1931)

Första Minnet (2016)伊地知

Katz, Janina(1939～2013)

Barnet. Farvel(2018)今石

Kristensen, Tom (1893～1974)

Henrettelsen (2002)久保田

Angst (2009)佃

Knudsen, Erik (1922～2007)

Blomsten og sværdet (2015)岡崎

Krohn, Johan(1841～1925)

Efter Julen(2018)糟谷

la Cour, Paul (1902～1956)

Fuldmaane (1999)川崎

Det uforudsete, Havens morgen (2000)茨木

Aurorasommerfuglen (2004)久保田

Lagerkvist, Pär (1891～1974)

Det är inte gud som älskar oss (2011)弘瀬

Allt är så underligt fjärran idag (2012)中谷内

Du människa som står vid stranden av mig (2013)菊地 (訳者は、この詩を含め詩集 *AFTON-
LAND* の 62 篇#の詩を翻訳して
2013 年度の卒論に収めた)

Det är vackrast när det skymmer (2013)早田

Lange, Per

Nattergal(2017)今石

Larsen, Marianne (1951～)

Vent (2006)稲田

Larsen, Thøger (1875～1928)

Lærkens Morgensang (2003)石井

Middag* (2004)久保田 (訳者は Anne-Marie Mai 選によるこの詩を含む De 10 bedste
danske digte#を翻訳)

Middag*(2017)柚木

Laugesen, Peter (1942～)

(ubetitlet) (2009)福本

Lindgren, Barbro (1937～)

Gärna ville jag vara ett träd (2010)三谷

Havet låter på ett särskilt sätt(2018)三谷

Linnet, Anne(1953～)

Tusind Stykker(2018)藤原

Läckberg, Camilla(1974～)

Förord till *Mord och mandeldoft* (2018)安田

Lütken, Hulda(1896～1946)

DET VAR I DAG(2018)飯村

Löwenhjelm, Harriet (1887～1918)

Är jag intill döden trött, – *uddrag* (2016)有園

Martinson, Harry (1904～1978)

Juninatten (2010)安田

SÖMNEN I SOLEN (2011)丹羽

DEN STORA SORGEN (2012)渡邊

OSALIGA (2013)君嶋

SPÖKSKEPP (2013)高橋い (訳者は、この詩を含め詩集 *Spökskepp* の 6 篇#の詩を翻訳して 2014 年度の卒論に収めた)

Meyer, Tove (1913～1972)

Til en ung tænker (2000)永野

Hænderne (2015)吉永

Jeg går over dagenes spejl(2018)浅妻

Momberg, Harald Landt(1896～1975)

Marine(2017)勝矢

Munch-Petersen, Gustaf (1912～1938)

Fiskeleje (2000)藤村

Marts (2000)永野

Med lukkede øjne (2000)永野

Skæret (2003)石井

Munk, Kaj (1898～1944)

Min unge Elskede kaster op (2006)久保田

Nielsen, C. René (1966～)

Søvn (2011)中川真

Nielsen, Morten (1922～1944)

Døden* (2001)藤村

Foraarets Horisont (2002)久保田

IND I EN STJERNE – (2008)北垣

VI SENDER DANSEMUSIK OM NATTEN (2008)北垣

Dette er sangen om jer og mig selv (2009)北垣

Døden* (2010)北垣

Opstandelsens under (2010)北垣

Jeg ser nu i nat (2010)北垣

Mer end nogensinde (2010)北垣

Dette er ikke døden (2010)北垣

Dette er sangen om jer og mig selv (2010)北垣 (ここまでの 6 篇は卒論所収)

Øjeblik (2012)久保田

Vi kunde ikke blive fra hinanden (2013)久保田

Nordbrandt, Henrik (1945～)

Paa højsletten (1999)茨木

Mediterende kamel (2000)山内

Landgang (2001)大東

Lille morgenbøn (2003)久保田

At sove i dine arme (2003)久保田

Løgne (2003)久保田

New Haven (2008)久保田

Kosmetik (2009)片岡

Fløjtespilleren (2009)片岡

Lille essay om sproget (2013)鹿倉

Violinbyggernes by (2013)鹿倉

Instrumenter (2013)鹿倉 (以上 3 篇は、院ゼミで発表)

Unatur(2018)勝矢

Hjemme(2018)菊井

Norén, Lars (1944～)

Lisbeth, 23 år, in memoriam (2016)片井

Oehlenschläger, Adam (1779～1850)

Yduns Frelse – *uddrag* (2004)久保田

O'Hara, Frank (1926～1966)

Hvorfor jeg ikke er maler (2002) 枇谷

Ottosen, Johan (1859～1904)

Det haver så nyligen regnet (2009) 奥村

Povlsen, Orla Brudgård (1918～1982)

Under horisonten (2012) 板倉絵

Rasmussen, Halfdan (1915～2002)

Regnen (2002) 西

Sommerfuglen (2004) 久保田

Den store jord (2006) 藤光

Solsort (2007) 久保田

Fiskestime (2012) 高畠

NATTEN ER EN GAMMEL MAND (2014) 植田

STORE MØRKE NAT (2014) 植田

Rifbjerg, Klaus (1931～2015)

Citron* (2000) 茨木

Solsort (2007) 久保田

Citron* (2013) 畔柳

Rode, Edith (1879～1956)

Brønden (2017) 柚木

Runeberg, Fredrika (1807～1879)

OLIKA TÅRAR (2013) 中村み

Rydberg, Viktor (1828～1895)

Tomten (2012) 丹羽

Rydstedt, Anna (1928～1994)

Frukost (2018) 竹内

Sandell, Lisa (1832～1903)

Bred dina vida vingar (2018) 伊地知

Sarvig, Ole (1921～1981)

Violiner* (1999) 茨木

Sen eftermiddag (1999) 与村

Violiner* (2000) 山内

Vild Angst (2006) 江見

Regnmaaleren (2012) 西村

Schade, J. August (1903～1978)

I den vidunderlige verden (2000) 萬屋

København liv (2000) 萬屋

Min unge elskede (2008) 熊澤

Den himmelske sol (2008) 熊澤

GUDINDEN OG SOLDATEN (2009) 吉田

Sjöberb, Birger (1885～1929)

FINNS NÅGOT VATTEN... (2012) 徳原

Staffeldt, Schack (1769～1826)

Ved Søen* (2006) 中村

Ved Søen* (2017) 伊勢田

Steen, Vagn (1928～)

Øjne (2002) 福田

Strindberg, August (1846～1912)

Välkommen åter snälla sol (2010) 徳原

Strunge, Michael (1958～1986)

Det kommende (2015) 兼田

Stuckenberg, Viggo (1863～1905)

Foraarsnat (2003) 村嶋

Sørensen, Lise (1926～2004)

Enhed (2011) 今川

Södergran, Edith (1892～1923) : 田邊先生が『待ちのぞむ魂』において 141 詩を翻訳

Jag såg ett träd... (2007) 筏津

Det gamla huset (2007) 筏津
Tre systrar (2007) 若林
Tre kvinnor (2007) 若林
Stjärnorna (2007) 肥田
Helvetet (2007) 肥田
Två vägar (2008) 筏津
Avsked (2008) 太田
Kärlek (2008) 若林
Månen (2011) 渡邊
OROLIGA DRÖMMAR (2012) 菊地
MIN SJÄL (2012) 弓場
Stormen (2014) 沖垣
Tantalus, fyll din bägare (2014) 君嶋
Wallensteinprofil (2014) 君嶋
Hyacinten (2014) 小島
Guds moders ros (2014) 小林
Skönhetens stod (2014) 小林
VÄGEN TILL ELYSIUM OCH HADES (2014) 斎藤
Jag tror på min syster (2014) 鈴木
Stjärnan (2014) 関原
Samlen icke guld och ädelstenar (2014) 高橋い
Skum (2014) 中村み
Sol (2014) 中谷内
Martyren (2014) 弓場
Eros tempel (2015) 岩田
APOKALYPSENS GENIUS(Fragment) (2016) 岩田

Tafdrup, Pia (1952～)

Frostbrev (2002) 枇谷
STILLE (2008) 林田
PRISME (2008) 林田
STEMMEN (2009) 荻阪
TRANSPARENTS(2011) 鹿倉
A (2012) 鹿倉
DET FØRSTE BOGSTAV (2012) 鹿倉 (訳者は、詩集 *SPRINGFLOD* の 40 篇#の詩を翻訳して 2014 年度の修論に収めた)

Thomsen, G. Risbjerg (1925～2009)

Maaske en martsnat (2000)藤村

AT ELSKE DIG (2013)田中優

Thomsen, S. Ulrik (1956～)

Levende (2002)福田

Jeg er blevet for lille til mit liv (2013)高尾

Thorup, Kirsten (1942～)

Sangen om hesten (2013)板倉絵

Transtömer, Tomas (1931～2015)

Flygblad (2012)弘瀬

Efter Någons Död (2013)平井

Turéll, Dan (1946～1993)

DEN DAG KIRSEBÆRTRÆERNE BLOMSTREDE (2003)手島

PAS PÅ PENGENE! (2003)手島

Vizki, Morti (1963～)

ANSIGTET (2003)福田

Forår (2003)福田

Vucina, Narcisa (1950～)

Din Farve (2016)高瀬

Wecksell, Josef Julius (1838～1907)

Var det en dröm? (2013)高橋

Winther, Christian (1796～1876)

Min Skat (2005)榎波

Længsel (2009)今井

DU ER SOM BRØD (2016)伊勢田

Wirsén, C.D. af (1842～1912)

Sommarpsalm(2018)菊地

Wivel, Ole (1921～2004)

Skabelse (1999)川崎

Fisken (2009)熊澤

På en jysk station (2009)熊澤

Aakjær, Jeppe (1866～1930)

Majnat (2015)田中優

Aarestrup, Emil (1800～1856)

Sommerfugle jeg elsker at fange et eneste Misgreb (2004)久保田

Du! Du! Du Søde (2005)関口

Blikket (2013)久保田

ANGST (2015)中川歩

(1999～2018 年度) **105 詩人 268 詩** (#を含まず)

最終改訂 2019.02.17 久保田

Læsefrugter – 北欧文学ゼミ論集 – 20 周年記念号

編 集 委 員	田辺欧・有園菜希子・飯村優生・大鋸瑞穂
編集兼発行者	大阪大学 外国語学部 田辺・北欧文学ゼミ © 〒562-8558 箕面市栗生間谷東 8-1-1
印 刷 者	能登印刷株式会社 石川県金沢市武蔵町 7-10 関西営業所 大阪府池田市石橋 2-15-24-61

2019 年 3 月 25 日 発行